
GANTZ ~ like a rolling stone ~

多那彼方

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GANTZ ｛like a rolling stone｝

【Nコード】

N1921X

【作者名】

多那彼方

【あらすじ】

子供の身代わりにトラックに轢かれた大学生、アマミチシユウ天道宗は残酷無比なガンツの世界へと飛ばされることとなった。カラストロフィを知る彼は生き残るためにどう行動していくのか？

原作知識ありのガンツの二次創作です。オリジナルの展開をしていくのでメンバーや展開がマンガとは違ってきます。

小説のガンツマイナスの時代からのスタートですが、小説を読んでいない方でも楽しめるように、また小説のネタばれを極力しないように原作まで持っていきたいと考えています。

徐々に主人公が最強化していきます。
処女作の習作であり、未熟な面もありますが、楽しんで頂けると幸いです。

現在東京チーム編です。

PV6万、ユニーク7千突破しました。

皆さんのおかげです、ありがとうございます。

設定集（前書き）

2章に入った時点での設定集です。

設定集

ガンツSS 設定案

天道宗 22歳 あまみちしゅう ガンツの呼び名：しゅうくん

主人公。最初はガンツの世界に戸惑っていたが、カタストロフィを知っており、生きるために強くなることを決める。

埼玉チームのリーダーであることから皆を不安がらせないため、弱さを見せないように強い言葉で皆を導くことを実践しようと頑張っている。

学校などの拘束がないため、訓練に使う時間が多く取れ、強い。

崎本彩 21歳 さきもとあや ガンツの呼び名：あやちゃん

ヒロイン。長い黒髪の元モデルで現在は宗と同棲している。

困難があっても乗り越える強さと優しさを持っている。

宗と同じく時間を多く取れるためにかなり強い。

料理で宗に勝てないことを少し気にしている。

榎樹哲 17歳 かしきてつ 高校生 オタク ガンツの呼び名：ヲタク

オタクという設定の余り活かされていない隠れオタク。

銃の腕はチーム1で、狙撃と両手に持った銃での戦闘を得意とする。超能力開発に熱心で、次は魔法使いが転送されてこないか期待している。

実はオリ主なんじゃないかという考えをいまだに捨て切れていない。

榊原剛 21歳 さかきはらこう

ガンツの呼び名：さんぱくがん

無口な剣士。：それほど無口でもない？

剣道道場の家に生まれて、小さなころから剣道をしてきたので刀の扱いについてはチーム1。

刀を使った戦闘を好み、大きい100点武器のHガンなどは貸し出す事もしばしば。

銃での戦闘もしないわけではない。

三白眼で怖い目つきなのを気にしている。

優理子が少し気になる。

齊賀有喜^{さいがあきよし} 18歳

ガンツの呼び名：エスパイ

超能力者。坂田に超能力を与えた男。

超能力の才能があり、自分で開発をしていた男。

力の事は隠していたが、ガンツのメンバーには知られているので気楽に話すことが出来ることから、ガンツのメンバーとの仲は良い。

超能力を使って文武両道を装ってきたので、周囲の評判はよく、力の使い方もうまい。

今のところ力の開発は有喜と坂田の2人しかできない。（力のコントロールが難しく、長年鍛えてきた有喜と超能力開発にだけ力を注いだ坂田にしか出来ない）

里井優理子^{さとこゆうりこ}

ガンツの呼び名：ゆりこりん

心やさしき乙女。

少し気弱なところもあるが、困難に立ち向かう強さを持っている女性。

剛の事が好きで、ひそかにアプローチを続けている。

超能力チームに入っている。

ガンツの再生と武器についてのこのSSでの独自解釈。

ガンツを掌握しても、無限に再生と武器を出せるわけではない。

武器は上位になればなるほど創りだすのにエネルギーがかかり、人間の再生も同様である。

だから、上位武器は強い戦士にしか手に入れないようになっており、この理屈で29巻のガンツ支配者が腕しか強化スーツを出していなかったことがエネルギーの節約のためであると説明できる。

また、星人との戦いは長い期間続けられていたはずなのに、星人の死体がないことの理屈として、星人が敗れた後、エネルギーとして利用されるからではないかと考える。

星人は見えず、聞こえずでも触ることが出来る。

そして、戦いの時にはガンツの戦士には姿を見ることが出来る。

なのに、戦場に以前の戦いの時の死体がないのはなぜか？

それは、ガンツに設定されたエリアで死んだ星人の死体は戦いの後、転送され、殺された星人と同じくガンツのエネルギーとして利用されるからではないか？

そう考えると、再生・武器生成には必要なエネルギーが決まっており、そのエネルギーを現したモノが点数なのではないか？

そしてガンツには途中で死んだもの、100点を取り解放されたもののエネルギーが貯めこまれており、それをガンツの中にいる人間によりやり繰りされているものと考ええる。

標準装備 (Wikiより)

メンバー全員に無条件で提供される装備。ミッション内容の提示がなされた後に、ガンツ本体が引き出しのように開き、アイテムの取得が可能となる。左右の引出しには武器、裏側の引き出しにはスーツが入ったアタッシェケースが用意されている。スーツは全員分が用意されているが、武器は全員でフル装備できるほどの数は無い。なおこれらのアイテムはミッション終了後にガンツの部屋から持ち出す事ができるが、ミッションへの呼び出しの転送時に所持していないと、例えば自分用のスーツなどは別途転送されてくる事は無い。また日常生活に おいての使用も、ガンツの機密保持に関わらない限り可能である。

ガンツスーツ

球体の中のアタッシェケースに入っているスーツ。上下ツープラスから成り、頭部を除く全身を覆う。手の部分は手袋のように着脱できる。着用すると身体能力と防御能力が飛躍的に上昇する。ガンツに召喚された人数分だけ用意されている。大腿部に、XガンおよびXショットガンを収められるホルスターを装備。内部は特殊なゲル状の物質で満たされており、筋力や精神力の向上によって機能が発動、その際スーツが盛り上がり、表面に無数の筋が浮かぶ。岩塊を発泡スチロールのように圧潰させたり、巡航速度で走行中の自動車をも上回るスピードで走ることができる。高所から着地する際には脚部から高圧の気体を噴射し衝撃を吸収する。また、衝撃や圧力に対しても自動的に防御効果を発揮、剥き出しである頭部も防護される。超音波や高温の炎などからも人体を保護し、Xガンによる射撃も無効化する。スーツの耐久性にも限界はあり、一定以上のダメージを受けると過負担が掛かり、スーツ各部のレンズ状のポイントからゲル状物質が漏出し、機能を失う。ポイントのレンズ自

体を破壊されると、負荷値と関係なく即座に機能が失われる。スーツの損傷及び蓄積したダメージはガンツの部屋へ転送された際には回復している。一部を損傷しても、ポイントが無傷であれば他の部位の機能は損なわれない（腕部を破損しても、脚力は保持されるなど）。なお、老若男女・動物に関係なくオーダーメイドとなっているため、他人のスーツを着用してもスーツの効果は得られない。一見、コスプレのような外見なので、初めてミッションに参加する人間は大抵このスーツを着たがらない。体にびったりフィットするサイズであり、着用する際には一度全裸にならないといけない。

Xガン

メンバーが一般的に使うハンディサイズの銃。太い円筒形の本体にグリップをつけたような形状。射程は短いが軽量でコンパクトなので初心者でも取り扱いが容易。なおスーツのホルスターに納める事も出来る。撃った対象を内部から爆発させることができる。生体を使うと、命中部分が破裂する。着弾してから効果が発現するまで数秒のタイムラグがある。上部にあるダイヤルでエネルギーの放射量を調節可能。また本体後部のモニター画面には対象を透視するレントゲン機能を備え、相手の弱点を探ることも出来る。発射時には本体部分の前後2箇所が展開し、X型に変形する。トリガーが2つあり、上のトリガーがロックオン用、下のトリガーは発射用となっている。基本的には「上のトリガーでロックオンして、ロックオン状態で上下のトリガーを引く」というプロセスで使用される。ロックオンしてから上下トリガー併用による発射までは、任意で時間差を設ける事が可能である。が、戦闘時においては「上のトリガーを引いてロックオンしたまま下のトリガーを引く」という簡略化されたプロセスでも使用される事も多い。発射に関する仕様はYガン・Xショットガンに共通である。応用としては、複数の対象をロックオンしてから発射するチャージショットも可能。「Xガ

ン」の名称は、透視機能 にちなんでレントゲンの「Xレイ」と、発射時の「X型」の形状から加藤が命名した。

Xショットガン

強化型のXガン。Xガンをベースに、フォアグリップ（本体の前部にあるスライド部）付きの長い砲身とオフセットされた可動式スコープ、ストックを追加した構造になっており、外観は戦闘用ショットガンの ような形をしている。Xガンより威力と精度が高く、射程距離は1km以上に及ぶ。本体後部のモニター画面の他に、アームで保持されたスコープが付いている（左右どちら側にもセットが可能。スコープの画面は本体後部と共通のモニター）。長射程を利用した遠距離攻撃が可能のため、スナイパーライフルとして使用する事も可能。基本的にはスコープを使用しなくても撃てる。銃身が長い分、接近戦ではXガンより取り扱いが難しいが、重量は意外と軽く片手でも保 持できる。他の銃と同じく、複数の対象をロックオンするチャージショットが可能。ダイヤル調整のエネルギー放出量とは別系統で、フォアグリップによりエネルギーの収束率を変化させる事が出来る。スライドを事前に引くほどエネルギーが収束するが、着弾した際の破壊範囲は収束させない場合に比べると狭くなる。

Yガン

中距離用の銃だが、標的を捕獲・転送するための武器であり、殺傷機能を持たない。3つの砲身がYの字状に配置された特徴的な外観を持つ。他の銃と同様、本体後部にレントゲン機能のモニター画面を備えている。上下のトリガーを同時に引くと、3つの砲身がブローバックして、それぞれの銃口から実弾式の「アンカー（アンカーボルト）」が3発同時に射出される。アンカーはそれぞれレーザー通信により同期しており、スラスターの内蔵により自己推進が可能。目標付近でワイヤーを実体化させ対象を緊縛し、アンカー自体は地

面に固定する事により拘束する。更にその状態でトリガーを引くと、相手を「上」に転送する事が可能。発射前に上トリガーでロックオンしておけば、アンカーが目標を自動的に追尾して拘束することもできる（ロックオンせずに上下トリガーにより同時発射した場合、アンカーは一直線上に飛行して「外れる」事もある）。ほとんどの星人をこの銃によって拘束する事できるが、転送中に拘束部位を離断して回避する星人や、実力でワイヤーを切断する星人などもまれに存在する。作中では命名されず、「捕獲用の銃」と呼ばれている。

コントローラー

光学的な周波数を変えて、使用者の姿を不可視状態にできる。敵の位置を表示する「レーダー機能」や「制限時間表示機能」「戦闘エリア表示機能」なども備わっており、リストバンドにて手首に装着できる。一部の機能はガンツバイクにも実装されている。接触していれば第三者も不可視効果を共有することが出来る。

ガンツソード

近 - 中距離戦闘用の刀。銃器類と違って使いこなす事が難しい。上級者向けの武器。片刃の曲刀で、全体として日本刀に近い形状をしている。刀身は伸縮自在であり、通常はグリップ部分（柄と鏢）のみの状態で、スイッチを押すと刀身が出現する。巨大な星人に匹敵する長さまで伸長できるが伸ばす事が可能だが、その状態ではかなりの重量があり、スーツのパワーアシスト機能なしでは振り回す事は難しい。鉄やコンクリートなども一太刀で両断できるほど鋭利である。ガンツバイクが格納されている部屋に数振存在する。

ガンツバイク

ガンツの部屋の奥にある扉の中に格納されている特異な形状のモノホイール（単輪）バイク。巨大なホイールの内側に搭乗する格好で

操縦する。操縦席にはモニターが付いており、ホイールによって塞がれた視界前方をカバーする。また車体の後部には後ろ向きのタンDEMシートがあり、同乗者を乗せることで走行しながら後方の敵を攻撃する事も可能。

ガンツの1000点武器

1回目の武器（Hガン）

言わずと知れた強化銃。

本編でも良く使用される銃で、エネルギーの塊みたいなもので上から敵を押しつぶす銃。

2回目の武器 ナノマシン入り錠剤（薬）

バンパイアがナノマシンと言っていたので、いくつかのナノマシンがあると仮定して、大阪の2回クリアのやつが使っていたXガンの敵の力を探る力を見つけ出したように機械の操り方についての知識が入って来て、ガンツ本体以外の機械の操り方がわかるようになる。これにより、岡が巨大ロボを操れた理由が成り立ち、31巻の吉川が言っていたガンツの機能についても、ガンツが壊れて本体と認識されなくなったからガンツの状態がわかったという解釈が成り立つ。また、脳に届いた際、視野が広がる、直感力が上がるなど戦闘に良い影響を与える効果も付属してくる。

3回目の武器 強化捕獲銃（星ガン）

3回クリアの多い大阪で、使われない武器と考えたとき、性格に合わない捕獲かと考えたために捕獲銃にした。

*の形の銃口から生物のみを縛りつけるYガンよりも強力な拘束力を持った巨大ネットを飛ばし、ネットにふれた生物を全て捕える。
(壁をすり抜けて奥に居る星人を縛ることも、星人数匹纏めて捕えることも可能。)

4回目の武器 空飛ぶバイク(飛行ユニット)

4回クリアのノブヤンが使ってない武器ということで身につけられないものという考えから飛行ユニットにした。

空を自由に飛ぶことが出来るもので、ガンツバイクの輪が横にも付いたような形状をしている。

速度はガンツバイクの倍まで出て、空中に浮いたまま止まることもできる。

5回目の武器 強化刀(ビームサーベル)

刀の柄からレーザーのようなものが出て来て、それで敵を切る事が出来る。

非常に高温のレーザーなので触れた部分を焼き切る事が出来る。

刀で切れない敵も切ることが出来、刀より3倍まで伸ばすことが出来る。

剛が欲しがっている武器。

6回目の武器 強化スーツ(アーマー)

日本人ガンツチームが集まった時にも一人も強化スーツ保持者がいなかったため、強さから考えてもかなり後の武器だと考えたために6回目の武器にした。

多様な武器が搭載された強化型ガンツスーツ。腕は大木のように太く、身の丈ほどの大きさがあり、使用者の手の動きにリンクするジ

エツト噴射装置が 装備されている。これを使用することでパンチ力が加速・強化される。さらに肘には鋭利で長大な刃、掌にはエネルギー発射口がある。このエネルギー発射口からは標的の部位を削り取る様な光線が射出される。顔全面を覆い尽くすマスクが装着されており、このマスクの眼部はXガンと同じく、レントゲンのように対象 を透かして見る事が出来るため、相手の急所などの弱点探索を行う事が出来る。レントゲン機能を使用する際には甲高い音を発する。後頭部には巨大ロボットを 操作する多量のドッキングコードが接続されている。さらに耐久力も通常のスーツに比べ格段に上がっており、通常のスーツの耐久力では一瞬しか防げない攻撃にも余力を持って耐えられる。この強化スーツを脱ぎ捨てる際には背面から多量の煙が排出される。

7回目の武器 ガンダムロボ (ロボ)

強そうなのに、7回クリアの岡が簡単にやられたことから操作に慣れていないためと考えたのと、強化スーツを使って操っていたので強化スーツの後での登場と考えたため7回目にした。不可視状態になることができる。耐久力はさほど高くない。巨大な敵との戦闘に向いている。

8回目の武器 レーザー砲 (レーザーガン)

貫通力の高いレーザーを撃つことのできる銃。

銃口は になっている。

エネルギーを貯めるのに時間がかかるため、1日に使える時間が限られている。

かなり大きく、ロケットランチャーのような形状をしている。

レーザーは引き金を押している間出し続けるモードと当たった後で大爆発を起こす強力な一撃を相手に与えるモードがあり、横にしているスイッチで切りかえられる。

アイマーについているレーザーより幅が太くて強力。

プロローグ

「きゃああああああああっ！」

いつも通りの帰り道だった。

「だれか救急車を呼んでくれ！」

いつも通り大学に行って

「おいつ、大丈夫か、おいつ！」

いつも通り授業受けて

「息してないよっ！」

いつも通りに友達と別れて

「うええええええええええええん」

いつも通り一人で家に帰って

「人工呼吸だっ、速く！」

そのつもりだったんだけどなあ

・・・子供の身代わりになって車に轢かれるなんてわらえねえよなあ

アマミチシユウ
天道宗享年22歳

第1話：始まりの部屋（前書き）

ガンツマイナスの始まりです。

最初のシーンに主人公が加わった形になるので、会話等が小説と同じ部分が多いです。

ご了承ください。

第1話：始まりの部屋

「おいつ、また誰か来たぞ」

目が覚めるとそこにはどこか見覚えのある部屋があった

「こ……ここ……ええっ？」

わけがわからない。

自分の体だ自分が致命傷を負ったことくらい良く分かる。腹をトラツクに轢かれたんだ、助からないと確信できたし、全身の力が抜けていく感じがした。

確実な死。

それを体感したはずであった。

「……ここは病院なのか？」

とりあえず周りに尋ねてみた。死んだと思って意識を閉じたら次の瞬間には意識をはつきりさせて違う場所にいたのだ。とりあえず病院を疑うのが当然だろう。

「そう見える？」

答えてくれたのはどこか見覚えのある、冷ややかな瞳をしたセミロングの女性であった。

驚くほどきれいな顔をしているのにそれを台無しにするような冷やかな表情であった。

「え、ええと……見えないけど……その」

彼女はへどもどする俺から目をそらし、短くため息をついてから言った

「ま、当然かな」

「えっ、何が？」

「普通は戸惑う。それが当たり前ってこと」

どっという意味かわからず困惑しながら立ちあがった

「何か知っているのか？ここはどこなんだ？俺は頭がおかしくなっ
たって思われるかもしれないけど、死んだはずなんだ？」

宗は湧きだしそんな感情を抑えながら、冷静に聞いてみた。

「たぶん正常。死んだってところも含めて」

女の言葉にますます困惑する羽目になった。

正常？

死んだのも含めて？

・・・いっそイカレタバカ扱いされた方がましであった。
女はそのまま周囲を見回して

「聞いてくれる？」

有無を言わせぬ口調だった。高圧的とも言っていたい。

「たぶん何が起きているかもわからない人がほとんどだと思うけど、
黙って聞いて。」

「なんだよ」

苛立ちを隠せない若いサラリーマンの男が女を睨みつけた。

「こっちはそれどころじゃないっ！なんでお前の言うことをきかなくちゃならないんだ！」

「それなら死ねばいい」

女はひどくあっけなくいい、男は言葉を無くしたようであった

「ど、どうしてそうなる。話が飛躍しすぎだろう！」

「飛躍してようがどうだろうが、そんなの関係ない。ただ、確かなのは、あたしの言うことを聞かなきゃ死ぬってこと。確実にね」

「ね、ねえ」

今度はこれまたどこか見覚えのある、高校生らしき少年が割って入った

「さつき、あんた、一度死んだのも含めて正常って言ったよな？俺も死んだ記憶があるんだ。一度死んだってことは、つまり、その、生き返ったってこと？」

全員が目が少年に集まり、そして、ものといたげに女に向けられた。どうやらみんな同じ疑問を持っていらしい。

っと、その時、突然下卑た笑いが聞こえてきた。

「明里、その辺にしとくべや。どうせそんなやつら、何教えたって生き残れやしねえよ」

後ろから声が聞こえ、その声の聞こえた方を見ると黒い球体と、その向こうにピッチリとした黒いスーツを着た男たちがいた。

それを見たとき、宗は強い衝撃を受けた。
黒い球体と黒いスーツに宗は見覚えがあったからだ。

ガンツ

黒い球体、ガンツに与えられたミッションをこなしていくマンガで、生前ハマって揃えていた作品である。

そつつ、この部屋に見覚えがあったのもこの部屋がガンツの舞台の重要な部屋であったからだ。

ここで、宗は一つの可能性に行きついた。それは一度死んでガンツの世界に呼ばれたということだ。そう考えてみると目の前の女性にも高校生らしき少年にも見覚えがあつて当然であつた。何せ、ガンツの小説の主人公とヒロインなのだから。

「ほつといてくれる？あんたやあんたの仲間に助けてもらおうなんて思つてない。」

重大なことに気がついて思考停止しそうになつていた宗の前で女、明里が男に言い返した。そう、俺が何に気がついたなんて関係なく、時間は進むし、自体も進むのだ。ほつつとしてゐる暇はない。何故こんなことが起きたかなど考える前に、これからどうするのかを考えるべきであろう。

「勝手にすればいいべ、せいぜい足引つ張られないようにするんだな」

下卑た男の言葉を明美は無視して、男、大樹に顔を向けた

「きみの質問だけど、答えはイエスよ。他の人たちもおんなじ。これで満足？」

怒ったような口調でそれだけ言ってから、彼女はおびえた目で見上げる人々を見渡した。

「ああ、安心して、あたしもそうだから。でも、そんなことはどうでもいい。一番大事なのは、こっちの指示に従うこと。でないとな確実に死ぬから。せつかく助かった命なのにね。」

「で、でもどうすれば」

厚いメガネをかけたサラリーマン風の男が震える声でそういった。明美はさつと鋭い目で相手を見てから、ガンツを指差した。

「もうすぐあれから音楽が流れる。そしたら、中から出た装備を身につけて。最悪スーツだけでもね。」

「スーツ……？」

大樹がそう言った時であった。その言葉が合図になったかのように、ガンツから音楽が聞こえてきた。

あたゝらしゝいあゝさが来た、きゝぼゝのあゝさだ

「えっ、もしかして、この曲ってラジオ体操の？」

大樹が言うとおりにそれはラジオ体操の曲で会った……かなりアレンジされており日本語ではなかったが。

Youらの Lifeは
Missing したのです。
Because、NewLifeを
どうUseしようが
Freeなので。
ってLogicでしょ。

ガンツに文字が浮かんできた。
へたくそな手書きに近い文字でところどころ反転していたが、読めないことはない。

「なんだ・・・これ」

うめくように大樹が言う背中、明理が答えた

「意味はわかるでしょ」
「なんだか力が抜けるな」

宗も同感に思っていたが、同時にその文章に恐怖も感じていた。この文章はでたためでも笑わせるものでもなく、真実を表していると知っていたからだ。

苦笑している大樹に明理は少しも笑わず、警告した。

「しっかり見なさい、あんまり役に立たないけど、これから戦う相手の情報が出てくるから。」

そう、これから宗は殺しあいに行くのだ。そこでは常に死が隣にあり、いつ死んでもおかしくない。

宗はそれを知っていて、さらに、その物語の世界に入り込んだ異物

である自分がどうなるのかの保証がないことも感じとっていた。

自分は生き残れるのか？

知識がある分有利であると言っても、戦う知識と経験をたっぷりと積んだ人間でもあっけなく死んでいく世界でどうなるのかの保証もなく戦わなくてはならないことは果てしない不安を呼んでいた。

しょうとく星人

特徴

しょうとくたイシに似ている
たくさんある 杓があぶない
好きなもの

聖徳太子。

口ぐせ

うまやどつてツていうな！

憲法一七条発布。

キヤアアアアア。

ガンツから敵のデータが出た。

「ふざけているみたいでしょ。でも、ちっとも笑えない。」

明理がそう言った後、ガンツが大きく開き、武器とスーツが吐きだされた。
来たッ

ここでスーツを逃すわけにはいかない。

「後ろのラックから自分の名前の書いてあるケースを取って」

戸惑う人達の中、明理がそう言い、宗は迷わずにケースに向かっていき、自分のケースを手を取った。

明理が服を脱ぎ、下に来ていたスーツの姿になりながら、言った。

「時間がないの、中にはこれが入っているから、急いで身につけて」

明理が皆にスーツを着るように言う中、宗は着替えるために部屋を移動するふりをして、バイクと刀のある部屋に向かった。

「おいつ、何しに来た」

中にはバイクを使うためにその部屋にいた先ほど明理と言い合った下卑た男たちがいた。

「スーツに着替えるために部屋を移動しました」

刀を取るためもあったが、それは隠し、言い訳を言った。

「っけ、人前じゃ着替えもできねえべか、女かてめえは」

男はそう言い、宗を笑ったが、宗は気にせず着替え始めた。いつ転送されるかわからないのだ、いちいち気にして着替え損ねたらことだった。

「まあいいべ、こいつもどうせすぐ死ぬべしな、それよりてめえら
ビビってケツ捲んじゃね

えぞ」

男はそう言い、転送を待った。

宗は着替えを終えた後元の部屋に戻った。もう転送は始まっているようで、何人かいなくなっていた。

「着てきたぞ、この服が何だっというんだ？」

宗は何も知らないふりをするためにスーツについて聞いた。

「着てきたのね、その服は身を守ってくれるわ。皆も早く着替えて転送された先でこれから戦いをするの。死にたくなければどこか安全な場所に隠れていて。」

明理がそう言って皆に早くスーツを着るように促していた。

宗は、怪しまれぬように明理がほかの人達の方を向いている時に、興味を持って手に取ったように見せて、捕獲用のYガン、破壊用のXガンを腰につけ、狙撃のできる長柄の銃を手に取りバイクの部屋を見た。

もう男たちは転送されているようだった。

男達が転送されていった部屋に戻った宗は刀をとり、左の腰に取り付けた。

これで最初に装備できる全ての武器を装備したことになる。

宗は考えていた。生き残るにはどうすればよいのかを。星人を倒して、点数を稼ぎ、100点になった時に与えられる3つの選択肢。

- 1 . 記憶を消して日常に
- 2 . 強力な武器を手に入れる
- 3 . ガンツのメモリーの中から一人を再生する。

カラストロフィのことを知っている宗は100点を取って記憶を消して日常にという選択をするつもりがなかった。いや、そもそも「宗の世界」ではないのだから、戻るべき日常が、家が、生活がなかった。故に、ゲームから抜け出すという選択肢はあり得なかった。メモリーの中から1人再生も蘇らせたいたい人のいない現状、必要がなかった。

そして、カラストロフィが始まれば力の無いままでは死んでしまう。それまでに力を付ける必要があった。だから、強力な武器、これに強い魅力を感じた。強力な武器があれば死にづらくなるし、より多くの星人を倒しやすくなり、より多くの点を稼ぎやすくなる。そして、カラストロフィの時も対抗手段が増える。

約2年。

カラストロフィまでに残された時間だ。月に1度召喚されるにしても20回弱。100点貯めるのにも多くの者が到達できずに死んでいくこのゲームで、この残されたカラストロフィまでの年数は少なすぎるように感じた。

となれば、手段は一つ、ゲームで逃げるのではなく、毎回高得点を出し、自分を可能な限り強化することである。7回クリアの岡でさえ殺されるような敵の出てくる世界で生き残るには強い敵の出る前に強化するしかない。

そして、今回の敵であるしょうとく星人は数は多いが、強さはそこそこの敵。初めての相手として、また点数を稼げる相手として最高の敵であった。

そう考え、多くの点数を手に入れるために武器を取り、準備は万端にした。

後は、自分が戦えるかだ。

当たり前だ、どれだけ知っていようと、相手が人間ではなかるうと、宗自身は殺し合いなどしたことがない。しかも今回のしょうとく星人は人間の姿をしている。理性は「人間ではない」、「殺さなければ殺されるだけ」と言っているが、実際の戦場に出た時に、平和な世界で過ごしてきたモノがいきなり引き金を引けるのか？

その答えはなってみないとわからない。

知っているということと体験したことがあるということは別のことである。

宗は不安を抱えたまま戦場へと転送されていった。

第2話：初めての戦い

転送された先は商店街の中だった。多くの人がそこには居て、巻き込むことを忌避した宗は路地へと移動した。

路地では誰もいないことを確認した後、スーツの力を使い、姿を消してから屋根に上った。屋根の上で長柄の銃を取り出し、狙撃の準備をした。

最初の戦いなのだ、慣れないうちからの接近戦は避けたかった。

商店街にいるしょうとく星人は溢れてこぼれおちた欠片のようなもの。しょうとく星人はボスによって生み出されて、本拠地で増え続けているから、本拠地以外を狙っても意味はなく、本拠地にいる数は半端ではないので、点数も稼げる。原作の知識によってそう判断した宗はスーツについているレーダーで敵の本拠地を探した。

敵の本拠地はすぐに見つかった。なんせほとんどの敵がそこにかたまっており、撃てば当たる状態になっているのだ、少し見ればわかる。俺は、固まっている敵に狙いを付けて……

……撃てない……

指が震えて引き金が引けないのだ。

理性ではわかっている、引かなければならないと。引かなければ勝てない、引かなければ点が取れない、引かなければ強くなれない、引かなければ・・・

理性を生物を殺すことへの忌避感という本能が押さえつけて離さない。

引き金に手を付けたまま宗は泣いてしまっていた。

“戦わなくちゃ”……“恐い”

“殺さなくちゃ”……“殺したくないよ”

“強くならなさと大切な人が出来た時に守れないぞ！”……“この世界にはまだいないし、出来てからでいいじゃん”

“あれは人じゃない”……“でも人の形をしているよ”

理性と本能の戦いによって混乱した感情に抑えが効かないのだ。どうしようもなく揺れる心の中、ある光景が目に入った。

しろうとく星人による殺人。

しろうとく星人によって殺されてしまった人たちの姿が見えたのだ。それを見たたん、本能が引き金を引かせた。

しろうとく星人の、「星人」の命を奪うことへの忌避感と生存本能では生存本能の方が強かったのだ。

一度引いたら後は狂ったように引き金を引きまくった。

命を奪う怖さを理屈でごまかし、生存本能で補強し、勢いで途切れないうちにさせたのだ。

…どれだけ撃ったことだろう。

銃身が熱くなり、指が痛くなってきた。

姿が見えないこと、遠くから狙撃していることの二つが合わさって、敵からはいまだに反撃を受けていなかった。

その事に安心して、宗は「油断」していた。

……戦場では最もしてはいけない行為である油断を。

そして、その代償はすぐにその身に降りかかった。

背後から襲いかかってきた1体のしようにとく星人からの奇襲によって。

姿は見えずとも気配や音は残る。

1体だけ残っていた近くを通った本拠地以外の場所にいるしようにとく星人にとつて、音を発して気配も消せていない宗はもはや見えな
い敵ではなかった。

「うまやどツて、いうなー！」

引き金を引き続けて殺すことに対する忌避感も薄れてきた時に、それは来た。

強い衝撃とともにしようにとく星人が掛け声をあげながら襲ってきたのだ。

「うまやどツて、いうなー！」

しょうとく星人は宗の背後から杓を振って襲ってきた。

「がっ、うっあああああああああ」

空間が歪み、衝撃が襲いかかってくる。

狙撃体制を取っていたことからうつ伏せになっていた宗は襲いかかってくる衝撃をもろに食らってしまった。体がきしむ。急激な気圧の変化に耳からぼこつとした音が響き、内臓が圧迫され悲鳴を上げている。

わずかに遅れて、爆発音がした。

衝撃波とともに放たれた何か恐ろしい力が爆発したのだ。その恐ろしい衝撃とともに宗の目に映ったものがある。

それはしょうとく星人と、吹き飛ばされてズタズタになった宗の右足である。

ここで宗にとって幸運だったことは2ある。

一つはうつ伏せになっている時に背後から奇襲されたので、攻撃が足だけですんだこと。

もう一つは爆発で屋根が壊れて、足場が崩れて落ちることでしょうとく星人から離れることが出来たことである。

宗は背中から地面にたたきつけられ、意識が飛びかけた。

「がはっっ」

しかし、しょうとく星人は痛がる暇を与えてはくれなかった。

屋根の上から顔を出したしょうとく星人の手には杓があった。杓を振りかぶるしょうとく星人の前に、とつさに左足で体を飛ばした。

またも爆発が起こり、その衝撃で宗は壁まで飛ばされた。その際に長柄の銃を遠くに転がしてしまった。

無手になった宗にしょうとく星人はとどめとばかりに、宗めがけて飛び降りてきた。

「うおおおおおおお」

宗はとつさに右腰から刀を抜いて迎え撃った。

しょうとく星人は空中にいてよけられない。

結果、しょうとく星人は自ら刺さるような形で刀に飛び込んでいく形になった。

しょうとく星人の腹に刀を突き立てた宗はそのまま振りおろし、しょうとく星人を切断した。

「はあっはあ、いつてええええええええええっ！つくしよおおおお、戦場だつてわかっ

ていたのに油断した結果がこれかよ。こんな大量生産の雑魚キャラにこれじゃこの先生きていけるのか？」

宗は自分の油断を悔やんだ。

しかし、今回の件は僥倖でもあった。

星人の攻撃の直撃を受けて生きているのだ。

そして弱い敵であったから迎撃もでき、戦場での心構えも学べた。

その事を思えば幸運であったのだが、片足を奪われた宗からすればとても幸運には思えない。

宗はスーツを縛って血止めをした後、深い反省とともに、意識を手

放した。

再び宗が目覚めたとき、そこは部屋の中だった。

戦争は終了し、転送されたのだ。

宗は最後に転送されたみたいで、他の生き残りは全員そこにいた。

「あんたも生き残ったのか」

スーツを着ている初心者同士、気になったのか、明理とスーツの男が言い合いをしている中、大樹が声をかけてきた。

「ああ、死にかけてたけどな」

宗がそう答えた時にガンツからちいんと安っぽいベルのような音がした。

同時に表面に

Results

という文字が浮かび上がった。

採点が始まったようだ。

似顔絵とともに点数が表示されていく。

りすとら 0てん 仕事できなさすぎ、もんくいいすぎ

ニートマン 0 points やる気なさすぎ、ニキビ潰しすぎ

ちかん 0テン ホステスの胸見過ぎ、ちんこ立ちすぎ

ホステス 0テン 化粧ケバすぎ、趣味悪すぎ

次々に表れる評価に思わず笑いそうになり、自分がどう評価されるかわからず、笑いをこらえながら評価を待った。

にげごし 0テン あかりにつきまといすぎ、チキンすぎ

あかりちん 67 points

大樹と明理の評価がされた。

明理の点数に周りの人達が目を見張る。

どうやら宗が転送される前に明理によって100てんを取れば解放されることを聞かされていたらしく、明理の得点を見たモノの瞳に驚きと希望の光が宿る。

しかし、その後それより大きな衝撃が待ち構えていた。

しゅうくん 48おpoints 泣きすぎ、適応早すぎ

「なっ」

「えっ」

明理と明理と口論していたスーツ男（高岡というらしい）があり得

ないものを見たような顔をした。

それはそうだろう。初めて戦争に参加したものは0てんで当たり前、むしろ死んでいないだけ0てんでも褒められるようなものだ。それが48点。

何度も戦争を経験しているスーツ男でも合計で35点、多くの経験で圧倒的な実力を誇る明理でさえ合計で67点なのだ。初めての碌に説明も受けていない人間が1回で取れるような点数ではない。その凄さを正確に理解している明理と高岡の反応は過剰だった。

「なんだよっ、なんなんだよこの点数はっ!!!」

スーツ男が責めよってくる。

「いったい何をしたらこんな点数が!？」

明理も鋭利な目を向けながら聞いてきた。

「この銃で狙撃した。色々試してみたけど、1キロ以上先を狙えづらい。だから、屋根の上から狙撃していた。」

宗は姿を消す機能や襲われたところを刀で返り討ちにしたことについては言わずに、こう答えた。あまりにも短期間で知りすぎていると不審に思われないよう、初心者でもあり得そうな行動をだけ語った。

「はあ?んなことできんのかよ!??つかあいつら攻めてた時いきなりぶっ飛んだりして他のお前か。人の獲物取りやがって戦場にも出れないチキン野郎が!」

高岡が怒り出した。

彼からすれば自分だけ安全な場所で手柄だけ横取りして危険を冒した自分より点を取ったのだ。理不尽ではあるが、怒るのは当然と言えた。

しかしながら明理が

「やめなさい。狙撃が出来ることに気がつかなかったあんたが悪いんじゃない。むしろ攻撃方法を増やしてくれたことに感謝するべきよ」

助け船を出してくれた。

そして明理に怒りの矛先が向かい、また二人の口論が始まった。

宗は助けてくれたことに感謝しつつ、二人に視線が集まっているうちにこっそりと抜け出すことにした。

何人が気が付き去っていく宗に何か言いたげに口を開いたが、言葉を見つけられずにいるうちに宗は早足で去って行った。

ここがガンツの世界であるのなら、宗はイレギュラーの塊だ。

余り干渉すぎて世界の流れが物語と変わることを恐れていた。

ガンツは戦争であり、戦争で一番大切なのは情報だ。

宗が一番大切な情報が干渉しすぎることによって変わり、敵が変わり、予想のつかない攻撃で殺されることが恐かった。

だから、出来る限り、せめて物語りの鍵である玄野計がガンツの世界に引き込まれるまでは、宗は干渉を控えることに決めていた。だから逃げるように去っていったのだ。

バイク部屋に服を置き忘れて、ガンツスーツに銃と刀を持ったままだということも忘れて…

∴ 10分後、宗はコスプレとバカにされ、路地を通り身を隠しながら、服を取るために部屋へと戻っていった。

色々と台無しな終りであった。

第2話：初めての戦い（後書き）

ネタバレ防止と原作崩壊防止のために、主人公はあまりマイナスの本編に深く関わらせないつもりです。

原作介入は漫画本編から？

第3話：一日の終りに

ガンツの世界と宗のいた世界との違いといえは何である？
その差を考えてみると、ガンツという作品があるかないか、ガンツ
が実際に有るか無いかしかない。

宗は驚愕していた。

なぜなら、自分の世界にあった街並みとまったく同じであったから
だ。

「まさか」

そして、期待と不安をこめて自分の家へと歩いて行った。

あった。

そこにはもう2度と帰れないと思っていた自分の家があったのだ。

「俺の家だ」

帰れないと、この世界には存在しないと考えていた宗の日常。
それが目の前に存在しているのだ、その感動は計り知れない。
こみあげてくる感情を抑え、宗は家に帰ろうとした。
しかし

「ただいまー」

そこには当然のように、「この世界の宗」がいた。松葉づえをついて歩いていることから、事故では骨折ですんだみたいだ。

事故で死ぬことも、ガンツのことも、ここに別世界の宗がいることも知らない、もう一人の宗が目の前を歩いている。

その衝撃はいかほどか？

自分とまったく同じ姿をした存在がかつて自分が過ごしていた日常を、宗が渴望して止まない日常を謳歌しているのだ。

宗には家族がいた、恋人がいた、友達がいた。

そしてそれらは目の前の、この世界の宗を せば手に入るのである。

したいという感情が、目の前の存在を消し去って入れ替わりたいという感情が強烈に宗を襲った。

せば、 してしまえば日常に戻ることが出来る。

実行は簡単だ、自分には武器がある、スーツがある。

体は燃やして山にでも埋めればいい。

異世界から来たことは誰にも言っていないし、「本人」がなり替わるんだ、絶対に誰にもばれることはあり得ない。

”自分は星人から世界を守っているんだ、日常を謳歌するくらいのご褒美いいじゃないか。”

“もう散々星人を してきたら？”

“人間と星人のどこに違いがある？住んでいる星が違うだけだ。ならあれも していい「敵」なんだ。

日常を奪うドッペル星人だ！

せ、 せ、 せ、 してしまえ！”

徐々に大きくなる本能の声。

気がつけば宗はスーツの力を使い透明になっていた。

“ そうだ、さらってから せば死体も血の跡も残らない。透明にな
って忍び込むんだ。”

夜が更けるのを待って、部屋に忍び込んだ。

部屋には電気を消して寝ているもう一人の宗がいた。

宗は音をたてないようにベッドに近寄り宗の首に手を伸ばす。

そしてその首を回そうとした時、部屋の扉が開いた。

宗の母親だ。

「ッ」

宗は慌てて後ろに下がった。

姿が見えていないとはいえ、透明になることに慣れていない宗にと
っては自分の息子が殺人を犯そうとするところを見られたと思っ
たのだ。

姿は見えなくても音は聞こえる。

宗の母親は怪訝そうに音の聞こえたあたりを見回し、何の姿も見え
ないことから怪訝に思いながらも気にするのをやめた。

自分の方を見られていた宗にとっては冷や汗の止まらない瞬間であ
った。

やがて宗の母親がベッドで眠る宗を起こさないように近寄り、静か
に語りかけた。

「宗、昨日は驚いたわ、あなたの帰りを待っていたらいきなり病院
から電話がかかってきたんですもの。」

母親はベッドの近くにある椅子に腰かけると話を続ける。

「子供が轢かれそうになるのを助けたんですってね、凄く立派な行為で母さん誇らしいわよ、私の息子は正義の味方なんだぞって。」

母親は感情が抑えきれなかったのか、静かに涙を流しだす。

「でもね、私はそんなこととして欲しくなかった。死ななかったから良かったけど、死んでたら残された人はどうなるの？いくら子供を助けたからって、あなたが死んでしまったらどうしようもないのよ！トラックに轢かれたって病院から聞いた時に私がどう思ったかわかる？死ななかつたからよかつたじゃなくて、「死んでたかもしれなかつた」なのよ！「足じゃなくて胸」や頭だつたらあなた「死んだ」のよ！そうなつていたら私は何を思つてこれから生きていけばよかつたの？もう2度と、2度と死ぬようなまねはやめて頂戴。お願いだから」

そう言つて母親は泣き出した。

この言葉が向けられたのは薬による深い眠りの「この世界の宗」だろう。しかし、この言葉を聞いていたのは透明になつた「別世界の宗」だつた。

宗はこの言葉を聞いて顔を青ざめた。

“オレハイマナニヲシヨウトシテイタ？”

宗はたまらずに窓から外へと飛び出していった。

自分のしよつとしていたことに恐れをなして逃げた。

「あっあああああああああああああああ」

走って、走って、走って、走って。

姿が透明だったのは幸運だった。ガンツのことを知られると頭が吹き飛ぶ。

宗は人間では到底できないような運動をしながらまっすぐに、ただただまっすぐに走って行った。

己の犯しかけた罪に押しつぶされぬように、感情を吐き出しながら、ただただ走った。

走りつかれて倒れた宗は夜空を見上げながら今後のことを考えていた。

そこは山の中腹で、星の綺麗な夜だった。

日常へは戻れない。

母親のあんな姿を見てしまったのだ、いくら渴望していたとしても、もう入れ替わりをしようとは思えなかった。

かといって、この世界の宗の前に姿を現し、日常を分けてもらうのも不可能だ。

この世界の宗は死んでいない、ガンツのことを知らない。

そんな宗の前に姿を現したら、事情を話したらガンツの爆弾で頭が吹き飛ばされること請け合いだ。

同じ理由でこの世界の“前の世界で知り合いだった人達”に合うこ

とも不可能だ。

爆弾の存在が全ての可能性を奪っていた。

だから、宗は耐えるしかない。

目の前にかつての幸せが転がっていたとしても耐えるしかないのだ。

それは想像を絶する拷問で、想像を絶する孤独であった。

“自分”という存在が、アイデンティティがなくなったようなものだった。

しかし、いつまでも泣いているだけというわけにはいかない。

異世界であれど、宗の居場所がなかるうと、宗は人間だった。

お腹もすけば眠くもなる。

宗は新しい居場所と生活するためのお金を手に入れる必要があると
考えながら、疲れに負けて眠りについていった。

長い、長い、始まりの1日の終りであった。

第3話…一日の終りに（後書き）

最初の一日終了です。

とりあえず自由になったから、色々と動かしていろいろと思います。

第4話・食う寝る所に住むところ（前書き）

タイトルとジユゲムに関係はありません（笑）
今回はセリフがほとんどなく、短いです。

第4話：食う寝る所に住むところ

朝日が昇り、鳥のさえずりが聞こえる。

秋に差し掛かり、気温の寒くなってきた中、男が目覚める。

「ここはどこだ？」

山の中で目覚めた宗の第一声はこれだった。

「ああっ、そういえば俺は死んだんだっただ」

思いだすように言った後、宗は顔をしかめた。

いくら受け入れていようと、やはり自分の死、居場所の喪失は受け入れがたいものであった。

頭がはつきりするまで少しの時間を置き、宗は立ちあがる。

「とりあえず、何か食べないと身が持たないな」

帰る場所の無い宗は昨日食事に取りつけなかった。

早いところ食料の確保のできる状況を作り上げないと、星人に殺される前に餓死してしまう。

宗はその存在故に人に助けを求めることが難しかった。

もう一人の宗と頭についている爆弾の存在が一人を強制しているのだ。

宗はサバイバルのやり方を知らない。

サバイバルに必要な知識を持っていないためだ。

川があれば魚を取ることが出来ただろう。
しかし、魚の取れる川などどこにでもあるわけではない。

では動物を狩るのはどうだろう？

これもまた難しいと言える。

宗は姿を消すことが出来ても気配を消すことは出来ない。

動物は匂いや気配に敏感なので、姿を消すだけでは近づく前に逃げられてしまっだろう。

そして、仮にしとめられたとしても、血抜きも皮剥ぎのやり方も知らないし、道具もない。

やり方がわからず、道具もなければ火さえ起こすことが出来ない。
それらのことを考え、宗は町に降りることにした。

町に降りれば食料はいくらでも手に入る。

問題は金だけだ。

宗が死ぬ前にポケットに入れていた金は約1万円。

1回食べるだけなら十分な金額だが、食事は1日3回、生活の場所等の確保にもお金がかかることを考えるとあまりにも少ない金額だった。

町中に降りた宗は一番近くのコンビニでおにぎりを買った。

節約のためと、自分の暮らしていた町で余り長い時間姿を見せていたくないためにだ。

そして、食事を済ませた後、人影の無いところへ行き、姿を消した後駅へと向かった。

スーツの力を利用して改札を飛び越え、人にぶつからぬように人通りの少なくなるまで待つてから電車に乗った。

そうして姿を隠しながら自分の町から離れた町へ、自分を知ってい

る者のいない町へと向かっていった。

そうして着いた町でまず探したのは山であった。人目を気にすることなく、色々な準備が出来るからだ。

山に着いたら、穴を掘って荷物を置いた後、カモフラージュしてから町に戻った。

そして、身軽になった宗は携帯を利用してアルバイトを探しだした。携帯が何故利用できるのか、料金はどうなっているのか等はわからないので気にしないことにした。

アルバイトは日雇で短時間の力仕事が理想的だった。

スーツの力で強化できる分、給料の高い力仕事はおいしいからだ。

そうして生活体制を整え、昼はバイト、夜は訓練と対策練りに使った日が増えて行った。

そして、背筋にゾクツという感触が来て、戦争の日であることを悟った宗は装備を確認して、転送されていった。

前回の戦争から12日後の夕方であった。

第5話・役者は集う

転送が始まる

宗が転送された時にはすでに前回のメンバーは全員揃っていた。宗が転送されてきたことに気がついた明理とスーツ男、高岡が近寄ってくる。

「君、なんで前話の途中で帰っちゃたの？」

「てめえ、ざけてんじゃねえぞ！」

明理は問い詰めるように、高岡は攻めるように宗が途中で帰っていたことについて聞いてくる。

「悪かったな、色々あって疲れてたから家に帰ることしか考えられなかったんだ」

本音は関わりたくなかったからだが、こつ答えることにする。

「…まあ、過ぎたことだし良いわ」

「ツケ」

そこまで怒ってはいなかったのか、二人が離れていく。

宗はすぐに解放されたことに内心ほっとしながら、壁際へと歩いていき、座って時間まで待つことにした。

周りの様子をうかがうと、大樹と明理が仲よさそうになっており、大樹の顔に恐怖のほかにはほんの少しの自身がうかがえた。前回の戦いの後訓練を重ねてきたのは宗だけではないようだった。

ガンツの球体からレーザーが放たれた。

転送のレーザーだ。

空中から出現したのは、ひどく怯えた目つきの少年であった。

“西だ”

ガンツ本編まで生き残っている唯一の男、西の登場である。

「あッ、あれ」

西は驚いたように辺りを見回す。

それはそうだろう、死んだと思ったたらいきなり知らない部屋に移動しているのだ、驚かないはずがない。

大樹が近づいていつて説明しようとしたが、何と言っているかわからないのか、結局明理に任せられることとなった。

「君、名前は？」

明理が話しかけて説明を始めた。

西は話しかけられると動揺を抑え、急に鋭い目つきになって明理を見ながら会話をしていく。

この状況で動揺を抑えて冷静に状況を把握しようとしていることに、宗は内心感心していた。

自分はあるように動揺をすぐに収めることなど出来なかったからだ。

明理が西に説明をしている途中で、またガンツからレーザーが射出

された。

今度は背の高い長髪の男性だった。

“…和泉”

狂気の天才和泉紫音である。

「こ……ここは……オレは、どうして」

さすがの和泉も動揺しているようだった。

今度こそはと、大樹が話しかける。

「すぐに準備してほしい。事情は追い追い説明するけど、俺たちはこれから戦わなきゃならない」

「戦う?」

大樹の言葉に和泉は胡散臭げに大樹を見返したが、ややあって、ふつと口元に笑みを浮かべた。

「…戦いだって?ふん、殺し合いでもやるっていうならやってもいいけどな」

「冗談でもそんなことは言わない方がいい。これからやるのは、本当に命がけの戦いだよ。こっちにも武器や身を守るスーツがあるけど、相手も」

和泉はその言葉を聞いたとたん、大きく目を見開き、そして笑った。

「そりゃいい、それが本当なら、ぜひやりたいね」

といい、装備について聞いてきた。

脅威の対応の速さである。

そして、メンバーがそろったのか、ガンツから例のハードロック調のラジオ体操が鳴り響いた。

「なんだ、これ？」

神経質そうに西が顔をしかめる。

「始まりの合図さ。慣れておいた方がいい」

「なんの？」

答える大樹に西が疑わしげに言い、大樹が指でガンツを指し示す。

「おまえら死んだから、命をどう使ってもいい……かよ。こりゃいい」

和泉が愉しげに笑った。

メッセージが消え、星人の情報が表れる。

「はなこさん星人？口癖「はい」？バツかじゃねえの」

西が言う。

「最初は俺もそう思ったさ。聖徳太子に八つ裂きにされかけるまではな」

大樹が答えると同時に、ガンツが開き、スーツと銃が出てくる。

戦争が始まる

第5話・役者は集う（後書き）

次回から戦闘シーンです。

いよいよ直接戦闘！

上手く書けるように頑張ります。

第6話・殺し合い(前書き)

戦闘シーンです。
グロ注意。

第6話：殺し合い

転送された先は道路の真ん中だった。

右手はマンシヨンで左手は線路が走っている。

宗は左右を見渡し、リーダーを見ようとすると

「なんだア、人間かア」

後ろから声がして慌てて振り返る。すると、そこには

「うるせえなア」

「ほッといてくれエ」

「うまそうだア」

「くツちまえエ」

大型の人面犬がひしめいていた。

いきなりの戦闘に心構えの出来ていなかった宗はとっさに長柄の銃、ショットガンを撃ってしまった。

ショットガンは人面犬の1匹の胴体に当たり、はじき飛ばした。しかし、

「殺せエ」

それをきっかけに人面犬達が一斉に襲いかかってきた。

「うわああああ」

宗は思わず逃げ出した。

民家の屋根へと跳んだのである。

前回の戦いの時、屋根の上から攻撃することで戦闘を有利に進めた経験が頭に残っていた。宗は上へと逃げたのである。

それを見たさわやかが自分もと跳んできた。

しかし、スーツの訓練を積んでいなかったのか、スーツの力を活かすことができず、ジャンプが低かった。

それでも、屋根には届いて、屋根を掴むことは出来た。

結果、屋根にぶら下がる男と屋根の上に着地する男という図が完成する。

「大丈夫か!？」

「たっ、たすけてくれ」

宗はさわやかを屋根へと引っ張り上げようと屋根の縁へと走る。

その時

「ねえ、あたしきーれーいー?」

口裂け女がハサミを投げてきた。

ハサミはその大きさから、まるで飛車手裏剣のように飛んできた。

グシャ

「ツァ」

屋根にぶら下がっていたさわやかの頭へと突き刺さる。

さわやかは頭を縦に切断されて、屋根の下へと落ちて行った。

……血しぶきと脳漿を宗にばらまいてから。

「ッアああああああああああああああああああ」

初めて間近で感じる“死”

しかも、自分と同じくスーツを着た男がたった1回の攻撃で死んだのである。

宗の頭は間近で感じた“死”と自分にも迫りくる“死の気配”に埋め尽くされた。

そして、恐怖に駆られた宗は撃った。

「うつああああああああああああああああああああ」

恐怖を打ち消すように叫びながら、向かいくる“死”から逃れるために撃ち続けた。

ロククオンも狙いを定めることもしていない単なる乱射。それでも、距離が近い相手なら十分な効果を発揮した。

口裂け女の腹に命中して、口裂け女を殺す程度には。

宗は迫りくる“死”から逃れられたことに、胸をなでおろした。

……宗はあまりの口裂け女の恐怖に忘れていたのだ。何故自分が逃げて来ていたのかを。

「エサだア」

宗は肩に衝撃を感じ、ショットガンを落としてしまう。

人面犬である。

星人は常識で捉えられるような生物ではない。

だから、犬が屋根に上って来ることもあり得るのだ。

宗は再び“死”が迫ってきたことを感じ、慌てて振り払う。

肩に噛んできた人面犬は屋根から落ちて行った。

しかし、安心できるわけではない。

慌てて宗が後ろを振り返ると、人面犬がこちらに迫って来ていた。

その数3匹。

宗は腰に装備していた刀を抜いた。

接近戦では銃より刀の方が向いているからだ。

宗は飛びかかってきた1匹に刀を振るった

「ッおおおお」

飛んできた人面犬は宗によって真つ二つに引き裂かれた。

後2匹である。

今度は宗から襲いかかる

「死ねええええええ」

宗に向かっていった人面犬は勢いが付いており、襲いかかる宗の攻撃を避けることが出来なかった。

「死ねエ人間」

最後の1匹が横から食いついてきた。しかし、足に牙が食い込む感触はあったが、スーツに阻まれ、宗にダメージはなかった。

「死ぬのはお前だア」

宗は食いついて離れないのを良いことに、動きの止まった人面犬を切り裂いた。

これで3匹とも殺したことになる。

しかし

「人間ン、食べさせるオ」

「うー」

屋根に上り終えていたのが3匹なのであって、新たに2匹上って来ていた。

「痛くねえんだよッ。お前らなんて恐くねエ！刀の練習台にしてやるよ」

人面犬の恐さは数が多いこと。

1匹1匹は弱い。

そして、登れる場所が限られており、少しずつしか来られないのならば人面犬はもはや敵ではなかった。

宗は刀の実践練習へと移っていった。

人面犬を全滅させた後、屋根で休んでいた宗の体がレーザーの光とともに消えていった。

第6話・殺し合い（後書き）

戦闘シーンって勢いで書くんですね、わかります。

第7話：始まりの一步

転送された部屋には生き残ったメンバーが集まっていた。

Results…

宗が最後だったらしく、宗が転送されるとすぐに採点が始まった。

「採点か……」

大樹がそう言い、周りを見渡す。

宗もつられて見回し、欠けているメンバーを確かめた。

目の前で殺されたさわやかなのこを思い、宗は少し顔を俯けた。

ほすてす 0てん

ちかん 0てん

0点表記が続いて行く。

あかりちん 16てん total 83おポイント あと17

おポイントで finish

にげごし 6 テン あと 94 テンで おわり

いずみくん 10point あと 90 てんで おわり

ようやく得点獲得者が出てきた。

「前の時もだったけど、今回も初めての人間の点数じゃないわね」

和泉の点数を見て明理が言う

「初めての人間って、もっと駄目なもんなのか？」

「まあ、そうね。普通は点数を取るとか、そんな問題じゃなくなるから…」

ただ、例外もいるみたいだけどね」

そう言っつて、明理は宗の方を見て、ガンツの出す宗の得点表記を待
つ。

しゅうくん 12 おポイント total 60おポイント あ
と40おポイントで finish

宗の得点は12点。

前回ほど異常な得点ではなかったものの、かなりの得点である。

「また狙撃したの？」

明理が聞いてくる

「いや、今回はまともに戦ったよ」

宗の返事に明理が驚いた顔をする。

狙撃ならば納得できたが、2回目の新人が直接戦闘で、ボスも倒さ
ず12点。

「宗くんといい、和泉くんといい、強い人がどんどん来るわね。このままだと次は怪獣のような人でも来るのかしら」

明理が驚きを通り越してあきれたような顔をしながらそう言う。

「彼ね、2回目なの。つまりあなたと同じ初めての時に48点も取った“例外君”よ」

明理が和泉に対してそう言う。

その言葉を聞いた瞬間和泉の顔が邪悪に歪み、好戦的な目を向けてきた。

「偶然だよ。たまたま前は狙撃の機能に気がついて、敵も固まっていたから点数を稼げただけだ。今回だって訓練をつんでおいたから何とかなっただけで実際はやばかった。始めから大立ち回りを演じたらしい和泉くんにはかなわないよ」

宗はそう答えた。

戦闘狂で戦いの天才の和泉に目を付けられなくなかったからだ。確かに得点だけを見たのならば、宗は異常な強さを持っているように見える。

しかし、宗はスーツと武器の使い方を知り、備えをしていただけで、強いわけではない。

少し前までは何の変哲もないただの大学生だったのだ。技術的にも精神的にも強いわけではない。

「フンツ、どうだかな。何にせよ、俺の獲物はとるなよ。」

和泉はそう言った後、明理の方を向き

「お前もだ。直ぐにお前を超えてやる。だから、俺の獲物はとるなよ。」

そう言い残し、和泉は去って行った。

去って行った和泉の方を見ていた宗に大樹が話しかけてきた。

「宗くんでしたよね。俺生き延びるために明理さんに訓練を付けてもらってるんですけど、一緒に訓練しませんか？」

大樹の言葉に、宗は考えた。

今後の身の振り方についてである。

今回直接戦ってわかったことは、宗はまだまだ弱いということだ。たいして強くない星人。それなのに追い詰められることになってしまった。

そして、宗の知識では次からの敵は強い。

宗は戦うにはまだ早いと感じていた。

また、一つ考えていたこともある。

ガンツのエリアについてだ。

ガンツは東京だけではなく、各県にもあるし、世界中にもある。

これは一度召喚されたらずっと同じ所に召喚されるのか、それとも“召喚される時、そのガンツが担当するエリアにいる選ばれた者が召喚される”のかにより大きな違いを生む。

ガンツメモリーにはそのこのエリアで“死んだ者”のデータが載っている。

“生きている戦士”のデータではないのだ。

また、最初に召喚される時は死んだ、もしくは死にかけただけのただの人間が召喚されるのだ。

転送に必要な条件などなく、誰でも転送できるのであろう。

それを考えると、別の県に行けばその県のガンツメンバーに混ぜてミッションをすることになるのではないだろうか？
はなこ星人が弱いことを知っていた宗は今回経験を積むために東京から移動しなかったが、次の敵は強い。

東京で大きく動くことによつて原作を壊してしまい、助かるはずの地球がカタストロフィで負けてしまうことを避けたい宗としては移動できるのならば別の県にて力を貯めるべきではと考えていた。

“この世界の宗”と出会つてしまつリスクを低くするためにも、他の県への移動は悪くない判断であつた。
移動のためのお金はアルバイトですでに十分にたまっている。
だから、宗の答えは

「悪いけど、俺東京から引つ越すんだ。だから、練習には参加できない」

不参加であつた。

それを聞き、大樹は

「そつなのか、それなら仕方ないな」

そつ答え、あきらめた様子だつた。

「悪いな。引つ越しの準備もあるから先に帰らせてもらつ」

そつ言い、宗は部屋を去つて行つた。

物語は動き出す。

宗は歩き出す。

誰も知らない、原作知識も存在しない未知の戦場へと歩き出す。

宗の戦いはここから始まる。

第7話・始まりの一步（後書き）

習作ということ、ちょっと挑戦してみることになりました。

原作に沿って話を作るつもりだったのですが、原作とは離れた展開になりそうです（・・・）

…どこの県にしよう

第8話：新天地

窓の外から景色が流れていく。

電車の中で宗は新天地へと想いを馳せていた。

埼玉

宗が選んだ場所である。

物語の舞台として、東京都大阪以外は登場していない。

知識を活かすのならば東京から出るのなら大阪しかないだろう。

しかし、それは選択しなかった。

なぜなら、危険だからである。

大阪には7回クリアの岡を筆頭に4回クリアや3回クリアといった強力な戦士が多い。

しかし、その戦士たちのメンバーの3分の2が殺されたという1000点の星人が出たことがあるという。

しかも、原作での戦いを含めると2回1000点の星人が出ることになる。

1匹で1000点の化け物。

1匹1点にもならない程の雑魚に苦戦している宗からすれば想像を絶する強さを持っていることになる。

また、100点ということはその上がない数字であり、“最低でも1000点以上の強さ”ということでもある。

……正直に言っただけで出会った瞬間殺される自信がある。

だから選択肢として大阪は除外され、その他の地域については知識が全くないのでどこを選ぼうと同じであった。

それならば、お金のかからない隣の県にしようと考えたのだ。

東京近辺で考えた時、本編で出てきていない県を考えた。

へたに本編に登場するキャラクターと関わり、本編に影響させたくなかったからだ。

強者を死なせないようにするとかならまだいいだろう。

しかし、最悪の展開は本編に登場するはずのキャラクターを自分が介入したせいで殺してしまい、それが原因でカラストロフィでの戦いに敗北することだ。

それだけは何があっても避けなくてはならなかった。

東京近辺で本編に登場していない県。

この条件で引っかけたのが埼玉である。

ここでなら好きなように動くことが出来る。

今まで人前に出ることも制限し、ガンツ部屋での会話や行動も制限し、誰一人として相談できる相手がいない状況だった宗。

出てくる星人の情報が全くなく、危険も大きかったが、宗にとって自由に動いても良いというのはその危険を冒してでも手に入れたものであった。

胸の内に様々な思いを抱えながら乗っていた電車が止まる。

埼玉についたのだ。

宗は興奮を抑えつつも電車を降りる。

最初にやるべきことは住所探しである。
最長2年近い間住む場所になるのだ、良く考えて選ばなければなら
ない。
宗は不動産屋へ向かった。

「お気に入りいただいて何よりです。ご契約には保証人の方が必要
です。こちらの契約書に保証人のサインを頂いて来てください。」

……保証人のことを忘れていた。

契約には保証人が必要であり、宗に保証人となってくれる存在はい
ない。

しかし、正直に言うことは出来ない。

宗は迷った挙句

「……実は俺には保証人となってくれる人がいないのです。」

嘘をつきとおすことにした。

「両親に捨てられ、孤児院で育った俺はある日新しい親に引き取ら
れました。彼らは子供が産めない体質らしく、私を実の子のように
育ててくれました。しかし、その両親も事故で亡くなって……」

宗はつまらないように気を付けながら必死で頭を回転させて話して
いく。

「……お辛いことを言わせてしまい、申し訳ありません。」両親で
だめならその親戚の方でも大丈夫です」

「……実は私を引き取ってくれた母は子供が生めない体質のせいで父と一緒に誰も知り合いのいない場所へと駆け落ちをしてきたのです。だから、両親の親戚にはあったことがなく、どこにいるのかもわからないのです。」

「そうですね、それでしたら血縁関係がない方でも構いません。友人や同僚などでもいざという時に代わりに支払う能力のある相手でしたらどなたでも構いません。」

宗は必至で反論を探す。

「……………じッ、実は両親がなくなった事故というのは火災でして、両親と共に引越したばかりの頃に起きたものでした。その火災の時に私は外出していたから助かったのですが、その時に携帯を家に忘れて外出をしていました。それで、携帯がなくなりかつての友人とは連絡が取れなくなり、引越したばかりの地で知り合いもおらず、両親もなくなり天涯孤独の身となったのです。その際に保険でわずかばかりのお金を得た私は嫌な記憶の残る町を出て、今日ここに来たんです。だから、私には知り合いもおらず、保証人となってくれる者がいないのです。」

宗は冷や汗を隠し、表情がおかしくならないよう、話がおかしくならないように必死に考えながら話を続けた。

…緊張のあまり声は震えてしまっていたが。

「そっそれは… 何とも大変でしたね。お辛いことを思い出させてしまい、大変申し訳ありませんでした。大丈夫です、私に任せてください。私が保証人になります。上司にばれたら怒られるかもしれませんが、気にしないでください。私がやりたくてやるのです。だから、元気を出して下さい。そんな泣きそうな声で俯かないで、前

を向いて下さい。この町はいい街です。知り合いはこれから作れば
いいんですから。」

…どうやら緊張で震える声は泣き声に、表情をごまかすための俯き
や堅い表情は悲しみをこらえる表情に見えたようだ。

そしてこの人良い人すぎるだろう！

宗は複雑な内心を抱えながらも自分を励ます店員に礼を言った。

「ありがとう」

嘘の話しだろうと信じてくれて、自分を励ましてくれた店員に、住
みかという問題を解消してくれた店員に、上司に怒られる覚悟をし
てまで初対面の自分の保証人になってくれた店員への感謝の気持ち
を込めて。

住む場所の出来た宗は生活用品を整えるために町に出た。

これは視察も兼ねている。

次の戦いからは舞台が埼玉に移る。

そうなるとう埼玉の地形を知ることが戦いを有利に進めるのに役立つ。
自分が見て回った場所が戦場になる可能性は低いが、やらないより
はましである。

買い物を買わせて、家に帰る。

家に帰ると生活空間を作り始める。

スーツのアシストで疲れもないままかなりの速度で終わらせること
が出来た。

普段からスーツを使っておけば力の調整の訓練にもなり一石二鳥で

ある。

部屋作りが終わると次の戦いまでにすることを考える。

スーツの使いこなし

精神鍛錬

刀と銃の使いこなし

情報集め

やるべきことはたくさんある。

前回の戦いではスーツを使いこなせていたから宗は屋根に登れて、使いこなせていなかったからさわやかは登れずに死んだ。

その事を考えるとスーツの使いこなしは自分の体と同じくらいにかせるくらいにまでなっておきたい。これは着ている時間が長ければ長いほど使いこなせると考えて、常にスーツは着ていることにする。

精神鍛錬は前回の戦いで一番反省すべき点だった。

前回の戦いでは精神的に脆かったが故に焦って、取り乱して、奇襲を受けた。

最初の人面犬との遭遇ではショットガンを撃つ前に距離をとり、相手の観察をするべきだった。

口裂け女との戦いでは口裂け女の行動から目を離すべきではなかったし、口裂け女が近寄ってきた時もロックオンしていればもっと早く倒せていた。

最後の人面犬との戦いでは、周囲の警戒をせず、目先の危機を脱しただけで気を抜いてしまった。

もしもつと強い星人だったならば、後ろからの奇襲で、そのまま一撃で殺されていた可能性も高かったはずだ。

宗が生きているのも運が良かったからに他ならない。

刀と銃の扱いはこの戦いにおける最重要要素である。

基本的な攻撃手段はこの2つなのだから、鍛えすぎるほど鍛えても足りないくらいである。

しかし、こればかりは実践でないと得られないものも多い。

だから、剣道やサバイバルゲーム、クレールン射撃といった実践に近い訓練の出来る場所を探す必要があった。

情報集めは主にパソコンを使って行う。

原作で西がインターネットから情報を得ていたように、大阪の花紀がデジカメとパソコンで敵の情報を見れるようにしていたように、情報をうまく得ることが出来れば大きな力になる。

目下のところとしては、アルバイトでお金を稼ぎ、パソコンを買い、剣道で刀と精神の修業をする。

これがやるべきことであり、行動方針だった。

20日後戦場へと送られるまでの準備期間のことであった。

第8話：新天地（後書き）

というわけで、場所は埼玉に決定しました。

…正直京都にするかで迷った！

だって京都人のインテリメガネ君書いて面白そうなんだもの！

私自身大阪人なので大阪つてのも考えたんですけど、ガンツ原作の大阪人と上手くやっていけそうにないから大阪はあきらめました。

…大阪人つてあんなに極道みたいなんばっかちゃうよ。

つてかあんな不良ずつと住んでて見たことないし。

良い人いっぱいいるから大阪を嫌いにならないでね。

以上、大阪ディスんなやの会会長からの演説でした（笑

第9話：埼玉ガンツチーム

転送が始まる。

戦闘の日である合図の背筋の寒気を感じた宗は期待と不安と共に転送を待った。

戦闘への不安

メンバーへの期待

どのようなメンバーなのか。敵は強いのか弱いのか。思いを胸に、宗は転送されていった。

ジイイイ

部屋にはすでに10人の人間が転送されていた。転送された部屋で宗が思ったことは一つ。

スーツ姿の者がいないということである。

ここで、考えられることは3つ。

- 1．スーツの戦士がまだ転送されていない
- 2． 前回の戦いで全滅した
- 3． これまでの戦いで、スーツを着たモノがおらず、全滅し続けていた

1ならば待てば良いが、2か3ならば自分から動くしかない。

「どういふ状況かわからないと思うだろうけど、聞いてくれ。ここに転送されてきた人間はこの後戦場へと向かう。ここであの黒い球体、ガンツからスーツと武器を受け取って宇宙人みたいなやつらと殺し合いをするんだ。」

「宇宙人？」

「こんな時に冗談言わないでよ」

「はア、結局何もわからないのか」

「てめえがケてんじゃねえぞ！」

「……」

聞いていた皆の眼に失望が混じる
信じてはもらえなかったみたいだ。

当然ではある。

宗一人しかスーツを着ているのが居ないうえに宇宙人だ。
頭がおかしくなっているコスプレ妄想オタクのたわごとだと取られるのが普通だ。

宗は殴りかかってくる不良のこぶしを受けとめながら言う。

「信じてくれ、もうすぐ音楽が鳴る。それが開戦の合図だ。そしてらその球体から敵の情報と装備が出てくる。スーツは身を守ってくれるモノなんだ。せめてスーツだけでも着てくれ」

「てめえ… ツケ」

力で叶わなかった不良が離れていく。

そして、それを合図にしたかのようにガンツから歌が聞こえてくる

「パニックパニックパニック全開なあ」

…クレヨンし ちゃんの歌だった。

「何だこれ？」

「なんでし ちゃんの歌が」

余りにも場違いな歌に皆が戸惑う。

「これが合図の歌だ、もうすぐその球体から武器が出るぞ」

宗は内心スーツの戦士が表れなかったことに焦りを覚えていたが、それを隠して皆にスーツを着させようとする。

一人で勝ち抜けると考えている程宗はうぬぼれてはいない。

一人でも多くの者にスーツを着させることが重要だと考え、焦っていた。

てめえらの命は
無くなりました

だから新しい命を
どう使おうが私の勝手だし

って理屈なのだす

「何だこれ」

「ふざけてんのか」

ガッツの表面に出た文字に嘲笑と苛立ちの声が向けられる。

「文章はふざけているけど、内容は全然笑えないよ」

宗がそう言った後、ガンツに敵の情報が載る

アニメ星人

特徴

ちっちゃい

はやい

好きなもの

カ タムロボ

口癖

わっはっはっはっは

クレヨンし ちゃんにそっくりな映像が出てきた。

「アニメ星人って」

「はっはっは、クレヨンし ちゃんは実在する宇宙人でしたっか」

不良が笑い飛ばす中、ガンツが静かに開いた。

「これが武器だ。奥の名前入りのスーツケースにはスーツが入っている。もう時間がない。急いできてくれ！」

宗が必死に話しかける中、不良は笑い飛ばして去って行った。

不良以外のメンバーは銃やスニーカーを興味深そうに見ている。学生がスニーカーを手に取り、中を開ける。

「うっわ、あの人を着てるのとおんなじスニーカーが出てきたよ」

それを見た5人が自分のスニーカーを取り出し、中を開ける。全部におんなじスニーカーが入っている。

「私のケースにも同じのが入ってる」

「ださいスニーカーだな」

「これを着るのか？」

「こんなダサいの着たくないんですけど」

「……」

スニーカーを怪しんで観察するメンバーたち。

しかし、着ようとする者はいない。

焦った宗が説得しようとした時

「私は着る」

宗に最初に話しかけた黒髪の女性がそう言ってスニーカーを持った。

「歌が流れてきたのも、武器が出てきたのも彼が言う通りになったんだもの。彼が着ているスニーカーもここにあるスニーカーも同じものなら重要なものなんじゃないかって思うもの」

彼女はそう言い

「それに、信じられないような話ばかりだけど、嘘を言っているよ

うには見えない。だから私は着るわ」

そう言っただけ彼女は部屋を出て行った。

それを見た不良が着替えると聞いて覗きに行こうと立ちあがりかけた時、不良の頭が消えていった。

転送が始まったのだ。

それを見たメンバーは

「きつ消えてくぞ」

「どうなっちゃうの？」

「これもさっき言っただことだ。もしかして全部本当なんじゃ」

取り乱すサラリーマンとOLに学生が茫然とつぶやく。

学生をつぶやきを聞いたメンバーが慌てて着替えを始める。

それに慌てて学生も着替えようとするが、学生の頭が消え始める

「ま、まだ着替えてないのにどうしよう」

慌てる学生に宗は

「大丈夫だ、向こうで着替えればいい。転送されても家に帰ろうとするなよ。」

そう言い、学生を見送った。

学生が消えていく途中、黒髪の女性が着替えを終えて戻ってきた。

女性は消えていく学生に驚いているみたいだったが、それを見た宗は

「大丈夫だ、転送されているだけだ。ここにいる皆はもうすぐ転送される。転送された先で死にたくなかったら絶対に帰ろうとしないでくれ。エリアの外に出たら頭が吹き飛ぶぞ」

そう言う宗の頭が吹き飛ぶという言葉に驚いたサラリーマンが

「頭が吹き飛ぶってどういうことですか！？それに、エリアってなんッあああ」

話している途中でサラリーマンが転送されていく。

「時間がない。転送先で説明するから転送されても余りうるつきまわらないことだけ守ってくれ。」

そう言い、宗は銃を掴んで残ったメンバーに渡していく。

「武器だ。使い方は向こうで説明する」

武器を渡した宗はそのままバイクの部屋へ向かう

「どこに行くの？」

「この部屋だ。バイクが置いてある。戦闘で使えるかもしれないから取っておきたい」

そついい、部屋に入りバイクにまたがる。

そしてバイクにまたがった時、転送が始まった。

転送先は住宅街だった。

そこには先に転送されていた人達が居た。

バイクの存在に驚きつつも、宗が出てきた途端に詰め寄った

「どうなってるんだ、頭が、あの不良の頭が爆発したぞ」

「変な音が聞こえるの、いったい何が起こってるの!?!」

サラリーマンとOLの二人がそう言う。

宗は死者を出してしまったことに悔やみながら、レーダーを出して言う

「このレーダーを見てくれ。ここに囲いがあるだろう。この囲いを出してしまったものは頭が吹き飛ぶ。変な音が聞こえてくるのは警告音だ」

そう言うとき表情を青く変えて周りの皆が宗の所に集まり、レーダーを見る。

「そっそんな。じゃあこれからこんな狭いところで暮らしていけるのか」

そう言うサラリーマンに宗は

「いや、戦いが終わるまでだ。戦いが終わったらエリアからも出られるし、日常に戻る」

宗の言葉に皆が安心して顔を緩める。

サラリーマンが続けて敵について聞くところとした時

「わっはっはっはっは」

笑い声とともに登場した2メートル近い大きさの2頭身のし ちゃんそっくりのアニメ星人がサラリーマンを押しつぶしながら登場した。

「きゃあああああああああああああああああああああ」

OLの叫び、皆が震えだす。
そんな中宗は

「こいつが星人だ！俺が戦う、皆逃げろ！」

宗が叫ぶとそれを合図にしたかのように走り出すメンバーたち。

そんな中残った者もいた

黒髪の女、鋭い目つきの男、学生の3人だ

「何している、守って戦える程余裕はないぞ！」

叫ぶ宗に

「こつ腰が抜けて動けない」

「……こいつを倒せばいいんだろう？」

「逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ」

シ ジ君！？とツツコミたくはあったが、とりあえず黒髪の女性に攻撃を向けさせないように、宗はアニメ星人を撃った

「こつちにこいよ、撃ったのは俺だ！俺がおめえをぶっ殺してやる」

そついい、注意を引きながら宗は離れていく

「その女の人を守っててくれ！その銃は引き金を同時に引いたら弾が出る」

宗はそう言い残し、アニメ星人を連れて走り去って行った。

第9話：埼玉ガンツチーム（後書き）

迷ったけど全員新人って設定にしました。

まだ名前も出てきていないけど、最初に話しかけてきた黒髪の女性
をヒロインにする予定です。

…アニメ星人ってネタ的にヤバい？

閑話・それぞれの思惑（前書き）

新チームの3人の視点です。

いつもより5倍くらい長いです。

閑話：それぞれの思惑

Side 黒髪の女性

私は刺されたはずだった。

私はグラビアアイドルをやっている。

芸名はアヤカ。本名の崎本彩さきもとあやからとった名前だ。

街を歩いていたら声をかけられたのだ。

アイドルに憧れているわけではなかったが、興味がないわけでもなかった。

水着までならという条件のもと、仕事を始めた。

私は順調に人気が上がっていき、ファンの人も出てくるようになってきた。

あのレイカのような人気はなかったが、それでもだんだんと雑誌に載ることも多くなっていった。

今日は初めてのテレビ撮影の日だった。

地元の番組だけど、凄く緊張した。

撮影が終わった帰り道、解放感から一人で散歩したかったので、見送りの人を断って歩いて帰った。

それがいけなかったんだろうか

人通りの少ない道に出た時、男が声をかけてきた。

「アヤカちゃん」

見知らぬ男だった

「今日は一人なんだね」

「…ええ、ちよつと歩きたかったの」

男の雰囲気少し怖いモノを感じながらも返事をする

「あなたは誰？」

彩が問うと男は顔を怒りに染め

「ぼつ僕を知らないのか！？いつもあんなに思ってるのに」

男の剣幕に彩は後ずさる。それに気づかず男は言う

「いつも君の顔を見てたよ。撮影現場にも行っていた。僕の部屋の壁は君の写真でいっぱいさ。そんな僕を知らないだなんてひどいんだなアヤカはでも大丈夫、知らないならこれから知っていけばいいんだしね。ずっと君が一人になるのを待っていたんだ。君はどんな輝きを強くするからね。君の光によって来る糞虫共が周りをうろついていて邪魔だったんだ。僕たちのロマンチックな告白シーンに邪魔な虫はいらないからね。でもやっと一人になってくれた。君も僕に告白されるために一人になってくれたんだろ？ やつと言える。待たせてごめんね。付き合おう。これで僕たちは今日から恋人同士だ」

男はまくしたてるように話す。

彩は男の言葉に

「っか、勝手なこと言わないでよ！私はあなたなんて知らないし、

「あっあの、ここはどこなんですか？私はいつたい…」
「知るかよ！こっちが知りてえよ」

サラリーマンらしき男から帰ってきた答えは事情を知らないという
ものだった。

「俺たちね、皆死んだって思ったらここにいたんだよ」
「死って…そっそんな」

何かを諦めたような表情を浮かべる学生らしき少年の言葉に驚いて
いるとレーザーが出てきて、鋭い目つきの男が現れた。

「つむ、ここは…」

男もどうやら同じ境遇らしい。

現れた男に学生が

「ようこそ死後の世界に」

と自嘲気味に言う。

それを聞き、辺りを見回した男は黙って部屋の端へ行き、座り込ん
だ。

そして、またレーザーが出て、男が転送されてくる。

黒いスーツに身を包んだ男だ。

その男は驚くでもなく決意を秘めたような眼で辺りを見回している
のを見て彩は思わず話しかけた。

戦うの？

転送ってさっきのやつのこと？

それに何より

「宇宙人？」

そうっ、確かにこの男はそう言ったのだ

「こんな時に冗談言わないでよ」

「はア、結局何もわからないのか」

「てめえザケてんじゃねえぞ！」

「……」

皆が男を攻める。

それはそうだろう、宇宙人なんて信じられるはずがない。

しかもそれと戦うだなんて妄想にしか思えない。

でも、彼の言葉には真摯な響きがあり、嘘と断じるのはためらわれた。

信じられないと言えば死んだはずの私が見知らぬ場所で目が覚めたことも、刺されたはずのお腹に傷がないことも、そして何より先ほどの転送は信じられるものではなかった。

そう考えていると、怒った不良が男に殴りかかる。

それを見て「危ないっ」と叫びそうになった私は言葉を飲み込んだ。男が軽々とそれを受けとめたからだ。

男は不良のこぶしを受けとめながら言う。

「信じてくれ、もうすぐ音楽が鳴る。それが開戦の合図だ。そしてらその球体から敵の情報と装備が出てくる。スーツは身を守ってくれるモノなんだ。せめてスーツだけでも着てくれ」

男が真摯に訴えかける。

かなり詳しく話してくれた。

もしこれがこれから先全部起るのならば、本当に宇宙人との戦いなんてモノをしなければならぬのかもしれない。

「てめえ…ツケ」

力で叶わなかったらしい不良が離れていく。

そして、それを合図にしたかのようにガンツから歌が聞こえてくる

「パニックパニックパニック全開なあ」

…クレヨンしんちゃんの歌だった。

「何だこれ？」

「なんでしんちゃんの歌が」

私もなんでクレヨンしんちゃんの歌がと思ったが、すぐに考えを変える。

重要なのはそこじゃない。重要なのは本当に歌が流れたことだ。

「これが合図の歌だ、もうすぐその球体から武器が出るぞ」

男が言う。

それを聞き、球体の方に目を向けると

てめえらの命は
無くなりました

だから新しい命を
どう使おうが私の勝手だし

って理屈なのだす

球体の表面に文字が浮かんできていた。

「何だこれ」

「ふざけてんのか」

文字を見た皆がそれを笑う。

確かに言葉づかいは変だし、書体も子供の落書きみたいだ。
でも、内容は笑えない。

だって、私は死んだ記憶があるのだから。

「文章はふざけているけど、内容は全然笑えないよ」

男がそう言った後、球体に敵の情報が載る

クレヨン星人

特徴

ちっちゃい

はやい

好きなもの

カスタムロボ

口癖

わっはっはっはっは

クレヨンしんちゃんにそっくりな映像が出てきた。

「クレヨン星人って」

「はっはっは、クレヨンしんちゃんは実在する宇宙人でしたっけか」

サラリーマンがツツコミ、不良が笑い飛ばす。

でも、本当に情報が出た。

ここまで男が言っていたことは全部本当に起ってしまった。

…なら次に起ることは

球体が静かに開いた。

中から出てきたのは大量の武器だった。

本当だ。

本当に出てきた。

全部当たってしまった。

男の言うことは本当だったんだ。

「これが武器だ。奥の名前入りのスーツケースにはスーツが入っている。もう時間がない。急いできてくれ！」

男が必死に話しかける中、不良は笑い飛ばして去って行った。

私が恐怖のために動けないでいる中、学生らしき少年がスーツケースを手に取り、中を開けた。

「うっわ、あの人が着てるのとおんなじスーツが出てきたよ」

それを見た人達がスーツケースに向かっていく。
彩もはつとして、スーツケースへと向かっていった。

グラビア

…これだろうか？

名前じゃないの！？と内心思いながらも他のケースを見てもそれっぽいのなかった。

気を取り直して、スーツケースを持ち帰り、開けてみた。

「私のケースにも同じのが入ってる」

やっぱり入っていた。

「ださいスーツだな」

「これを着るのか？」

「こんなダサいの着たくないんですけど」

「……」

スーツを怪しんで観察する人たち。
しかし、着ようとする者はいない。
そんな中、私は

「私は着る」

そう言ってスーツを持って立ちあがる。

「歌が流れてきたのも、武器が出てきたのも彼が言う通りになったんだもの。彼が着ているスーツもここにあるスーツも同じものなら重要なものなんじゃないかって思うもの」

そう言ったあと、男の方を向き

「それに、信じられないような話ばかりだけど、嘘を言っているようには見えない。だから私は着るわ」

そう言って私は着替えるために部屋から出て行った。

着替えて戻ってきた時に見た光景は学生が消えていくという光景だった。

驚きの表情を浮かべる私に男は

「大丈夫だ、転送されているだけだ。ここにいる皆はもうすぐ転送される。転送された先で死にたくなかったら絶対に帰ろうとしないでくれ。エリアの外に出たら頭が吹き飛ばぞ」

そう言い放った。

転送も気になったがもっと気になったのは頭が吹き飛ばすという言葉だ。

どういふことが聞こえようとすると、サラリーマンが

「頭が吹き飛ばすってどういうことですか！？それに、エリアってなんツあああ」

代わりに質問を放ち、話している途中で転送されていく。

「時間がない。転送先で説明するから転送されても余りうるつきまわらないことだけ守ってくれ。」

そう言い、男は銃を掴んで残った人達に渡していく。渡されたのは小型の銃で、銃口がY字になっていた。

「武器だ。使い方は向こうで説明する」

武器を渡した男はそう言い、隣の部屋へ向かう

「どこに行くの？」

「この部屋だ。バイクが置いてある。戦闘で使えるかもしれないから取っておきたい」

そついい、部屋に入る。

中には見たこともない形のバイクが置いてあった。

男はバイクに乗ると同時にバイクごと消えていった。

一人残された私はバイクが消えたのを見て、持ち物は一緒に転送されるんだと思い、慌てて大きな部屋に戻り、手にしていた銃は腰にしまい、大きな銃を手取る。

使えるかはわからないけれど、無いよりはあった方がいいと思って。

銃を手にしたあと、私は転送されていった。

転送先は住宅街だった。

「どうなってるんだ、頭が、あの不良の頭が爆発したぞ」
「変な音が聞こえるの、いったい何が起こってるの!?!」

サラリーマンとOLの二人がそう言っつて男に詰め寄っていた。

男は悔やんだような顔をした後、レーダーを出して言う

「このレーダーを見てくれ。ここに囲いがあるだろう。この囲いを出してしまったものは頭が吹き飛ぶ。変な音が聞こえてくるのは警告音だ」

男がそう言うのを聞き、慌てて男の所に行き、レーダーを見る。

「そつそんな。じゃあこれからこんな狭いところで暮らしていけつてのか」

そうである。

ここから出たら頭が爆発するのならこのエリアの中だけで生活しなくちゃならない

しかし、サラリーマンの言葉に男は

「いや、戦いが終わるまでだ。戦いが終わったらエリアからも出られるし、日常に戻る」

そう言う男の言葉に安心する。

少なくとも戦いが終われば日常に戻れるという保証を貰ったのだから。

サラリーマンが続けて敵について聞こうとした時

「わっはっはっはっは」

笑い声とともに登場した2メートル近い大きさの2頭身のしんちゃんそっくりのクレヨン星人がサラリーマンを押しつぶしながら登場した。

「きゃあああああああああああああああああああああ」

OLが叫ぶ。

私は目の前でいきなり起きた惨劇に言葉を無くしていた。

そんな中男は

「こいつが星人だ！俺が戦う、皆逃げろ！」

男が叫ぶとそれを合図にしたかのように皆が走りだす。

待って、置いてかないで。

私は腰が抜けて動くことが出来なかった。

皆が逃げていく中、残っている人もいた。

鋭い目つきの男、学生の2人だ

「何している、守って戦える程余裕はないぞ！」

叫ぶ男に逃げようとしても逃げられない私。

「こっ腰が抜けて動けない」

「……こいつを倒せばいいんだろう？」

「逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ」

男を手伝おうとする2人と立てない私を見て、男はクレヨン星人を撃った

「こつちにこいよ、撃つたのは俺だ！俺がおめえをぶつ殺してやる」

そついい、注意を引きながら男は離れていく

「その女の人を守っててくれ！その銃は引き金を同時に引いたら弾が出る」

男はそう言い残し、クレヨン星人を連れて走り去って行った。

「あつ、ああ」

男の言葉に学生が頷き、こちらへとやってくる。

「つた、立てますか？」

学生が立てない私に手を差し出してきた。

顔面蒼白ながらも怯えを隠して振る舞う学生に私は自分を情けなく感じた。

そつだ、恐いのは皆同じなんだ。

それなのに、私一人へたり込んで足を引っ張るなんて。

そつ思い、学生の手を取り、立ちあがる。

「ありがとう」

私に私だけが恐いわけではないと気付かせてくれたという思いも込めて、礼を言う。

「もう、大丈夫、大丈夫だから」

そう言い、落としてしまった銃を拾う。

「私だけが足手まといになるわけにはいかないものね」

決意を込めて銃を見つめながら私はそう言った。

Side 彩 end

Side 学生

俺、かしきてつ榎樹哲はいわゆる隠れオタクというやつだった。

いや、かなりオープンでもあるのか？

仲良くなったやつには暴露して、その他のやつには隠してた。

今日は大好きなゲームの新作販売の日だった。

この日のためにバイトしてまで金を貯めたんだ、授業終わったらすぐに買いに行かなくちゃ。

授業が終わったら家にも帰らずお店に走った。

予約していたとはいえ、今すぐにでもやりたいんだ、はやる気持ちを抑えられなかった。

ゲームを手に入れた後は一直線に家に走った。

…浮かれていたんだと思う
だからだろう

車に轢かれたのは

………めったに車が通らない道だからって信号無視しちゃだめなんだね

………ゲーム……やりたかった……なあ

………

………

………

目が覚めるとそこは見知らぬ部屋だった

「あつあれ？」

部屋には誰もいない。

……意味がわからなかった

車に轢かれたんだ、目が覚めるとしても病院だろう。

それが見知らぬ部屋で一人っきり

わけがわからない。

そう思った時、気がついたことがあった。

「あれっ？怪我してない」

そうっ、体のどこにも傷も痛い個所もなかった。
いくらなんでもおかし過ぎる。

「ここって天国？」

それにしても殺風景過ぎる。

「はっはは。もしかして小説とかでよくある神に呼ばれてっつゃっか？」

乾いた笑いを浮かべながら、哲は望みをつぶやく。

理解できない事柄に直面して、理性を保つのに必死なのである。

「何なんだよこの部屋は。何なんだよあの黒い球は。何なんだよこの状況は。……誰でもいいから出てきてくれよ！」

哲は泣きそうになりながら、叫ぶ。

理解のできない状況に、たった一人で取り残される。それが彼の精神を削っていった。

そんな時、

ジィ

黒い球からレーザーが発射されたのだ。

突然のことに驚きながらも、哲は状況の変化に期待を込めて見つめる。

レーザーによって形創られて出てきたのは金髪にピアスといった一目でわかるような不良だった。

「あんっ！？ツんだここ？」

不良は辺りを見渡すと哲に目を付ける

「おいお前。んで俺がここにいんだ？」

不良に近寄られて、若干おびえながらも哲は答える。

「わっわかりません。ぼつ僕も気が付いたらここにいたんです。」
「あんっ！？てめえ嘘はいてんじゃねえだろうな」

不良の剣幕に思わず第一人称が僕になってしまった。…こんなやつ恐くない、恐くないぞ、俺。

不良は問い詰めるが、わからないものはわからない。

そう伝えると、興味を失ったのか不良は部屋を出ようとする。
しかし

「あんっ！？んだこれ？扉に触れねえぞ」

その言葉を聞いて驚いた哲は玄関まで行った

「てめえか、扉に触れねえぞ。どうなってやがる」

そう言っつて扉から離れる不良に代わって扉を開けようとする哲。しかし、

「さっ触れない！？」

「そう言っつてんだろつが。なめてんのかてめえ」

不良に睨まれるも、それどころではない。

「ほつ他の出口は？窓とか」

そう言つて先ほどの部屋に戻る哲。
しかし待っていたのは

「さつ触れない。一緒だ。この部屋のどこにも触ることが出来ない
！！」

どこにも触れられないという現象のみであつた。

その事実にも、この部屋から出られないんじゃないやという思考がよぎり、
怯える哲。

その時にまた

ジィ

レーザーが発射され、今度はサラリーマンとOLの二人が出てきた。
二人に話しかけ、話を聞いているうちに気がついたことがある。

皆自分が死んだ時の記憶があるのだ。

その後も出てくる人達に話を聞くうちに、全員が共通して死んだ時
の記憶があつた。

哲は悟つた

“俺、やっぱり死んだんだ”

そう悟つた哲は新しく出てきた目つきの鋭い男にこう投げかけた。

「よつこそ死後の世界に」

そう言つて自嘲気味に笑うしか出来なかつた。

その男が出て来たのは鋭い眼をした男の次だった。

全身に黒いスーツの男

コスプレ？

見たことの無い服だったが、それ以外には考えられないだろう。こんな服を普段着にしていたら職務質問の毎日だろう。とても映画かアニメのキャラクターのコスプレ以外には見えない。

「君も死んだの？」

先ほど出てきた女性が話しかける。

スーツの男は死んだという言葉に戸惑う……様子がなかった

「俺はこの部屋の事を知っている」

耳を疑った。

こんなわけのわからない部屋の事を知っているだって！？

「俺達本当に死んでんのか？」

そう、もし本当に知っているとしたら、それが一番知りたいことだ。

「どういう状況かわからないと思うだろうけど、聞いてくれ。ここに転送されてきた人間はこの後戦場へと向かう。ここであの黒い球体、ガンツからスーツと武器を受け取って宇宙人みたいなやつらと

なんでこの曲なんだよッ！

確かに埼玉が舞台だよ？

でもこの空気で緊張感も何もないこの選曲はあり得ないでしょ！？

「これが合図の歌だ、もうすぐその球体から武器が出るぞ」

スーツの男の言葉にハツとする。

そうだ、しちゃんショックで忘れてたけど、本当に音楽流れたよ…
っえ？何、マジなの？

本当に殺し合いですんの？

しかも宇宙人と？

てめえらの命は

無くなりました

だから新しい命を

どう使おうが私の勝手だし

って理屈なのだす

ガンツって呼ばれた球体の表面に文字が浮かび上がる。

…これフォントは馬鹿げてるけど内容やばくね？

アニメ星人

特徴

ちっちゃい

はやい

好きなもの

カ タムロボ

口癖

わっはっはっはっは

……まんまし ちゃんだった

ってさすがにねーよ！

アニメ星人ってなんだよッ！

そんな宇宙人がいるんならもうとっくに日本侵略され終わってます
けどッッ！

…あれっ？ やっぱりこれテレビかなんかの企画？

ドッキリっすか？

そろそろプラカード持って現れんの？

ってなんかガンツが開いたし

「これが武器だ。奥の名前入りのスーツケースにはスーツが入っている。もう時間がない。急いできてくれ！」

…テレビだとしても、ここはのっとくのが良いかな？

面白そうだし、もしかしたら芸能人と知り合えるかもだし

取り合えず、ケース取ってくるか

「うっわ、あの人が着てるのとおんなじスーツが出てきたよ」

想像はしてたけど、やっぱり同じものだった。

「これを着るのか？」

確認のために聞いてみる。

…これを着た姿が全国放送って… 次の日からからかわれる いじめ 不登校のコンボは想像したくないんだが。そう思っただ躊躇している

「私は着る」

宗に最初に話しかけた黒髪の女性がそう言ってスーツを持った。

「歌が流れてきたのも、武器が出てきたのも彼が言う通りになったんだもの。彼が着ているスーツもここにあるスーツも同じものなら重要なものなんじゃないかって思うもの」

…たしかにそうなんだけど、アニメ星人ってのがなあ

そう考えていると、目の前に居た不良の頭が消えてい……???

頭が消えていく!?

そうだ、何考えてたんだ俺は!

皆がレーザーみたいなのから出てきたところを見てきたじゃないか

!?

あんなの現代の技術で出来るわけがない！
ましてやテレビのドッキリなんかで出来るわけがない！
そっそういえば

「これもさつき言ってたことだ。もしかして全部本当なんじゃ」

……… ってことはマジで戦わなきゃいけないってことじゃん!?!?!
ヤバイヤバイヤバイヤバイ
着っ替替えなくっちゃ!

あれだけ言ってたんだ、絶対何かあるんだこのスーツには！
ってそのサラリーマンとOL!なんで俺の頭指差してるの…って
まさか!?

「ま、まだ着替えてないのにどうしよう」

やばいやバイやばい

「大丈夫だ、向こうで着替えればいい。転送されても家に帰ろうとするなよ。」

家に帰ろうとするなってなんでってああ、なんか景色切り替わった！
うおッ俺顔だけで浮いてるよどうなってんだよ。

っていうかここどこだよ!?!?
町中じゃねえかよ!
転送された先は道路の上だった。

宇宙人と戦うんだったら宇宙でとかじゃないの!?!?
…まあ、宇宙服も着てないのに宇宙に送り出されてたら死んでたろうし、それはいいのか。

「……とりあえず着替えよう」

身近な光景にどこか気の抜けた感じがしながらも、着替えるために建物の陰に入って行った。

人が転送されてくる。

急いで着替えを終わらせ、道路に戻ると、残りのメンバーが転送されてくるところだった。

転送が終わっているメンバーが町中に出たことを驚きつつも、家に帰ろうとして駅へ向かっている。

「あの、転送されても家に帰るなってあのスーツの人が言ってたからここで動かない方がいいんじゃないですか？」

そう思い、駅へ向かう人に言ってみる。

「なんであんなオタクみたいなコスプレ野郎の言うこと聞かなきゃいけないんだよ」

「せっかくあのへんな部屋から出られたんだからもう家に帰っていいだろ」

「頭が吹っ飛ぶとか言ってたけど、バトルロイヤルみたいに首輪が付けられているわけでもないし、大丈夫なんじゃないのか？」

皆部屋での出来事や転送に困惑してはいたが、部屋から出ることが出来、自由に動いて家に帰れるという選択肢が与えられて、さらにはそれを止めるスーツの男も、男の言っていた宇宙人というの姿が見えないことで、家に帰ってもいいんじゃないかと判断してしまっただ。

顔面蒼白のサラリーマンの言葉で思いだす言葉があった

「転送されても家に帰ろうとするなよ」

男の言葉であった。

そう、家に帰ろうとしてはいけなかったのだ。

そして、あの時耳が転送されて聞けなかった言葉の続きにはエリアの外に出たら頭が吹き飛ぶからという言葉があったらしい。

忠告を無視した結果に起った死

その事実には震えながらも哲は叫ぶ

「戻れええええええ。頭が吹き飛ぶぞおおおおおおお」

その言葉にハツとした皆は我先にと来た道に戻っていく。

恐怖を打ち消すように走った。あの気に障る音が聞こえなくなっていることに気付く余裕もなく。

戻った先でスーツの男が丸い輪っかを縦にしてその中に入ったような見たことの無いバイクらしきモノに乗って転送されてきた。

そのバイクについても気になったが、先ほどの光景のショックの方が大きく、すぐに気にならなくなった。

目の前を走っていたサラリーマンがスーツの男に問い詰める。

「どうなってるんだ、頭が、あの不良の頭が爆発したぞ」
「変な音が聞こえるの、いったい何が起こってるの!？」

男は一瞬顔に悔しさの色を出した後、すぐに引きしめて言う

「このレーダーを見てくれ。ここに囲いがあるだろう。この囲いを出してしまったものは頭が吹き飛ぶ。変な音が聞こえてくるのは警告音だ」

やはりという思いとともにレーダーを見る。

「そっそんな。じゃあこれからこんな狭いところで暮らしていけてのか」

そう言うサラリーマンに男は

「いや、戦いが終わるまでだ。戦いが終わったらエリアからも出られるし、日常に戻る」

男の言葉に少し安心する。

少なくとも戦いが終われば帰れるのだ。

そう気を緩めた時、

「わっはっはっはっは」

笑い声とともに登場した2メートル近い大きさの2頭身のしちやんそっくりのナニカがサラリーマンを押しつぶしながら登場した。

「きゃああああああああああああああああああああ」

いきなりの惨劇。

それも、今度は油断している時に目の前でだ。

サラリーマンの体から散った血しぶきを浴びて恐怖が頭を占める。

「こいつが星人だ！俺が戦う、皆逃げろ！」

男の声で再び走り出すメンバーたち。

恐い恐い恐い恐いやらなきゃ恐い恐い恐いこれが敵だ恐い恐い
恐い死ぬかも恐い恐い逃げなきゃ恐い恐い逃げちゃだめだ
恐い恐い逃げちゃ駄目だ

「何している、守って戦える程余裕はないぞ！」

男が叫ぶ

「逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ」

そう、逃げちゃだめだ。

戦争って言っていた。

闘うって言っていた。

身を守ってくれるらしいスーツは着ている。

銃みたいなモノも持っている。

エリアの中から出られないなら、

日常に戻りたいのなら、

逃げちゃだめなんだ

そう自分に言い聞かせた。

男がアニメ星人を撃った。

「こつちにこいよ、撃つたのは俺だ！俺がおめえをぶっ殺してやる」

そついい、注意を引きながら男は離れていく

「その女の人を守っててくれ！その銃は引き金を同時に引いたら弾が出る」

そつ言つて男が離れていく。

逃げない覚悟を決めた哲の返す言葉は一つだった。

「あつ、ああ」

すこしどもつてしまったが問題ない。

俺は逃げない。

逃げてたまるもんか。

その決意とともに頷き、託された女性の方へ行く。

「つた、立てますか？」

立てないでいる女性に手を差し出してきた。

声が震えるのを抑えることは出来なかったが、精一杯虚勢を張つて、怯えを隠す。

女性が手を取り、立ちあがる。

「ありがとう」

何か決意を決めたかのような顔で、礼を言ってくる。

「もう、大丈夫、大丈夫だから」

そう言い、女性は銃を拾う

「私だけが足手まといになるわけにはいかないものね」

決意を込めて銃を見つめながら言う女性に哲は思った。

こんなに怯えている女性でも覚悟を決めているんだ
男の俺が踏ん張らなくてどうする。

新たについかされた決意とともに銃を壁に向ける。

「確か両方の引き金を同時にだったよな」

引き金を引き、壁を撃つ。

ドガンッ

派手な音を立てて壁が吹き飛ばす。

余りの威力に多少腰が抜けながらも哲は

「これで俺も戦える」

火事で民家が燃えていた。

女性の叫び声から中に子供が残されているようだった。

バシヤッ

気がつけば剛は水を被っていた。
考えるより先に体が動いたのだ。

「うおおおおおおおおお」

そして、そのまま火の中に飛び込んで行った。

中は一面火だるまで煙で視界が閉ざされる。

そんな地獄の中、

「助けに来たぞおお、生きとったら返事してくれえ」

喉をからしながらも必死で探しまわる。

1階はどこを探してもいない。

意を決して2階へ上がる。

限界は近かった。

熱さは何とか我慢できる。

しかし、煙で息が出来ないのはどうしようもなく力を奪っていく。

肌が焼ける

呼吸が出来ない

そんな中、2階の廊下で見つけたのは倒れて動かなくなっている子供だった。

息をしていない。

慌てて心臓を確かめるも、すでに死んでいるとしか思えない状況だった。

剛は子供を思い涙を流すも、そこにとどまっていられる余裕はなかった。

「……はアはアせめて……親の所までは連れて行ってやるから……」

子供をかついで階段へと向かう。

「ッぐ」

階段は炎が激しくいきわたり、もう降りられない状況になっていた。この様子だと1階は人の生きていける場所ではなくなっているだろう。

そう判断した剛は窓から飛び降りるべく近くの部屋の扉を開けた。

瞬間

「おおおおおおおおおおおお

激しい炎にのまれて剛は意識を失った。

バックドラフト

彼の死因であった。

「つむ、ここは…」

剛は気がつけば見知らぬ部屋の中にいた。

先ほど入った部屋かとも思ったが、様子が変過ぎる。
多くの人がいるし、第一火も煙もどこにも無い。

「ようこそ死後の世界へ」

学生服を着た少年が話しかけてきた

…死後の世界？

その言葉を聞いた時、炎が爆発的に迫ってくる光景が浮かんでくる
存在そのものを消し飛ばすかのような圧倒的な熱量
赤い死神が体を奪い去っていく感覚
自分が消えていく感覚

それは先ほどまで実際に経験したことであった。

そう思い、自分の体を確かめる。

“火傷がない”

そう、家の中を探しまわった時に出来た火傷さえも存在しなかった。

剛は茫然としながら壁に向かって歩く。

そのまま力なく座り込むと自分の思考の世界へと潜り込む。

俺は死んだのか？

ここはどこなんだ？

何故あの子供が居ないで俺だけここにいるんだ？

これからどうなるんだ？

ここにいる人たちは皆死者なのか？

もう家族には会えないのか？

様々な思いがわき出てきて止まらない。

「俺はこの部屋のことを知っている」

こんな言葉が聞こえてきた。

こここの事を知っている？

「どういふ状況かわからないと思うだろうけど、聞いてくれ。ここに転送されてきた人間はこの後戦場へと向かう。ここであの黒い球体、ガンツからスーツと武器を受け取って宇宙人みたいなやつらと殺し合いをするんだ。」

転送？戦場？宇宙人？殺し合い？

物騒な言葉のオンパレードだ。

それが本当ならここにいる人間は兵隊つて事になる。

嘘の感じられない瞳と嘘としか思えない内容。

どちらを信じればよいのかわからず戸惑っている、さらに続けて

「信じてくれ、もうすぐ音楽が鳴る。それが開戦の合図だ。そしてその球体から敵の情報と装備が出てくる。スーツは身を守ってくれるモノなんだ。せめてスーツだけでも着てくれ」

と訴えてくる。

その内容について考えていると

「パニックパニックパニック全開なあ」

音楽が流れてくる

言っていた内容が当たる。

死と怪我の回復と転送という信じられないような出来事。

これほどまでに現実離れたことが立て続けに起っているのだ、宇宙人との殺し合いだってあり得るかもしれない。

そう考え、ガンツの表面に出たふざけているような文章に注意を向ける。

“新しい命”

確かにそこにはそう書いてあった

そして、ガンツが武器を吐き出す

「これが武器だ。奥の名前入りのスーツケースにはスーツが入っている。もう時間がない。急いできてくれ！」

側面から出てきた武器も気になったが、背面から出てきたスーツに注意を向ける。

散々着てくれと言っていたスーツ。

何かあると考えると当然だった。

そう思い、スーツを眺めていたら

「私は着る」

「歌が流れてきたのも、武器が出てきたのも彼が言う通りになったんだもの。彼が着ているスーツもここにあるスーツも同じものなら重要なものなんじゃないかって思うもの」

「それに、信じられないような話ばかりだけど、嘘を言っているようには見えない。だから私は着るわ」

黒髪の女性がそう言って部屋を出て行った。

どうやら皆スーツを着るかどうかで迷っていたらしい。

スーツを眺めるのをやめて、着替えることにする。

着替えるために奥の扉を開けて部屋に入る。

すると、そこには見たことの無い形状のバイクと刀の柄らしきものが転がっていた。

「何だこの部屋は」

思わずそう口走る。

しかしとりあえず着替えてから考えるかと着替えを再開する。

着替え終えた後、刀の柄らしきものを拾ってみる。

どう見ても柄だけであり、刀があるべき場所には柄の所に穴があるだけだ。

不思議に思い、良く調べようとすると、

ジイ

頭が消えていき、視界が突然変わる。

「何だ」

慌てて周りを見渡すとそこは町中であった。

不思議に思いつつも辺りを見渡すが、他の人はいない。いきなり一人で置いて行かれたことに強い不安を感じる。

探しに行こうとして駅の方へ向かおうとすると顔面蒼白になった集団がこちらへ走ってくる。

何があったんだと思いつつも身構えると、彼らは剛の後ろを注視し

ていた。

後ろを振り返ってみてみると先ほどのバイクにまたがったスーツの男の姿があった。

いつの間にかと思いつつも、サラリーマンの言葉で考えが吹き飛ぶ。

「どうなってるんだ、頭が、あの不良の頭が爆発したぞ」

頭が爆発！？

物騒な言葉に目を見張る

「このレーダーを見てくれ。ここに囲いがあるだろう。この囲いを出してしまったものは頭が吹き飛ぶ。変な音が聞こえてくるのは警告音だ」

その言葉に慌てて男に近寄り、レーダーを見る。

町の地図に四角い区切りがあり、そこがエリアであると知れる。

「そっそんな。じゃあこれからこんな狭いところで暮らしていけるのか」

「いや、戦いが終わるまでだ。戦いが終わったらエリアからも出られるし、日常に戻る」

戦いがおわったら

その言葉に戦場という言葉を出す。

そつだ、戦場つてことは…

慌てて身構えた時に、視界の隅に大きな何かが見え
た。

グチャ

サラリーマンが踏みつぶされた

いきなり現れた光景に言葉を無くす

「きゃあああああああああああああああああああああ」

OLの叫びではつとする。

そつだ、ここは戦場だ

呆けてなんていらられる場合じゃない

「こいつが星人だ！俺が戦つ、皆逃げろ！」

男がそつ言つて銃を身構えた

「何している、守つて戦える程余裕はないぞ！」

叫ぶ男に

「……こいつを倒せばいいんだろつ？」

そつ言つて先ほど拾つた柄を握り締める。

それをみた男が銃を撃ち

「こつちにこいよ、撃つたのは俺だ！俺がおめえをぶっ殺してやる」
そついい、注意を引きながら離れていく

「その女の人を守っててくれ！その銃は引き金を同時に引いたら弾が出る」

男はそう言い残し、アニメ星人を連れて走り去って行った。

…この柄の使い方教えてほしかった

そう思いながら柄を調べていく。

男はバイクに乗っていた。

ならばあの部屋に置いてあったこれもなにかの武器であると信じながら。

閑話・それぞれの思惑（後書き）

つっつかれたあああ

予約投稿してたから日にちに余裕あったしイけるやろと思ってたら
書くのに4日くらいかかって連続投稿が崩れてしまった（泣

というわけで、はじめての別視点です。

正直この戦いが終わってからも良かったんじゃないかって思った
けど、まあ紹介かねてやっちゃいました。

次は戦闘シーンです

上手く書けるように頑張ります。

出してほしい星人があれば感想で言って下さい。

面白いと感じられたら評価や感想を頂けると嬉しいです。

第10話：戦い

「こつちだ、来いッ」

アニメ星人を連れて街を駆け抜ける。

すると、前方に先ほど逃げて行った集団を見つける。

これ以上先に行けば被害が増えると、アニメ星人の方に向きなおる。

「ケツだけ星人」

アニメ星人が叫び、宗の方に指を向けて超音波のようなものをはする。

すると、

「ブリブリブリブリ」

ブリブリという叫び声とともにケツに足が生えたような奇妙な形の星人が民家のガラスを割って現れる。

…10体以上は居た。

穴の部分が口になっていているらしく、醜悪につごめいている。

「別の星人なのかよ、くっそ」

「ブリブリ」

ケツだけ星人に向けて銃を撃つ。

動きが速く避けられてしまったが、固まっているので後ろに居たやつに当たった。

そして、ケツだけ星人は一斉にこちらに襲いかかってきた。

「ブリブリ」

とっさに刀に切り替え、切りかかる。

勢いよく着ていたケツだけ星人を1体切り倒す。
しかし、ケツだけ星人の狙いは俺ではなく…

「うわああああああ」

「いやああああ何これ」

「こんなのに殺されるなんて嫌だああああ」

一斉に跳びかかってメンバーたちを襲う。

飛ぶ勢いと数によるケツでの面制圧を行った後、地面に倒れるメンバーを口の中に放り込んでいく。

「くそつくつそお」

ケツだけ星人に銃を向けてロックオンする。

襲われたメンバーに生存者はいないだろう。

ならば、“食事”に気を取られて動きの止まっている今がチャンスであった。

動きの速いケツだけ星人に対して普通に撃っていたのならばじり貧だ。

ロックオンで全員一遍に攻撃するしかない。

「6、7、8…」

「うっほほおおおおおおい」

後1体という所までロックオンした時、後ろから突進を受けた。

ケツだけ星人の方へ飛ばされる体。

後2匹の所ではあったが、食事を終えて活動を再開し始めたケツだけ星人達に正面からぶつかるわけにはいかなかった。

「死ねえええええええ」

吹っ飛ばされながらも、空中で引き金を引く。

ズチャ

嫌な音を立てて吹き飛ぶケツだけ星人たち。

しかし、着地点に生き残りのケツだけ星人2体が待ち受ける。

口を大きく開けて待つ星人に宗は刀に持ち替えて、大きく切りかかった。

「うおおおおお」

切り裂かれる星人。

宗は着地がうまくいかず、そのまま転がっていく。

十字道の所まで飛ばされて、ようやく止まる。体制を立て直して向かいくるケツだけ星人のに向かって刀を構えた。

「バルサミコ酢」

声が聞こえて、とっさに声と反対側の方へ飛ぶ。

バシヤッ

かけられた液体に触れた地面が解ける。
強力な酸のようなモノをかけられたらしい。
空中で背筋を寒くさせていると、

「どっどっドリル、どどどドリル」

反対側からピンクの髪をドリルのように高速回転させて落下地点に
待ち構えている星人が現れる。

避けられない！

前方からは飛びかかってくるケツだけ星人
右からは王酸のような強力な液体

絶対的な死の予感に思わず目を閉じる。

ドスッ

グシヤ

何かがつぶれる音を聞き、それが自分の体でないことを認識して目
を開ける。

「…なぜこれほど飛ぶんだ？」

「うそっ当たった？」

そこにいたのはケツだけ星人を吹き飛ばした鋭い目つきの男とピン

クドリルの頭を撃ち、当たったことに驚いている黒髪の女性だった。

「どうしてここに」

「バルサミコ酢」

「危ないッ」

ここに来たことに驚いて動きの止まってしまった宗に向けてまた液体をかける星人。

それを学生が宗に飛びつくことで、避けることが出来た。

「君まで、なんで」

「今はそれどころじゃないだろ」

そっだ、戦闘中だった。

一度動きを止めて危険になったところを助けてもらったばかりでまた動きを止めるわけにはいかない。

寄ってくるバルサミコ星人に向きあい、構える。

「そこにいるケツだけ星人を頼む」

そう言っつて銃を構える宗。

「おもち、うによくん」

バルサミコ酢の入ったビンとは反対側の手に握られたモチがこちらを捕えようと広がりながら襲いかかってくる。

「さがれッ!」

学生を連れてモチから逃げる。

あれに捕われたらバルサミコ酢で溶かされて終わりだろう。
モチを触れただけで相手を捕えるモノと推測して、距離を取る。

「うによくん」

変幻自在に動くモチに対処が追いつかない。

「んんんんんんんんんんんんんん」

学生がモチに捕まって中に引きずり込まれる。

そして、それを見た星人がモチを大きく上に振り上げる。

空を飛ぶ学生とモチ。

それを見上げて落ちてきたところをバルサミコ酢で溶かそうと大きく構える星人。

「死ねええ」

隙だらけだった。

学生を捕まえたことで隙だらけになった星人に対して銃を撃ちまくる。

「うおおおおおおおお」

バルサミコ星人を吹き飛ばす。

バルサミコ星人が吹き飛ぶと、モチは勢いを無くし、地面に落ちていく。

「つぶはあ。はあはあはあ」

粘着力を無くしていくモチから学生が抜けだしてくる。
どうやら無事みたいだ。

学生の無事を確認して、次にケツだけ星人の方を向く。

グシャ

ちょうど倒されたらしいケツだけ星人とそれを成した2人の姿を見
つける。

「助けてくれてありがとう。でも、どうしてここに？」

復活した学生と2人に聞く。

「どっどうせ逃げられないなら俺も手伝おうと思って」

「……一人で戦わせるのはどうかと思ったのでな」

「さっさっき迷惑かけちゃったけど、キミの役に立ちたいと思って」

そう言う3人の言葉に感謝しつつ、し　ちゃんはとうとう突破したのか
を聞く。

「っえ？さっきの星人のこと？居なかったけど？」

そう学生が言った時、遠くから声が聞こえる

「はっはっはっは。アクション仮面、カスタムロボおおお」

マンションの屋上に居たし　ちゃんがそう叫ぶと同時に、そのマン

シヨンと隣のビルが割れ、中から巨大な仮面を被った人とロボが出てきた。

「マジかよッ」

そこには巨大な2人の敵に絶望感にとらわれる4人の姿があった。

第10話：戦い（後書き）

戦闘シーン難しい（泣

1回で終わりませんでした。

続きはなるべく早く書きあげたいと思います。

お読みいただきありがとうございます。楽しく感じられたなら、感想や評価していただけるとありがたいです。

第11話：スケールが違う敵

人間は何故この地球で天下を取れているのか？
それにはいくつも要因があるだろう。

道具を使えるから

集団で動くから

火を扱えるから

様々な要因があれど、中でも大きな要因は“大きいから”であろう。
大きさというのは強さと言い換えることもできる。

もし、全ての生物が同じ大きさをしていたのならば天下を取っていたのは人間であったであろうか？

大きさが同じなら最強の生物はクモだろうし、最強の軍隊はアリが
持っていただろう。

そして他の生物に圧迫され、人間は碌に文化を築くことが出来な
っただろう。

それほどまでに大きさというのは力を持つ。

巨大ロボと巨人。

今までの敵とは文字通りスケールの違う見ただけで力を理解出来る
敵の登場であった。

「うっほほおおい」

し ちゃんの雄たけびと共にカスタムロボが動く。
それを見てハツとした宗は叫ぶ

「散れッ！固まっただけになるぞ！」

その言葉に全員が動き出す。

「とにかく撃ちまくれ！まずはあのロボを倒して肩に居るし ちゃんを倒すんだ。これ以上敵を増やされたら負けるぞ」

宗は指示を出してロボを撃つ。

思考が停止してしまうような場合になった時にはやるべきことの指示を出して動かすことが大切である。それに、あえてし ちゃんを倒さなければ負けると言うことで暗にし ちゃんを倒しさえすれば勝てると思うニュアンスを含ませる。

先手必勝

ロボに近寄られる前に撃ちまくる。

「クソッ火力が足りなさすぎる」

「装甲が堅くて利かないわ」

どれほど撃とうとも当たった部分が少しへこむ程度のダメージしか与えられない。

「頭だ、額に集中して撃て！」

攻撃が利かないのならば利くようにすればいい。
基本的な弱点は頭だ。

頭の中でも額に集中して撃てば、崩すことが出来るかもしれない。

「危ないッ」

「アクションビーム」

巨人の方からビームが飛んでくる。

直前に声をかけられたおかげで何とか避ける。

ドッゴオオオオン

ビームの飛んで行った方向から大きな破壊音が鳴り響く。
思わず振り返って絶句した

「ッな」

穴だ。

クレーターが落ちてきたような底の見えない程大きな穴があいている。

その場所にあっただであろう建物は全部崩壊したようであった。

「いくらなんでも威力高すぎだろっ」

しかし呆けている暇はない

ピー ガーイー

今度はロボが拳を振り上げてくる。

大きさはあっても鈍い。
拳が振り下ろされる前に逃げる。
しかし

「かつ風!？」

拳が振り下ろされる時に発生した風圧が宗に襲いかかってくる。
その拳の風圧だけで体が吹き飛ばされたのだ。
そしてその拳の当たった場所には先ほどのビームよりは劣るものの、
似たような光景が繰り返り広げられている。

「アクション…!」

巨人のクロスされた腕に光が集まっていく。
ビームのエネルギーをため始めているのだ。

「くっそ皆あのロボを盾になるように移動しろッ!あのビームをロボにくらわせてやる!」

即座に移動する面々。

「ビーーーーム」

移動しきる前に発射される。
それを避けるために走る面々。
それを追うビーム。

あと少しで後方に居た学生に当たるといふ時、ロボの体と重なる。

ガ
ピ

足からビームをくらい、転倒したところをさらに腹にもくらい弱るロボ。

ドゴオオオオン

ロボが倒れるときに巻き込んだビルの破片が大量に降ってくる。

「ぎゃああああ」

「っく」

学生と鋭い目つきの男の2人が崩壊するビルに巻き込まれて下敷きになる。

「そいつらを任せた！」

難を逃れた黒髪の女性に二人の処置を任せてし ちゃんの所へ走る。

「ぶりぶりざえもん」

どこからともなく二足歩行のブタが現れし ちゃんの盾になるかのようにつく。

「そんなの関係ねええええええええええええ」

刀を伸ばしてブタごとし ちゃんを切る。

そしてそのままロボの頭の上に行き、額に向けて撃ちまくる。

零距离一点集中連続射撃だ。

さすがに堅い装甲も5発目で破れ、中に撃ちこんだ10数発の弾がロボの頭を飛ばす。

頭を飛ばした後、急いで巨人の方を向く。
両手を広げて深く呼吸をしている。

先ほどのビームで消費したエネルギーを回復しているらしい。
宗は迷わず巨人の方へと駆ける。

駆けながら顔に向かって銃を撃つ。

自分に注意を向けて崩壊に巻き込まれて動けなくなっている2人やそれを救出している女性に注意を向けさせないためだ。

巨人は生半可な場所を撃つても攻撃が利かない。

大きさに対して被ばく範囲が狭すぎるのだ。

先ほどのビームを利用した時のように大きな威力の攻撃が出来ない以上足を狙って体制を崩すことは出来ない。

ならば狙うは顔だけだった。

先ほどのように額を狙ってみるが、仮面にはじかれて利かない。
ならば狙うは

「アクション…」

エネルギーを貯め終わったのか、手を胸の前に移動させる。

宗は壁や屋根を利用しながら近づいて行き、巨人の近くのビルの屋上に出る。

「ビーーーーー」

ビームと言ったために口を開いた瞬間を見計らって口の中に飛びこむ。

「いくらでかくて堅いお前でも中はどうなんだろうな」

口の中に入った宗は舌の上から脳めがけて撃ちまくる。

ドゥシーーン

「勝った、勝ったぞおおおおお」

転送されていく体を感じながら、強敵への勝利に酔いしれていた。

第11話：スケールが違う敵（後書き）

難産だった（・・・）

無傷で勝ったら強さ伝わりにくいし、かといってこんなやつ
の攻撃くらったら即死だなのが凄く書きにくかった。
バカとのろまにすることで何とか乗り切ったぜ！

もっと後で出て来てもいい強敵でした。

面白いと思ったら評価・感想お願いします。

第12話：始まりの時（前書き）

カタストロフィについて少し触れます。
注意してください。

第12話：始まりの時

ジイ

「あつ来た」

転送されてきた宗を見つけた女性が宗を指差す。

「無事だったか」

すでに転送されていた男2人を見て宗が言う。

「一体どうなっているんだ？さっきビルに潰された時に無くなっていた腕が何もなかったかのように生えてるんだ！」

「さっき戦いが終わったら全て説明するって言ったわよね、教えてくれない？私たちに何が起ったのかを」

「ああ、説明する。ただ、採点が終わってからだ」

そう言っつて宗はガンツを方に目をやる。

他の皆もガンツの方を向いたとき、ガンツに文字が浮かび上がる。

そるではさいてんをはじめ

あやちん 3てん

「採点？それにこの点数って…」

「これは星人を倒した時に入る点数。これについても後で説明するよ」

ヲタク 0テン ちみはオリ主ではない

「なッ！」

慌てる学生の方を掴んだ宗は

「大丈夫だ、俺は偏見を持ってない」

「ちっ違っ！オタクじゃないし、変なことも考えてない！！」

さんぱくがん 1てん

「……目の事はあまり触れないで欲しいのだがな」

「(一同)……」

しゅうくん 86テン ゴウけい145テン

「……ついに届いたか、ちょうどいい、さっき説明するっていったこの点についてだが、これは100点を取ると」

そう言い、ガンツの方を向く

100てんメニュー

ガンツに書かれたその文字を押す。

- 1・ 記憶を消してバイバイ
- 2・ 新しい武器をゲットだぜ
- 3・ メモリーから1人再生

「これのどれかを選ぶことが出来るんだ。ガンツ、2番の武器を今すぐで頼む」

そう言うとガンツから大きな銃が転送されてくる。

コの字型の形状をしていて、トリガーの上下が突き出している。上の部分の先端に銃口があり、とても重量がある。

宗はそれを確認してから皆の方に振り向く。

「さあ、全てが終わった。俺の知っている事を全て教えよう」

そう言うと、皆の顔が引き締まった。

「っとそういえばまだ名前も言ってなかったな。俺は天道宗。宗と呼んでくれ」

そう言うと、皆も名前を言い始める

「そう言えば私も名前を言ってなかったわね、私は崎本彩よ。私も彩でいいわ」

「俺は榎樹哲だ。俺も哲でいい」

「…榎原剛だ。剛と呼んでくれ」

簡単な自己紹介を終え、話を続ける。

「そうか、これからよろしく頼む。では本題に入る。皆だいたい察しがついていると思うが、ここは死んだ人間が集められる場所だ」

その言葉に皆表情を暗くする。おそらくはとってはいても、はっ

きりと告げられるとキツイものがあるのである。

「最初のガンツの文にもあったように死んだ人間をガンツが再生させて、その新しい命を使って地球に潜んでいる異星人との戦争をさせているんだ。逃げられないように頭に爆弾を埋め込んでまでな」

「爆弾……」

「そう、爆弾だ。エリアを出たら頭が吹き飛ぶと言っただろう？あれはこの爆弾が爆発するからなんだ。この爆弾は戦闘中にエリアから出るか、ガンツの事を何も知らない一般人にばらせば爆発するようになっていて。戦闘の強制とガンツの隠匿を兼ねているってわけだ。ただ、相手が信じなければ問題ないみたいでネットに書いたりガンツスーツのまま外に出たりしても大丈夫なやつもいたんで判定基準がよく分からないんだがな。」

「話したらだめってことはこんな事を抱えながら誰にも相談できずに生きていかなければならないの？」

「ああそうだ。もっとも話したところで信じてもらえないだろうけどな。続けるぞ。このスーツは着ると超人的な力と耐久力を手に入られる。パワードスーツに鎧を足したようなスーツだ。でも、このスーツの耐久力には限界があるから耐えきれない強い攻撃や、耐えきれなくなるほど連続でくらった時、このスーツは壊れてしまう。このスーツには所々に丸い輪があつて中にガラスみたいな膜があるだろう？このスーツが壊れた時、この膜も壊れて中から液体が出てくる。これが壊れた証だ。こうなるとこのスーツは機能を失つてただのスーツになるから壊さないように気をつけなくちゃならない。また、この膜は弱点でもあるからここを強く押さないように気を付ける」

そう言うと興味深そうに膜を触っていた哲が慌てて指を離す。

「この銃口がXの形になっている銃とこのショットガンは壊す用の

武器で、この銃先がY字になっている銃は捕獲用の武器だ。引き金が二つあるが、上の引き金は敵をロックオンする引き金で、下の引き金はレントゲンのように敵を探ることが出来る。ロックオンしている時に下の引き金を引くと弾が発射される。ロックオンしていても同時に引き金を引くことで弾を撃つことが出来る。ショットガンは1km以上先まで狙撃が出来るし、捕獲用の銃は捕獲した後もう一度引き金を引くと敵を送る事が出来る」

「送るってどこに？」

「それはわからない。ただ、転送される時のように頭からどこかへ消えていく。それがどこに行くのかはわからないが、送った星人がもう一度現れたことはないし点数もちやんと入る。次にいくぞ。星人に関して何だが、これは地球に潜んでいた異星人だ。戦いのたびに敵が変わるからどんな星人が出るのかはわからない。ただ、頭に付けられた爆弾が異星人に俺たちを敵と認識させるらしくてな、異星人はこちらを見かけたら殺しに来る。だから死にたくなければ殺される前に殺すしかないわけだ」

「そんなつ 酷い」

「ああ、俺も酷いと思う。でも、逃れられないんだ。この戦いを終えるまでは。異星人には強さに応じて点数が付けられている。ガンツは戦いが終わったら殺した相手に応じて採点をして、点数を与えらる。そして100点を取ればさつき見たようにこの戦いから解放されるか、強力な武器を手に入れるか、死んだメンバーを生き返らせるかの3つの選択肢を与えられるんだ。解放されたければ点数を集めるしかない」

「…少しいいか。なぜさつき1番の解放されることを選ばなかったんだ？俺たちのために残ってくれたのか？」

「そつそうだよ、せつかく解放されるチャンスだったのに」

「もしかして、私たちのために残ってくれたの？」

宗は考える。

言つべきか言わざるべきか。
熟慮の末

「…いや、それもあるが別に理由があるんだ」

そう言い、宗はガンツの方に行き

「ガンツ、カタストロフィ」

宗がそう言つとガンツの表面に文字と数字が浮かび上がる。

C a t a s t r o p h e 6 1 3 4 4 0 1 4 … 6 1 3 4 4 0 1 3 …
6 1 3 4 4 0 1 2

数字はカウントダウンするかのようにとんとんと減っていつている。

「6134万4012秒。これが人類に残された時間だからだ」

「人類ツ!？」

「残された時間ってどういう意味なの？」

「…約2年か」

それぞれ驚愕の表情を浮かべる。

「このカタストロフィというのが何かというのはわからない。しかし、こうしてカウントダウンまでされているんだ。よほど大きな出来ごとに違いない。なにせ世界中のガンツがこのカウントダウンをしているんだ、世界規模の大災害が起るんだらう」

「待って、世界中のガンツって」

「ガンツはこれだけじゃない。世界中でガンツによって同じことが

行われている。日本だけでも県ごとに違うガンツがあるくらいには多くのガンツが存在するんだよ」

「こんな事が世界中でって…」

「信じられないだろうけど、事実だ。実際、俺も埼玉に引越してくる前は東京のガンツで戦っていたからな。まあそれは置いて、このカタストロフィなんだが、俺は世界規模の異星人による大侵略だと考えている」

「大侵略？」

「ああ。ガンツは異星人との戦闘を強制させている。これは何故だ？地球に来た異星人を排除するためじゃないのか？戦闘経験を積ませて侵略に対抗できる戦士を作るためじゃないのか？世界中でカタストロフィのカウントダウンが刻まれているということは、全ての世界を同時に破壊するような出来事がおこると考えられる。そんな核戦争か異星人の侵略ぐらいしか考えられない。そのどちらかならガンツの行っていることからして異星人の侵略の可能性の方が高いだろう。そして、異星人の侵略ならば規模からいって地球人より発展した文明との戦いになるだろう。そんな相手に何の力もないままならばただ殺されるだけだ。力を付ければ対抗できるかもしれない。カタストロフィを生き残れるかもしれないし、多くの人間を守りたい人間を守ることが出来るかもしれない。それなら、俺は力を付ける。星人を倒して倒して、点数を稼ぎ、武器を手に入れる。これが俺の考えだ」

この話を聞いて皆が深刻な顔で考えこんでいる

おそらく自分の大切な人のことを、戦いの事を思っているのだろう。

「私も一緒に戦うわ」

彩が言う。

「戦うのは怖いけど、その時になって何も知らないまま殺されるのはもっと怖いもの」

「俺も戦う」

哲が言う。

「1度死んだ時に感じた俺って存在が消えていく感覚が忘れられないんだ。死ぬのは怖い。もう2度と味わいたくないし、死ぬかもしれない戦場に身を置いて殺し合いをするなんて恐くて仕方ないけど、その時が来た時あの死から大切な人を守る力が手に入るってんなら俺は戦う!」

「…俺も戦おう」

剛が言う。

「…そのカタストロフィが起きることも異星人の侵略ということも確かではないにしろ、その時になって備えていなかったことを後悔したくはないからな」

3人の言葉に胸を熱くする宗。

この世界に来てからずっと一人だった宗にとって初めての仲間を得た気がしたからだ。

「ありがとう、俺の話信じてくれて。一緒に戦うと言ってくれて」

万感の思いを込めて礼を言う。

「もう戦いは終わっているからこの部屋から出て日常に戻ることが」

出来るけど、時間がくればまたこの場所に転送される。一緒に戦うのなら、一人だって死なせたくない。だから皆で集まって生き残るための訓練をしよう。そして力を付けて最後まで生き残ろう！」

「ええ！」

「おうッ！」

「ああッ！」

埼玉ガンツチーム結成の瞬間だった。

第12話：始まりの時（後書き）

私生活が忙しくなってきた（・・・；）
なるべく早めの更新を心がけますが、2〜3日に1度になるかも…
点数についてですが、

ケツだけ星人1点

ピンクドリル星人（らき たのあ ら）3点

バルサミコ星人（ら すたのつ さ）5点

しんちゃん10点

ぶりぶりざえもん1点

カスタムロボ30点

アクション仮面30点

です。

時間の方は西君が原作約1年前なので、ガンツマイナスが9月初めの時期だから9月半ばに西君が現れて、原作約1年後にカタストロフィだとして

$365 \times 2 - 20 = 710$ 日。

$710 \text{日} \times 24 \text{時間} \times 60 \text{分} \times 60 \text{秒} = 61344000 \text{秒}$

って計算を基にしています。

さて、今後の展開どうしよう（・・・；）

もともと別の県で鍛えて強くなった主人公がそして1年後って形で

本編組に合流して、導いていくって予定だったんやけど埼玉組を作ってもうたし、主人公の役割分捕ってレイカをヒロインにしてって考えてたのもヒロイン（彩）創ってもうたし、かといってこのままずっと星人とのバトルしていったら本編までが長すぎるし…

考えもなしに挑戦するのは危険って良く分かりました。

…さすが習作、勉強になる。

まあぼちぼち考えながら書いていきますわ。

お読みいただき、ありがとうございました。
面白いと思ったら感想と評価お願いします。

第13話：崎本彩

第13話

「どづいことなの!？」

教えたばかりの宗の家に真っ青な顔をした彩が飛びこんでくる。

「何があつたんだ？俺に解決できる問題なら手伝えるが、まず落ちて着いて何があつたか離してくれ」

「落ちつけるわけないじゃない!」

取り乱す彩を冷静に見つめる宗

「ッご、ごめんなさい。混乱して取り乱してた。あなたに当たっても筋違いなのに」「

「いいよ、とりあえず聞かせてくれ、何があつたのかを」

「……………実は」

彩は想いを馳せる、解散してから今までにあつたことに。

「もう戦いは終わっているからこの部屋から出て日常に戻ることが出来るけど、時間がくればまたこの場所に転送される。一緒に戦うのなら、一人だって死なせたくない。だから皆で集まって生き残るための訓練をしよう。そして力を付けて最後まで生き残ろう！」

「ええ！」

「おうッ！」

「ああッ！」

宗がそう言って、戦いの決意を皆が固めた後

「それじゃあ、とりあえず皆の連絡先を交換して今日はもう帰ろう。もう扉に触れるし、いつでも帰ることが出来る。訓練で使うから、武器を誰にも見られないようにしてから持って帰ってくれ」

宗がそう言つと皆服を羽織って鞆に武器を入れてと帰る準備を始める。

そして準備が整つと、宗を戦闘に歩き始める。

そして宗が扉を開く

「本当に開いた。ああ、扉が開くのがこんなにうれしいもんだっただなんて」

「やっと帰れるのね」

「…早く帰って親を安心させねばな」

皆晴れ晴れとした表情で駅へと向かう。

一人ひとり別れて行って宗と彩の二人だけになった。

「次の駅で俺は降りるよ」

「そう。家は駅から遠いの？」

「どうだろう。俺は近いと思ってるけど、歩いて20分くらいかな。駅からひたすらまっすぐ行った所にある青い壁したアパートの2階」

「…微妙な距離ね。バスを使わないの？」

「歩くの嫌いじゃないしね」

「ふーん。それにしてもアパートで青い壁って珍しいわね」

「だろ。行く道も簡単だし、目立つ色だしで迷わなくて助かってるんだ。ともう着くみたいだ」

「そうね。練習は明日の夜からだったかしら」

「ああ。おっと、そう言えば集場所決めてなかったな」

「そうだったわね」

「じゃあちよつど分かりやすいし俺の家でいいか。皆へは俺から連絡しとくよ。それじゃあまた明日」

「ええ、また明日」

宗と別れて電車で一人帰途に就く。

家に着いたら家族が待っているのだ。

遅くなったから怒られるかもしれないけど、それでも命のきき危機にさらされた後だ、もう会えないかもしれないと思っていた家族にまた会えると思うと心が弾む。

しかし

「ただいま」

玄関の扉を開けた彩に返事を返す声はなかった。

「あれ、皆居ないの？」

リビング・ダイニング・寝室・洗面所・ベランダ

どこを探しても誰もいない。

胸騒ぎがしたが、どこかに出かけているだけだろうと自分に言い聞かせて寝ることにする。

不安を感じていたが、疲れてもいたのですぐに眠ることが出来た。

翌朝早くに目覚めた彩は家族が帰っているのを期待して部屋を見て回ったが、誰も居ない。

寂しさを紛らわせるためにテレビを付けてローカルチャンネルに変えた時に、それを見た。

「……………昨日の夜8時、映画の撮影を終え帰路に着いていた女優のアヤカ（崎本彩の芸名）さんがストーカーに背中を刺されて意識不明の重体に陥りました。アヤカさんはいまだ意識不明の状態ですが、ギリギリのところで一命を取り留め、命に別状はないようです。犯人は捕まっております、取り調べによると……………」

今、このキャスターは何と言った？

一命を取り留めた？

死んだんじゃない？

私が死んでない？

「今、映像が入りました。彩さんは意識を取り戻したようです。家族に囲まれて……………」

そこにあっただのは紛れもなく慣れ親しんだ自分の顔とそれを囲む家族の顔だった。

「わっ私がもう一人いる？」

わけがわからなかった。

混乱して思考が無茶苦茶になりながら、気がつけばマスクと防止を身につけ双眼鏡を手にしていた。

そして報道されていた病院の窓が見える場所で双眼鏡を使い自分を探している自分に気がつく。

何をやっているんだろう。

そう思いつつも、止められない。

そして

「あっはははは。私だ私がいる。ここに私が居るのにあそこにも私が居る。はっはは、なんでよ。なんで私があそこにいるのよ！」

自分の姿を見てしまった彩は混乱から錯乱へと変わる

「そっそっだ、宗さん。彼なら、彼に聞けば……」

ふらふらとした足取りで宗の家へと向かう。

そして物語は冒頭に戻る。

.....
.....

「そうか、彩さんもだったのか」

「もっ？」

宗の“も”という言葉に反応する彩。

「いや、俺と同じ事になったんだと思って。何が起こったのかを教えるよ。ガンツは死者を集めるって言っただろ？あれは、生き返らせられて転送されてきたんじゃないんだ。」

「どツどういう意味？」

「ガンツは、死んだと判断した人間のコピーを作って自分の所に呼び寄せてるんだ」

「コピーって」

「ああ、つまりあれは死んだと思われてコピーされた俺たちの、死んでなかったオリジナルだよ」

彩に衝撃が走る

自分がただのコピーであるという真実。

知りたくなかった事であり、理解させられた事でもある。言葉の衝撃を受けて塞ぎ込む彩。

しかし、暫くしてあることに気がつく

「ねえ、ガンツの事を知られたら私の頭が吹き飛ぶのよね？じ、じやあ私はもう家族に会えないって、日常に戻れないってこと！？」

「……ああ、そういうことになる」

「そっそんな。じ、じゃあ私はどうすれば良いのよ。今までの全てを無くして生きていかなくっちゃいけないってこと！？そんなのって………待って、さっき同じことになったって言った？」

「ああ、俺のオリジナルは東京にいる。俺は行き場所を無くしてここに越して来たんだ」

「っそんな！」

「だからその苦しみもよく理解できる。……辛かったな」

「うっああ、ああああああああああ」

辛かったな。

その言葉に感情が溢れだしてくる。

自分の全てが亡くなってしまったのだ、辛くないはずがなかった。感情のままに泣きだす彩を宗が抱きしめる。

彩は声がかかるまで宗の胸で泣き続けた。

「……ありがとう、慰めてくれて」

宗から離れて恥ずかしそうに言う彩に宗はやさしく返す。

「気にしなくていいよ。それよりもう大丈夫か？」

「ええ、泣くだけ泣いたらすすきりしちゃったみたい。…恥ずかしいところを見せたわね」

「恥ずかしくなんかない。俺も大泣きしたしな」

「あなたに泣き顔を見られたことが恥ずかしいの」

彩は顔を赤く染め、恥ずかしさのあまり後ろを向いてしまう。

そうして暫く無言が続く。

そして、ためらいがちながら彩が言う。

「お願いがあるんだけどいいかな」

「ああ、言ってみてよ」

宗の方を振り返って

「私をここに住ませてくれない？」

同棲生活の始まりであった。

第13話：崎本彩（後書き）

書いててなんか恥ずかしくなった。

今回はちょっと恋愛要素混ぜてフラグを立ててみました。

同棲…響きがうらやまし過ぎる…!!..!

宗は抱きしめた時にいやらしい感情はないですが、恥ずかしがる彩を可愛いとは思っています。

読んでくださってありがとうございます。

面白いと思ったら評価・感想をお願いします。

第14話：訓練

「…おじゃまします」

「こんにちは。あつ彩さん先に来てたんですね」

剛と哲の2人が部屋に入ってくる。

あの騒ぎの後、今後どうするかを2人で話し合った。冷静になってみれば年頃の2人が同棲。

しかもモデルをやっていただけあって顔もスタイルも良い彩とである。

浮かれてしまう気分を顔に出さないよう苦勞しながら同棲生活に必要なものを書き出していった。

そうしているうちに二人が来る時間になった。

2人にはまだ同棲することは言わないことに決めていた。

「これでそろつたな、じゃあ訓練を始めようか」

「よろしく願います」

「よっしゃあ頑張りますよ」

「…よろしく頼む」

全員の顔が少し引き締まる。

「じゃあまず今後の方針について言おう。まずスーツと武器の使い方慣れてもらう。スーツは身につける時間が多いほどその扱っ感覚がつかみやすくなるから、出来るだけ普段から服の下に着ていてもらいたい。もちろん、誰にもばれないようにするのが絶対条件だから体育のある日とかは気をつけてね」

学生を見ながら言う。

「ちえ、これさえあれば体育でヒーローになれるのに」

「いやいや、半袖の下にこんなの着てたら絶対色々言われるし、力が強すぎて怪しまれまくるから」

「……冗談ですって」

「……まあいいや。んで、スーツは普段から着て慣れるとして、次に武器だ。武器の練習は人目に着く所じゃ出来ないから山奥とか廃ビルとかでやることになる。そして、武器の使い方に慣れたら次は実践なんだけど、射撃訓練の他にも実践的な撃ちあいの訓練が必要になるが、これを使って撃ちあったら殺し合いになるから……」

そう言うって部屋の奥から箱を取りだしてくる。

「これを使う」

「エアガン？」

「そう、エアガンだ。これなら当たっても死なないし楽しくできるだろう？」

「サバゲーみたいだな。うおっ楽しそう」

「まあそうはいつでもこれは訓練なんだから遊び気分で作られても困るし、これでやられた時の罰を決めることで本気でやってもらおうと思ってる」

「ばッ罰って？」

宗は実に良い笑顔で

「俺特製の劇マズ栄養ドリンク“シュウ汁”の一気に飲みだ」

そう言うってペットボトルを取りだす。

青汁・生卵・トウガラシ・タバスコ・梅干・イワシ・ホウレンソウ・アセロラジュース・すっぱんの生き血・ママシ酒・赤ワイン・ハバナロ・ホウレンソウ・サプリメント錠剤

これらをミキサーで少しづつ混ぜ合わせて作った劇物だ。赤黒く渦巻くそれを見て顔を青くする3人。

「21ペットボトル5本分作ってあって、試しに一口なめて30分ほどのたうち回った代物だ。一気飲みと言っても小さなコップ1杯分だが十分死ねるぞ。本気でやれよ」

皆が全力で首を縦に振る。

「次に、刀の事なんだが」

「刀？」

「ああ、哲は知らないのか。前回説明し忘れてたんだが、ガンツが武器を出した後に開くようになるドアがあつてな。その中にバイクと刀があるんだよ。その刀はガンツ製だから切れ味も耐久力も半端じゃないし、刀身がある程度伸び縮みさせられるから接近戦では強力な武器になるんだよ。んで、これは木刀を使って切り合う訓練をすることで刀の扱い方を学ぼうと思ってるんだが、ちょうど良い事に剛の実家が剣道の道場らしくてな。そこで刀の扱い方の基本的なことを学ぶのと、廃ビルや山奥で実際のガンツソードを使って伸び縮みの特性を活かした戦いが出来るようにし、木刀で型を意識しないなんでもありの実践をすることの3つの訓練をすることで実践で使える戦い方を身につけてもらう。これらが武器の訓練の大方の説明だ。訓練はだんだんレベルを上げていくつもりだが、最初はこんなもんだな。何か質問はあるか？」

宗が皆を見ると剛が手を挙げる。

「…質問があるんだが、前回取っていた強力な武器とやらの訓練は

良いのか？」

「ああ、あれか。あれは今のところ俺しかもっていないいな。他の奴が取るまでは皆で訓練する時には意識しないでいいよ。一人で訓練する時にあれを重点的に訓練するつもりだし。」

「…わかった。すまないな」

「別にいいよ、お前らが強くなれば俺も生き残れる可能性が上がるんだしな。他に質問がないなら次行くぞ？次は武器以外の事なんだが、これは戦争だ。戦争なんだから正面から戦う以外の選択肢も重要になってくる。狙撃・待ち伏せ・トラップ・奇襲……そういうた戦い方や戦法も学ぶべきだと思う。だから、戦術や罠等の情報を本やネットで調べたり、ガンツ武器ならではの攻撃方法を考えたりといった情報収集も訓練の一環としてやろうと考えている」

「そっか、ゲームじゃないんだし何も直接戦うだけが戦いじゃないもんね」

「そうだ。だから卑怯に思えるような作戦でもどんどん取り入れていく。生き残るためには何でもやらなといけないしな」

「…卑怯な作戦でもか」

「不満か？」

「…いや、それがベストだろう。宗は俺たちの中で一番この戦いの事を理解しているし、これは実際に自分の命がかかっている戦争だ。戦い方にこだわって無駄に危険を招くことはないだろう。」

「わかってくれたのならありがたい。それじゃあここまでで質問はあるか？」

宗は皆の顔を見回すが、誰も質問はなさそうであった。

「ないみたいだな、それじゃあ訓練に行こう。次の戦いまでに来る限り強くなっておきたいから時間は惜しいしな」

そう言って皆を促し、部屋を出る。

第14話：訓練（後書き）

今回は説明回でした。

今回は日常編を1話やった後、戦いに行きたいと思います。

読んで下さってありがとうございます。

面白いと思ったら評価・感想をお願いします。

第15話：日常を失った者達の日常

訓練を終えたのは明け方のことだった。

訓練時間は平日は21時～24時、休日前が21時～3時で休日昼間は道場で刀の稽古ということにしていた。

これは日常を過ごしながらも可能な限り多くの時間を鍛錬に割くために決めたことで、宗と彩以外のメンバーには大切なことだった。

最初の集会があったのが土曜日。

明日が休日であるので剛の道場での訓練に充てたいところだが、まだ決めただけで話を通していない。

だから明日は一日休みになっている。

その事と初日ということの2つがあつて力の入った訓練に皆帰りは言葉もなく別れた。

宗たちも家に帰り、直ぐ寝ることにした。

Side彩

昨日の訓練は本当に疲れたわ。

だからかしら、私は宗君の部屋の布団を独り占めしてしまった。

布団を敷いてくれた時、お先にの言葉に何も考えず布団に入って寝てしまった。

考えればわかったことなのに。

一人で暮らしている人の部屋に布団が2つあるわけないって。

朝起きて部屋に居たのは服にくるまって寝ずらそうにしている宗君

の姿だった。

私は自分を恥じた。

勝手に押しかけて住まわせてもらっという寝どころまで奪うなんて…

今日は休日。

せつかく出来た一日なのだから生活空間を整えるために買い物に行かなくっちゃ。

幸い家から出るときにお金は持ってきた。

モデルをしていたからかなりの余裕がある。

その時に布団を買おう。

そこまで思考して気がつく。

せまい部屋で2人っきりの生活。

昨日は勢いで言った事や混乱も抜けきっていなかったから良く考えてなかったけど、年頃の男女2人。

1人になって考えると顔が赤くなって多くの思考がよぎる。

同棲？

まだ恋人も居たことない私が？

でも他に行くところないし。

っていうか私昨日抱きついて泣いてなかった？

あつたばかりの男の人の胸の中に飛びこんで行った？

でも、優しくかったし慰めてくれたし何もされなかった。

動けなかった私を助けてくれたしその後もあんな危険な星人達に一

人で立ち向かっていってカッコよかった。

顔は普通だけど身長高めでスタイルも良いし優しい。

何より私の境遇を理解してくれる唯一の人だし…

「って何考えてるのよ私はッ!!」

妙な方向に思考が行くのを自覚して思わず叫んでしまう。

「んっ。ふあああ、朝か」

その叫びで宗が起きる。

先ほどまで考えていた相手が目を覚ましたことに焦りと恥ずかしさから声が上がらないのをどうにか落ちつけて声をかける。

「おっおはよう。」

「えっ、ああそう言えば昨日から一緒に住むんだっただね、おはよう」
「ええ。あっ、昨日はごめんなさい。私居候なのに布団を使わせてもらっちゃって」

「ああ、いいいよいよ。女の子を床で寝させといてその横で一人布団で寝るなんて出来ないし」

「ありがとう。でも本当に住まわせてもらって大丈夫なの？」

「大丈夫だよ。俺も同じ境遇だったんだし大変さは知ってる。部屋一つ借りるのも保証人が居ないと出来ないからここを出たら住む所がないだろ？」

「そっか。保証人が必要なんだ。あれっ？じゃあどうやってここを借りたの？」

「嘘の設定を作って誤魔化してね。担当の人が良い人だったから助かったよ」

「大変だったのね。じゃあお言葉に甘えて居候させてもらっわ」

彩は姿勢を正して言う。

「これからよろしくお願いします」

宗も正して。

「どちらこそよろしくお願いします」

暫く頭を下げた後

「つくす」

「あはは」

どちらともなく笑いだした。

Side 宗

ひとしきり笑った後、朝ご飯を食べてから買い物に行くことにした。メインは一緒に住むことになった彩に必要なものを買いに行くためだ。

「変装はばつちりだね。それじゃあ行こうか？」

「ええ」

しかし、改めて考えてみると凄い。

モデルをしているような子と同棲するために買い出しに行く。

普通じゃあり得ないことだ。

つてか昨日あの子のこと抱きしめたんだよな？

そうするのが正しい気がして勢いで抱きしめたけど…

引かれてないよね？

ああ、でも良く見たら凄い俺の理想にピッタリの子だよ。

髪はさらさらだし、顔は整ってるし、スタイルも良いし、性格も良い。

…そういえば昨日抱きしめた時柔らかくて良い匂いがしたなあ

「今日はまずどこに行きます?」

「へっ?あ、ああどこ行くかだよね?どツどこが良いだろう」

ヤバイ変なこと考えてたから嘸んだ。

落ち着け……………心を平静にして考えるんだ…こんな時どうするか…
2… 3 5… 7… 落ち着くんだ…『素数』を数えて落ち着くんだ…

『素数』は1と自分の数でしか割ることのできない孤独な数字……………
わたしに勇気を与えてくれる

「ってこんなんで落ちつけるか!」

「ひゃっ。いきなりなんですか?」

しまったつい言葉に出してっっこんでしまった。

「あっえっえーと、ごめん。ちょっと考え事してた。きつ気にしないで」

「そうですか?あつ。……………まっまあ誰でもあることですよね」

何故か思い当たることがあったかのように納得してしまった。

……………???

「えっと、どこ行くかだったよね。とりあえず配達が必要な布団当たりから行かない?」

とりあえず話題を変えることにした。

こうして買い物を終え、料理や掃除、金の管理などの事を決め、生活空間を作っていた。

昼間は2人で肉体労働のアルバイトでお金を貯めつつスーツの使いこなしを上げていき、夜は訓練で力を上げていく。

残りの時間で情報収集をして戦略を学び、知識を付ける。

日常は過ぎていく。

日常を無くした二人で新しい日常を築きあげていく。

そしてその日常で培った力を見せる日が来る。

背筋の悪寒。

戦いの合図であった。

Side ????

俺の名前はさいがおりよし齊賀有喜

どこにでも居る普通の人間だと思っていた。

俺がこの力に気が付いたのは3年前の15歳の時だった。

初めは気のせいだと思っていた。

親父がたばこに火を付けるときにライターライターの火が消えた後も火が残って見えるのだ。

ちよつと変だなと思ってこつそりライターを借りて来て遊んだ。

中学生にとつちやライターは良いおもちゃだった。

そしてライターの火を動かせたら面白いのになんて考えていたら、本当に動き出した。

初めはびっくりしたけど直ぐ楽しくなってきた。

自由に火が動かせるようになった後、他のモノも動かせないかなって色々と試していった。だんだんと大きなモノも動かせるようになっていった。自分が超能力者であると自覚した。

超能力。

誰もが夢見ることの一つであろう。

それが夢見がちな中学生の身に起ったんだ、嬉しくないはずがない。興奮して色々試していった。

超能力のことについて調べて、超能力者の出てくる作品を見まくった。

能力で出来ることはどんどん多くなっていった。

能力の事は誰にも話していない。

まず信じられないだろうし、バカにされていじめられるかもしれないからだ。

それくらいは中学生にもなればある程度予測が付く。

それに、これ程便利な力の事を知られたくないということもあった。カンニングだつて覗きだつてし放題だしスポーツでも上手く使えば運動神経が良いだけの奴に見せかけて凄いプレイが出来た。

おかげで文武両道の人間だつて思われたし彼女もできた。

能力さまさまだ。

絶対にこれは手放せないし、知られるわけにはいかない。

でも、同時にこの力の事を話したいと言う願望もあった。

この力を自慢したい、褒めてほしい、相談したい。

そんな願望が大きく膨れ上がった時だろうか、ネットでいじめを苦に自殺しようとしている人を発見したのは。

この力は復讐にも使うことが出来る。

長年力について研究していたため自分の脳が人と違って、それが力を発生させていることも分かっていった。そして、脳をいじれば人工的に超能力者を作ることが出来るのではないかという研究結果もあった。隣の県だから学校の奴にばれる心配もない。やる前に許可を取ればいいし、自殺志願者だしという思いもあって会いに行った。

お前の人生を変えてやる。俺に会ってみる。

こうメールを打って会いに行った。

男の名前は坂田というらしい。

坂田は想像していたような暗いやつではなかったが、恨みは相当持っているようだった。

力を見せて力を渡すことが出来るかもしれないと言うと脳をいじることを承諾してくれた。

結果、脳をいじることに成功して坂田は火が消えた後も見えるようになった。

能力の鍛え方を教えた後はそれを磨くよう言ってから家に帰って行った。

思えば浮かれていたんだろう。

長年話すことのできなかつた力について話すことが出来る相手が出来、力を渡すことにも成功した。

そして浮かれたまま一人で家へ帰っている時に、突然腹から包丁が生えた。

「ぼつ僕の玲利ちゃんを奪いやがってお前が居るから全てが悪いんだ」

どうやら背中から刺されたらしい。

それは逆恨みだろうと思いなながらも意識が薄れていく。でもこのまま死ぬのは耐えられない。

俺を刺したクラスメイトの心臓を握りつぶして道ずれにする。それで力を使い果たして俺は意識を手放した。

俺は死んだはずだった。

もう二度と目が覚めないと思っていた。

「新しいメンバーが来たか」

知らない部屋で目覚めるまでは。

第15話：日常を失った者達の日常（後書き）

坂田に力を授けたっていうオリキャラ出しちゃいました。

本編では授けた人がいるっただけで出てこなかった人です。

もし本編で出てきたら坂田の師匠の名前も坂田だったって落ちに脳内変換して下さい（笑

後、本作品には関係ないですが、昔演劇の台本として書いたコントがUSBの中から見つかったのでアップしました。

もしよろしければそちらもごらん下さい。

5分ぐらいの短編です。

読んでくれてありがとうございます。

面白いと思ったら評価・感想頂けるとありがたいです。

第16話：新たなる仲間と死のワルツ

宗が転送された時居たのは哲だけだった。

「あつ宗さん。ついに決戦の日ですね」

「ああ、どんな星人が来るんだろうな」

恐怖と緊張で若干顔が強張っている哲と話していると彩が転送されてきた。

「いよいよね」

彩が神妙な口調で口にする。

恐怖もあるだろう。しかし、勝つという意味の感じられる声だった。最後に剛が転送されてくる。

「…俺が最後か」

剛は見回してから、集中のためか壁際まで行き瞑想を始める。

ジィ

また転送が始まる。

ここからは新しいメンバーだ。

どんな人物が来るか皆の視線が集まる。

「新しいメンバーか」

つぶやく宗の前に現れたのは右手を腹に、左手を前に突き出してうつむいている高校生くらいの少年であった。

「……えっ？」

少年はしきりに腹を探って疑問でいっぱい顔になる。

「なっなんで傷が？」

困惑している少年に宗が近寄る。

「こんにちは、名前を聞かせてもらっても良いか？」

声をかけられて初めて宗たちの姿に気が付いた少年は驚きながらも答える。

「……斉賀有喜。あなたは？」

「俺は天道宗。宗と呼んでくれ。有喜君、何が起きているかわからないだろうけど落ちついて話を聞いてくれるか？」

「……わかった。そうする他なさそうだしな」

「ありがとう。それじゃあ説明するけど」

ジィ

「っとまた転送されたか。彩さん。そっちの説明お願いします」

「わかったわ」

新たに転送された人間を彩に任せて宗は続ける。

「っと中断しちゃったな。説明に戻る。落ちついて聞いて欲しいん

「ただ、」

宗は有喜の顔を見て一拍ためてから。

「君は一度死んだから今ここにいる」

爆弾を放った。

これは受け入れがたい事であろうし、感じていたであろうことでもある。

どういう反応をするかを待つ宗。

「死んだ…俺はやっぱり死んだのか？…：…そうだよな。あんな傷負ったんだしな。でも、でもじゃあ何なんだここは！？俺はこんなところで見覚えなし天国のようにも思えない。傷だつて無くなつてるしさっきの転送つてあり得ないようなことも起っている！」

「ああ、疑問はいつぱいだろう。俺も最初はそうだった。説明するから落ちついて聞いてくれないか？」

「…ああ、そう言つてたな。説明してくれ。俺に何が起こつたんだ？」

「…ここは死者が集められる場所で、生き返るチャンスが与えられる場所でもある」

「生き返るチャンス…」

「そうだ。あそこにあるガンツという球体が死んだ者に新しい体を与えてゲームの参加者に行っているんだ」

「新しい体…ゲーム…」

「そのゲームは宇宙人との戦争だ」

「宇宙人？」

「ああ、信じられないだろうがこの地球には宇宙人がすでにやって来て溶け込んでいる。それと殺し合いをするんだ」

「殺し合い！？」

「ああ、頭に埋め込まれた爆弾が奴らにおれたちを敵だと認識させる。俺たちは宇宙人を殺して点数を集めるのがこのゲームでの役割だ」

「爆弾!?!? 点数つて?」

「宇宙人には強さに応じた点数が付けられている。殺すか捕まえるどそれを手に入れる事が出来る。でも向こうもこつちを殺そうとしてくる。だから、最初は戦わなくて良いから生き残ることを考える!」

そう宗が言った時、ガンツから音楽が流れてきた。

「これが戦いの合図だ。ガンツの表面を見る」

「力が抜ける曲だな。: 表面に文字が浮かんできた?」

「あれがガンツからのメッセージだ」

てめえらの命は
無くなりました

だから新しい命を

どう使おうが私の勝手だし

って理屈なのだす

「: 内容は深刻なのに力の抜ける文字だな」

「ああ、でも笑えない」

ゾンビ星人

特徴

多い

増える

好きなもの

肉

口癖

ああああああああ

ゾンビ星人の名前とともに黒い布で全身を覆って顔のわからない写真がでる。

「ゾンビ星人？」

「これは戦う宇宙人の情報だ。それにしてもゾンビか…今回は宇宙人と戦うってよりバイオハザードの世界に紛れ込むみたいになるかな」

「バイオハザードって…もはや宇宙人じゃないじゃん！」

「これも宇宙人だよ。妖怪やアニメキャラクタの時もあったんだ。何が出てもおかしくない」

「…まじかよ」

「ああ。今出てきた武器があるだろ？あれを使って戦うんだ。後ろに出たケースの中にはスーツが入っている。これは身を守ってくれ

るからこれだけでも着てくれ！」

「…ああ、まだ全部は信じられないが、他の奴らも着ているようだしとりあえず信じてみるよ」

そう言っつて着替える有喜。

ジイ

彩が話していた女の子から転送が始まる。

「転送されても絶対に動き回っちゃだめよ」

彩が注意を促し、女の子は震えながらもうなずいて転送されていた。

「転送が始まった。もうすぐ俺たちも転送される。隣の部屋にバイクと刀がある。俺はバイクを持っていくが、お前も何か使うか？」

宗はそう言いながらバイクの部屋へと向かう。

「いや、この銃だけでいい」

有喜はそう言っつて短銃とショットガンを手取る。

「そうか、その撃ち方は上の引き金がロックオンで下の引き金がレントゲン。同時に引いたら弾が出る。弾が当たってから爆発までにタイムラグがあるから気をつける」

「わかった」

「っと俺の番のようだ。向こうで待ってる」

説明を終えると宗は戦場へと転送されていった。

ジィ

転送先は広い外国人墓場だった。

「墓場でゾンビか…嫌な予感しかしないな」

「あつ、きつ来た」

辺りを見回していると声をかけられる。

「君はさっき部屋にいた…」

「優理子、里井優理子（さとせのりむね）です。あつあの、ほっ本当に戦いなんてするんですか？」

「ああ、冗談なんかじゃない。時期に他の皆も転送されてくるし、ここはもう戦場だ」

そう言つて宗は優理子めがけて銃を撃つ。

ギョーン

ボンッ

「ひいッ！」

優理子は思わずしゃがみこんだ後、後ろを向く。

そこに居たのはガンツの写真にあった全身真っ黒のゾンビ星人だ。

星人は銃を避けた後、宙に浮かんで両手を広げ叫ぶ。

「 “ # (‘ & % & % \$ # ” ! “ # \$ %) 」

すると、地面が一斉に震えだした。

ジィ

「 転送されていきなり戦場? 」

彩がそう言っつて現れた時、地面からゾンビが這い上がってきた」

「 きゃあああああああああ 」

優理子が叫ぶ。

「 他の皆が来るまでその子を見といてくれ 」

そう言っつて宗は100点武器の銃を構える。

重力ガン。撃つと巨大な力が上から襲いかかり、あいてを押しつぶす銃だ。

見た目がHの形をしているからHガンと名付たその銃でゾンビたちに向かって放つ。

ドンッ

大きく円状に穴が開く。

地面ごと押しつぶされたゾンビ達が潰されていく。

ドンッ
ドンッ
ドンッ
ドンッ
ドンッ
ドンッ
ドンッ

そこらじゅうから湧きあがってくるゾンビの群れに向けて乱発する。

「うわッもう戦ってるの!?!」

「…数が多いな」

「こッこいつらが星人…まんまゾンビ映画じゃねえか!」

後ろから仲間の声が聞こえる。

「全員来たか?数が多い!囲まれるとヤバイからあの壁のあるところまで行くぞ!そこを背にして撃ちまくってとりあえず数を減らす。あそこまでの道を切り開け!」

「」「おうッ!」「」

全員でゾンビに向かって撃ちまくる。

「道が出来た!走るぞ!」

壁に向かって走る。その間も周りを撃ちまくってゾンビ達を牽制しながらだ。

「壁に着いたぞ!撃ちまくれ!」

こちらに向かってくる敵を撃ちまくる。

「くそっ横からも来る!正面は俺が受け持つから左右から来る敵は任せた!」

それを聞いて皆が二手に分かれて撃ち始める。

全員でゾンビ達に向かって撃ちまくる。

ゾンビ達は新しいモノが次から次へと這い出て来てどんどん増えて行っている。

視界を覆いつくす程に多く、どこに向かって撃っても当たる。しかし、銃弾をかくぐってやってくるモノも居る。

「ぬおおおおお」

剛が近づいてきた敵を切り裂いていく。

「剛さん、そのまま近くに来た敵をお願いします。皆、敵が近くに来ても剛さんに任せて撃つのをやめるな！敵を減らさない限り窮地に追い込まれるだけなんだから！」

そう言って撃ち続ける。

わかってはいても近くに来た敵を無視するのは簡単ではない。少しずつ恐怖がにじり寄ってくる。

「もういやっ、いやっ、いやああ！何なのこれはなんで私がこんな目にあってるの！？ゾンビなんてゾンビなんて存在していいわけないじゃない！！もういやああああああ」

恐怖のあまり叫びだす優理子。

しかし、戦場は待つてはくれない。優理子が担当していた方角のゾンビ達が近寄る。

「…すっかりしろ、敵は待つてはくれないぞ。」

優理子を襲おうとしたゾンビを剛が切り裂く。

「そうよすっかりして！怖いのは皆一緒なの！あれに近寄られたら

「うげえ」

「…何をしてるんだ奴らは？」

「何かわからないけど何かされる前に今の内に出来る限り多くを倒すっ！あいつらの思い通りにさせてなるものか！哲！あの全身真っ黒のゾンビ星人を撃ち落としてくれっ！あいつがゾンビを操ってる！」

「おう！」

ゾンビを撃ちながら哲に狙撃を頼む。

哲の狙撃の腕はチーム1だった。

「あつあたらねえ！」

しかし、哲の腕をもってしても当たらない。

ゾンビ星人はゆらゆらと揺れながら全てをかわしてしまう。そうしているうちにゾンビ達がどんどん大きくなっていく。

「まさか肉を食って融合してるのか！？」

ゾンビ達は巨大な1体のゾンビになって襲いかかってくる。

「逃げる！」

巨大なゾンビが腕を振るう。

とっさに逃げれたのは5人だった。

「いやあああああ、つがあつあああ」

逃げ遅れた優理子が吹き飛ばされて倒れる。

腕の直撃は避けられたようだが、腕が振るわれた時に飛び散った肉片に当たったようだ。

「クソツ！これでも食らいやがれ！」

宗がHガンを放つ。

ドン

巨大ゾンビの右腕が大きくえぐられる。

「うああああああああ」

哲の援護射撃でえぐられた右腕がはじけ飛ぶ。

ゾンビはひるみながらも残った左腕をこちらに振るってきた。

「うおおおおおおおお」

「宗くん!？」

重いHガンを捨て、腕に向かって走る宗。

振るわれる腕に向かって思いっきり飛んだ宗はそのまま腕を足場にして駆けあがる。

「死ねええええええええ」

ゾンビの頭にまで駆け上った宗は両手に構えたXガンを直接頭に何発もたたき込む。

零距离ヘッドショット。

大きく頭がえぐれる。

相場が吹き飛ぶ前にさらに飛んでいた宗は宙に浮きながらも頭を撃

ち続ける。

ズーンッ

「がっは」

ゾンビが倒れると共に地面にたたきつけられる宗。

「宗くん！」

「大丈夫ですか!？」

倒れる宗に駆け寄ってくる皆。

「おっおれの事はいいからあの真っ黒野郎に気をつける!」

それを聞いて真っ黒のゾンビ星人に注意を向ける皆。

「\$%&`&! "%\$#”」

ゾンビ星人がまたも奇声を発する。

「今度は何だつてんだ」

奇声によって現れたのは骨であった。

白い骨が大鎌の形を作って現れたのだ。

その姿はまるで死神のようであった。

「…来るぞ」

その言葉を合図に、ゾンビ星人が向かってくる。

「ああああああああああああああああああああ」

「ッ速い！」

「っがぐああ」

あつという間に近ずいてきた星人が銃を構えていた哲の両腕を切断した。

「離れなさい！」

彩が星人に向かって撃つ。

「ああああああああああああああああああああ」

「っあああ」

彩の両腕も切り裂かれる。

そしてそのままその鎌首を彩の首に向けて振り下ろし

「させるかああああああああああ」

「うおおおおおおお」

かけて宗と剛に止められる。

二人で左右から切りかかる。

宗が右から切ると剛がわずかに時間をずらして左から切りかかる。

剛が切った隙を生めるように宗が再び切る。

これが訓練で身につけた二人での攻撃だった。

同時に切るのではなく、時間差を付けて切る。

これにより隙を無くし、怒涛の連続攻撃が可能になる。

しかし、

「くそっ！これでも全部防がれてやがる！」

星人の攻撃速度はそれ以上であった。
鎌を回転させるように左右から来る攻撃をいなしていく。

「！\$' %&' \$%&&%# ……」

いなしながらまたもや詠唱を始める。

「くそっくそっくそっ！」

このまま詠唱を完成させられたら今度こそ終わりだろう。
心は焦るがどうしようもない。

宗の頭に敗北の文字が浮かんだ時、

「はぁ！」

「%&' &% ……！！！！！！？？？」

有喜が星人に手をかざして力を込めたとたん、
星人の動きが止まった。

「うおおおおおおおおお」

その隙を逃すまいと二人は全力で切る。
星人はバラバラになって動かなくなった。

「かつ勝ったのか？」

「…勝てたみたいだな」

放心したように宗と剛がつぶやく。

「そッそうだ！彩さんと哲は！？」

つぶやいた後、直ぐに彩と哲の所に行く。

哲の頭が消えていく所で、彩はぐったりと横たわっていた。

「死ぬな！もう転送されるからもう少しだけがんばれ！」

そう言つて彩の傷口を縛つて止血する。

部屋に戻れば死んでさえいなければ全ての傷が元通りになるのだ。あと少し頑張れば元に戻るのである。

宗が彩達の方に行った時、二人の様子を確かめた後、剛はゆっくりと有喜の方を向き、

「…何かしてたな？いったい何をしたんだ？」

そう聞いた。

「それは…っあ」

喋ろつか迷っているそぶりを見せた有喜が転送されていく。

「…後で聞く。」

そういつて剛は彩を励ます宗を横目にゾンビに飛ばされた優理子の所へと駆けよる。

「…生きているか？」

「……えっええ……でも……体が動かないの……感覚がないの……私
もしかしてずっとこのままなの？」

「……大丈夫だ。戦いは終わった。転送されれば生きてさえいれば全
ての怪我が治る。だからもう少しだけ我慢してくれ」

「……そうなの……じゃあ頑張らなくちゃね……」

励ます剛に弱弱しく返す優理子。

剛が転送されていく。

「……俺からか。絶対死ぬなよ」

そう言っただけで消えていく剛。

後に一人残された優理子。

「……優しいんだね……剣士さん……忘れられていた私を気に
かけてくれたのはあなただけよ……カッコイイかも」

そうつぶやいて、少し顔を赤くしながら優理子は転送されていった。

第16話：新たなる仲間と死のワルツ（後書き）

あれっ？なんか剛にフラグ立ってる！？

いや、最初は2チームわけて、哲と有喜と優理子の3人にして哲が狙撃するのを二人がサポートして、近くに来ていた敵に気付いた優理子の悲鳴を聞いてそれと戦って優理子を守った哲にフラグが！！

って予定だったのに：哀れっ哲！（笑）

うーん何度も書いている途中に最初とは違った方向に向かってしま
う（・・・）

これがキャラが動くってやつなんですかね？（笑）

所で、わたくし事ですが、ちょっと来週水曜日まで忙しくなるんで更新が少し遅くなるかもしれません。

でも、途中で放棄する気はありませんので、まだまだお付き合いいただけたら幸いです。

読んで頂きありがとうございます。

面白いと思ったら評価・感想をお願いします。

第17話：戦果（前書き）

今回色々と説明不足の部分もあると思うので、後書きに補足説明を載せておきます。

第17話：戦果

Side 剛

ジイ

部屋へと転送される。

今回の戦いは終始追い込まれ続けた戦いだっただ。

最初に転送された時にはもう囲まれていて、戦闘中だった。

一番数が少ない壁のある方向に道を切り開いておこなった壁を背にした戦闘は激しいの一言だった。

見た目も数も強い圧力となって襲いかかってくるゾンビ星人。

正直に言つて宗さんのHガンによる面制圧がなければ押し切られていただろう。

面制圧があつてさえくぐりぬけて来たやつらも居たくらいなのだから。

動きの遅さと1体1体の弱さがなければやられていたかもしれない。その次に現れた巨人。

巨体の割に動きが早く、威力も驚異的だった。

どう動けば良いかわからなかった俺に対して宗さんの動きは実に見事だった。

まさか腕を駆けあがるとは。

宗さんが素早く倒したお蔭で重傷1人に被害が収まった。

もしもう少しあの巨人ゾンビが暴れていたら全滅もありえたかもしれない。

そして、最後に戦った全身真っ黒の死神のような星人。

速かった。

最初に狙われていたのが俺なら哲と同じように何の対処も出来ずに切られていたかもしれない。

これでも剣道の家に生まれたものだ。
幼いころより行っていた鍛錬のお蔭で動体視力には自信があった。
でも、その視力でも捕えきれない程の動きだった。
宗さんと2人で刀で切りかかった時も簡単にさばかれていた。
もしあの時呪文の詠唱に力を注いでいて刀はさばくだけにとどめて
いなかったら、俺たちは切り殺されていただろう。
同時に、詠唱が完成していても俺たちは皆殺しにあっていただろう。
あの状態から更に何かされて生き残れるとは思えない。
あの有喜とか言う男が使った何らかの力。
あれがなければ死んでいた。

今回転送されてきた二人。

混乱しながらも事態を受け入れ、いきなりの戦闘にも恐怖を覚えながらも見事に戦ってみせた里井優理子。

きっと心が強いのだろう。

時間をかけて心の準備をしてきた俺たちと違って彼女には戦いを受け入れる時間がなかった。

それにもかかわらず、共に戦い、俺たちを助けてくれた。

許容を超え、精神が折れかけた後もすぐに立ち直りまた戦い続けてくれた。

…俺が同じ状況だったなら立ち直れただろうか？

俺の場合は転送された後、星人との戦いの前に時間があった。

星人との戦いも数が少なく、危険も今回ほどではなかった。

しかし、今回は最初から危険尽くしで場所も相手も恐怖をあおるようなモノであり、極限状態が続いた。

あの状況に追い込まれて戦いを選択できたことも、すぐに立ち直れ

たことも尊敬に値する。

里井優理子。

重症だったが致命的なものは見られなかった。

無事だとは思うが、心配である。

心が強く性格も良い。

生きていてくれたら良い仲間になれそうだ。

そしてもう一人の新たな仲間、齊賀有喜。

彼は妙に強かった。

銃を扱う時も一番近い敵を上手く狙い撃つていてはずれがなく、銃の扱いの上手い哲と二人で守っていた方角は意識の片隅に置く程度で済んで、彩さんと優理子さんの二人のを守ることには専念できた。

スーツも巨大ゾンビの時の動きをみる限り、あの短時間で使いこなしていたようだ。

そして何より死神ゾンビと戦っている時に使った謎の力。

あのような力は今あるガンツの武器の中には存在しないはずだ。

あの謎の力がなければ確実に全滅していた。

もしあの力を皆が使えるようになれば、今後皆で生き残れる可能性が上がる。

…何としてでも聞かなくては。

ジィ

剛が有喜に話しかけようとすると、優理子が転送されて来た。

「…良かった無事だったか」

「あっ剣士さん、ありがとございます。あの、名前を聞いても良いですか？」

「…そう言えば名乗っていなかったな、榊原剛だ。今後ともよろしく頼む、里井優理子さん」

「えっ、なんで私の名前を!?!」

「…すまない。最初の彩さんとの会話を聞いていたんだ。悪かった」

「あつ、そう言うことだったんですか。いえ大丈夫です、気にしてません。それに…名前を覚えてもらって嬉しいです。」

「…そうか、それはありがたい」

ジイ

最後の一人である彩さんが転送されてきた。

“良かった無事だったか”

宗さんに抱きしめられながら恥ずかしそうにしている彩さんを見ながらほっと胸をなでおろす。

「…これで全員無事だったな」

「そうみたいですな。…あの二人って付き合ってるんですか?」

「…さあな」

そりではさいてんをはじめ

ガンツに文字が浮かび上がる。

「採点?」

「…星人との戦いの採点だ」

ヲタク 43てん

「おおつ高いな！」
「今回は数が多かったからな」

哲の点数に皆の採点への期待が高まる。

ゆりこりん 26テン 泣きすぎ

あやちん 47てん 合計 50てん

さんぱくがん 108テン じうけい 109テン 10
0てんメニユー

「おおつ！凄いいじゃないですか剛さん！」
「あの死神みたいなやつを倒したのが大きかったんだろっな」
「100点メニユーを選べるわよ！」

皆がそれぞれに剛を褒める。

「…ありがとう。100点メニユー」

3つの選択肢が現れる。

「…武器をくれ」

剛の手にHガンが転送される。

それを眺める剛をよそに次の点数が発表される。

頭を抱えてもがく宗に皆が近寄る。

「つつああ、はあはあ。なっなんとか大丈夫みたいだ。急に頭が暴走したかのように熱くなっただかと思えば、今はやたらと頭がすつきりしている」

「良かった…宗君本当に大丈夫なのよね？」

「いったい何なんですかね？」

「…頭がすつきりしている？脳を戦い向きにするとかか？」

「わからない。ただ、さっきの痛みは脳が悲鳴を上げているみたいな感じだったから、もしかしたら脳を改造するような薬だったのかもな」

そう言つて視線を銃に移す宗。

「新しい銃か…これは期待できそうだ」

「どんなのですかね？」

「脳を改造つて…大丈夫なのよね？」

「…訓練で試さなくてはな」

宗に注意がいつていたが、ガンツの表示がまた変わり、最後の採点を皆が見る。

エスパー 41テン 順応はやすぎ

「エスパー！！？」

「これって…」

「そうかつ！死神とやった時の！」

「…そう言うことだったのか」

有喜に注目が集まる。

「…こんな形でばれるなんてね」

頭を押さえながら言う。

「……あまり知られなくなかったから隠してたけど、もう意味がな
いか……俺は超能力が使える。今日の戦いでも銃の標準を合わせ
たりジャンプの力を上げたり動きを止めたりするのに使っていたよ」

有喜の言葉に皆が驚きを隠せないでいる中、宗だけが何かに気付い
たかのように問いかける。

「その超能力つてのは俺たちも使えるようになるか？」

「…確かに、その力を使えるようになれば生き残れる可能性が上
がるな」

その二人の言葉に何かを期待するような眼が有喜に集まる。

「…すぐにそんなこと考えるかよ普通？……ああ、ああそうだよこ
の力は他の奴にも与える事が出来る。…すでに1度試したしな。」

「マジかよッ！すげえ！超パワーの次は超能力！しまいにや魔法で
も使うようになりそうだな！」

「凄いわ！そんな力を与えられるなんて！」

「ぜひ頼む！俺たちに力を分け与えてくれないか？」

「…俺からも頼む。その力は戦いの役に立つんだ」

皆の反応に照れたように、また、困ったように頬をかく有喜。

「…その反応は見てて楽しいんだが、ただ、力を与えるって言うっても簡単じゃないんだ。脳からこの力は発生している。だから、脳をいじることになるから失敗したらどうなるかわからないんだ」

その言葉にシンとなる一同。

「……………それでも、それでもその力が欲しい」

宗が沈黙を破る。

「…俺もだ。成功した例があるのならばお前を信用する」

「……………オタク垂涎の夢力、超能力を得られるツてんだもんねリスクを考えてもやっぱりほしい！」

「……………私もお願ひするわ。強く、強くなるって決めたんだもの」

「わっ私、私は……………お願いしたいです。先ほど聞きました。

今日のような大変な戦いをずっとしなくちゃいけないって。持っていたらなんて後悔をしたくないです」

「……………どうなっても知らないぞ」

皆に頭を下げられた有喜は決意を込めたような顔で超能力開発を了承する。

後に最強を冠する超能力チーム誕生の瞬間であった。

第17話：戦果（後書き）

敵の点数

ゾンビ：1点×400

巨大ゾンビ：50点（ゾンビ50匹分）

死神：80点（剛の斬撃で死に至ったので、剛が倒した事になる）

武器の説明

2回目の武器：ナノマシン入り錠剤（本編でバンパイアがナノマシンと言っていたので、いくつかのナノマシンがあると仮定して、大阪の2回クリアのやつがXガンの敵の力を探る力を見つけ出したように機会の操り方についての知識が入って来て、ガンツ本体以外の機械の操り方がわかるようになる。これにより、岡が巨大ロボを操れた理由が成り立ち、31巻の吉川が言っていたガンツの機能についても、ガンツが壊れて本体と認識されなくなったからガンツの状態がわかったという解釈が成り立つ。

また、脳に届いた際、視野が広がる、直感力が上がるなど戦闘に良い影響を与える効果も付属してくれる。

3回目の武器 強化捕獲銃（3回クリアの多い大阪で、使われない武器と考えたとき、性格に合わない捕獲かと考えたため。）

*の形の銃口から生物のみを縛りつけるYガンよりも強力な拘束力を持った巨大ネットを飛ばし、ネットにふれた生物を全て捕える。

（壁をすり抜けて奥に居る星人を縛ることも、星人数匹纏めて捕えることも可能。）

今回で1部完です。

次からはいよいよ本編に介入を開始します。

頑張って水曜までに投稿しようと思います。

…あつ、後名前をレインマンから多那彼方に変更しました。
特に深い意味はありません。

ここまでお読みいただきありがとうございます。

面白いと感じたら、評価・感想をお願いします。

第1話・守るために（前書き）

遅くなつてすみません。

新章突入です。

第1話：守るために

駅の周りの広場。

そこに1メートル以上もある虫の群れと戦う人の姿があった。

「Aチームはそのままその場所で足止めを。Bチームは前にある本屋を曲がった所に居るので周波数を変えて奇襲を。Cチームは一斉射撃を。5秒後に同時に攻撃するので合わせて」

100点武器の飛行ユニットに乗った宗が空中から指示を出す。

「3・2・1・撃て！」

宗も含む全チームが虫の群れに向けて一斉に攻撃をする。

グシャグシャグシャグシャ

虫たちの破裂する音が聞こえる。

「おいつ！大きいクモが来たぞ！」

殲滅した後も気を抜く暇なく新手が現れる。

「でかくて強そうだ、60点つてあるからたぶんこいつがボスだ！」

狙撃班をまとめている哲から報告が入る。

Xガンにパソコンを繋いで出来るようになった敵情報の割り出し。これによってより戦略的に動けるようになった。

「このロボで戦う。援護を頼んだ！」

そう言っただけで待機状態にあった100点武器の巨大ロボに乗る宗。

ドンッ

大蜘蛛との殴り合いが始まる。

「困むようにして位置どつてくれ！力を使える奴は停止を、使えない奴は射撃を頼む。今から10秒後だ！」

そう言っただけで大蜘蛛と戦い続ける宗。

「3・2・1今だ！」

大蜘蛛の動きが止まる。

同時に一斉に攻撃された大蜘蛛は体を散らせて死んでいく。

「よしっ！もう居ないと思うが転送が始まるまで気を緩めずに周りを見張ってくれ！」

湧きたつ皆に気を緩めないよう指示を出し、周囲を見張る宗。

ジィ

何事も起らずに転送が始まる。

「犠牲者なしで終わらせられたか」

転送されていく宗の顔には笑みが浮かんでいた。

ゾンビ星人との戦いから10カ月。

あれから14度の戦いを切り抜けてきた。

犠牲者を出さない戦い。

敵しいと思いつつも目指してきたものだ。

理想としながらも全てを守れてきたわけじゃない。

最初に信じてくれなくて死んでいく者。

戦闘中に殺されてしまう者。

どうしても犠牲は出て来てしまった。

それを減らすためにはどうすれば良いかを考えながら戦い続けてきた。

戦っていく中で築き上げてきたのが集団での戦闘だ。

イヤホンとマイクの付いたトランシーバーで全員と常に会話できるようにすることで組織的に動けるようにした。

チームを戦闘班A、奇襲班B、狙撃班C、超能力班Dに分けてそれぞれに特化させた。

戦闘班を率いるのは剛。

奇襲班を率いるのは彩。

狙撃班を率いるのは哲。

超能力班を率いるのは有喜。

それぞれ4人程のメンバーで成り立っていて、それを宗が統括している。

戦闘班が敵と戦って、敵を引きつける。

奇襲班が周波数を変えて透明化して敵の背後から攻撃して援護する。

狙撃班が高い位置からの狙撃で援護と敵の情報を知らせる。

超能力班はボスや強敵と戦う時にその力を利用して動きを止めることに力を使う。強敵以外の戦闘では戦闘班とともに戦っている。

各班には1人は近接戦闘の得意な者を付けてボディガードとしている。

有喜によって超能力に目覚めたのは宗、剛、彩、哲、優理子、それと新しく入った3人の計8人だ。

超能力に関しては、脳をいじられることに抵抗があつて受け入れないもの、受け入れても適性がなくて実践で使えるレベルにならなかった者などがいて全員というわけにはいかなかった。

力は使えば内臓にダメージがいくので、鍛えてはいるが基本的には強敵との戦いの時に全員で一斉に動きを止めることに使用するだけに普段はとどめている。

この10カ月で埼玉チームは強くなった。

宗は7回クリア。

剛は3回クリア。

哲は2回クリア。

彩は2回クリア

有喜は3回クリア。

優理子は1回クリア。

新しく入ってきたメンバーにも4人クリア者が出て、皆武器を選んでどんどんと強くなっていった。

強くなれば自分を、仲間を守ることが出来る。

死なさなければ再生を選ぶ必要もなく、強くなることを選択できる。

強くなることは守るということだった。

そして今回も1人の犠牲もなく皆を守ることが出来た。

自分が居た世界ではないけれど。

自分の居場所がなくなってしまうた世界であつたけど。

新しい居場所が出来、守るべき人達も出来た。

奪わせはしない。

強くなって守りきる。

宗は転送されて来る仲間を見ながらそう決意し直した。

ジイ

「あつ宗さん。やりましたね！また死者無しで乗り切りましたよ！」

哲が転送されてきた。

最後の一人である。

「ああ、皆強くなったな」

そう思いを込めて言うと、それを聞いていた皆が宗に言葉を返してくる。

「ここまで来れたのは宗君が居たからだよ」

「…ああ、宗がいなければ今のおれはここに居ない」

「そうですよ！宗さんに皆助けられてきたんですから！」

思わず涙ぐみそうになるセリフを貰った宗だが、顔には出さないように、ただ一言。

「ありがとう」

そう返した。

それではちいてんをはじめまつ。

ガンツの採点が始まった。

人数が増えてきたため最初のような大きな点数は少なくなったが、今回のように強く、数の多い敵ならば高得点が期待できる。

あやちん 25てん 合計 79てん

さんぱくがん 36てん 合計 52てん

オタク 42てん 合計 121てん

予想通り高得点が続いていく。

今回クリアになったのは哲、優理子、新メンバーの2人

しゅうくん 81てん 合計 134てん

そして宗だ。

「「武器を頼む」」

強くなっていく。

大切なものを守る力を求めて。

第1話・守るために（後書き）

どうもこんにちは、やっと新しいの投稿出来ました。

そして1年後…ってやつです。

武器に関しては設定集を乗せるのでそちらをご覧ください。

東京編に上手く入って行きたいです。

お読み下さってありがとうございます。

面白いと思ったら評価と感想をお願いします。

第2話：NEWS

「「ただいま」」

戦いが終わって自室に帰ってくる。

アーマーのままでは目立つので、透明化しながら帰宅してきた。家に着くと同時に透明化を解除する。

彩が会話のカムフラージュのために耳に置いていた携帯をポケットに入れる。

「誰も犠牲者を出さなくてすんだわね」

「ああ、最高の結果を出せたよ」

犠牲者もなく点数も大きい。

考えうる限り最高の結果に思わず顔を緩ませる。

「皆だいが強くなってきたし、死者も最近は出していない。このまま犠牲者なしでカタストロフィまで行きたいものだよ」

この言葉に彩は少し顔を引き締めて

「…カタストロフィでも犠牲者を出さないのは無理なのかしら？」

「…たぶん無理だと思う。世界中でカタストロフィの警告は出されているんだ。規模が違う。自分の周りの者を守ることは出来ても全てを守りきることは出来ないと思う」

「そう…備えるしかないのね」

「ああ。出来うる限りの備えをするしか出来ないのが歯がゆいけどね」

「…そうね」

少し場の空気が重くなったのを感じた宗は話題を変えることにする。

「あーえつと、そうそう。お腹がすいてたんだった。まだ晩飯食ってないだろ？飯にしないか？」

話題を変えたことに気が付いた彩はそれに乗ることにする。

「そうね。今日の当番は私だったわよね？今日こそは凄く美味しいモノを作ってぎゃふんと言わせるんだから！」

「いつもおいしいじゃないか」

「それ以上においしいものを作って出す人が何を言ってるんだか」

そう言っつて台所へと向かう。

その姿を見送った宗は机の用意をして、テレビでも見て待つことにした。

「どづつ？おいしい？」

「ああ、凄くおいしいよ！なんかいつものとは味付けが違うね？なんかやったの？」

「ふふーん。ちょっとネットで良いサイトを見つけたからね。これからはもっともつとおいしいのを出していくわよ！」

「おお！そりゃ楽しみだ。…所でそのサイトを教えては？」

「駄目」

「…だよなー」

砕けた口調で会話が続く。

その時テレビから流れってくるNEWSに宗は思わず反応する。

次のニュースです。

昨夜未明東京都 区で集団で幻覚を見るといふ事件が発生しました。幻覚の内容は線路に落ちたホームレスを救おうとした学生2人が電車にはねられて死亡するというモノです。

目撃者が多いことから最初は事故として捜査がされましたが、死体が上がらなかつたため集団で幻覚を見たという事件として扱われるようになった模様です。

ガスか何かの何らかの幻覚作用を及ぼすモノが駅にばらまかれた可能性を示唆して、テロの線でも捜査がされています。

なお、幻覚を見たとされる者達の健康状態を調べたところ、何らかの異常は見つかっていないとのことでした。

では、次のニュースです

始まった。

このニュースを見て最初に浮かんだ事がそれだ。

ガンツの主人公である玄野計と加藤勝の2人がガンツの戦いに参加したことを告げるニュースであった。

「…?どうしたの?このニュースが何か?」

「いやっ、なんでもない」

「…なんでもないならそんな顔しないよね? 凄く真剣に今のニュース見てた」

「…気にしないでくれよ」

「気になるよ。気になるし知りたいって思う。何か抱え込んでいる

んなら知って私も負担を負いたいもん」

「抱え込んでるって…別に隠しごとの1つや二つ誰にもあるだろう？全部何もかも誰にでもうち明けろってか？」

少し強めの拒絶を示す。

ガッツのことを作品として知っている事は誰にも知らせるつもりはなかった。

「…確かにそうだよ。誰にも隠し事はある。でも、それが負担になる隠しごとだったら教えてほしいの。もう1年近くもずっと一緒に居たんだよ？宗君が何か隠し事をしているのには薄々気が付いてたわよ。何か背負っている事にも。いつかうち明けてくれると思って待っていたけど、もう待てない。隠していることは何？さっきの真剣な表情からして大変なことなんだよね？あなたが苦しんでいるなら私もそれを背負いたいのに！」

「気が付いてたのかよ…でもなんで、なんでそこまで俺の事を」

「そんなの好きだからに決まってるでしょ！」

突然の告白に一瞬の静寂が訪れる。

「好き。大好きよ。最初に会った時に守ってくれたあなたの姿は凄くかっこよかつたし、居場所がなくなつた私に居場所を作ってくれた。それから1年の間もずっとそばにいたし、何回も私を守ってくれた。皆を導いていく姿もすごく格好よかつた。もし振られたらなんて恐くてずっと言えなかつた。でも言いたかつた。好きよ。大好きよ。だからあなたの事が知りたいの！」

「…俺も彩の事が好きだ。そうだよな、ずっと一緒にいたもんな。

彩にだけはうち明けても良かったのかもな」

「！それじゃあ」

「ああ、付き合おう。そして、俺の抱えている事全てを話すよ。…

少し信じがたい話かもしれないけどな」

「嬉しいっ！どんな話でもあなたの言うことなら信じるわ。それに信じられないって言ったらガンツの事とか超能力のこととか信じられないようなことはいっぱいあったもの」

「ははっ確かにそうだったな。…じゃあさ話すから聞いてくれ」

彩が顔を引き締める。

「話は俺が死ぬ前に戻るんだけどな、俺が死ぬ前に居た世界ではガンツって作品が人気漫画としてあったんだ」

「っえ？漫画？それに世界って？」

「ああ、俺も最初は信じられなかったんだが俺が転送された時、その場所に居たのはそのガンツって漫画が始まる1年前を描いた小説の主人公とヒロインだった」

「そんな…それじゃあ」

「…ガンツを見た時に俺は目の前に居る女性がその小説のヒロインだったことに気が付いた。そこから始まった戦いもガンツの知識があったから乗り越えられた。乗り越えた後に今後の事を考えてもし漫画の通りに進むのならばこの知識は大きな武器だって考えた。だから、知識を活かせるように、漫画でも小説でも載っていないこの埼玉に来たんだ。ここで力を付けて生き残るために。そして、さっきのテレビの報道で物語りの主人公がガンツの世界に足を踏み入れたことを、物語りが始まったことを知ったんだ…これが俺の秘密だよ」

「私が漫画の世界の住人…」

彩は衝撃的な事実に関くショックを隠せずに青ざめていたが、急な思いついたように宗の方へ顔をやった。

「待って、以前に自分のオリジナルが東京に居るって言ってなかつ

た？」

「…ああ、あれがあつたから困惑していたんだ。俺がガンツから帰った時に、自分の知っている東京とまったく同じだったから自分の家はどうなってるんだろうって思ってた。…そしたら居たよ。俺と同じ顔した男が腹じゃなくて足を轢かれて大けがで済んだ男が。死ななくて済んだ男が居たんだ。」

「そんな…」

「だから分からなくなった。漫画の世界に入り込んだんだって思ったけどガンツ以外全てが同じだし、俺までいた！…だからこう考えたんだ。ひよつとしたらここはパラレルワールドってやつでガンツの作者はこの世界と俺の元いた世界の時間か空間が重なった時に知ってしまったってそれがどこか頭の中に残っていたからあの漫画を描いたんじゃないかって、ここは漫画の世界じゃなくなって本物のもう一つの世界なんじゃないかって！…俺はこの世界に転がり落ちた石のような小さな存在なんだよ」

再び部屋に沈黙が下りる。

そして、それを破るのもまた彩であつた。

「…石でもいいじゃない。それはきつと磨かれて光る石だよ」

「えっ？」

「宗君はこの世界に来て何をしたか知ってる？」

「何をしたか？」

「私は知ってるよ？私の命を救ってくれて、私たち皆を守ってくれて、世界そのものも守ろうとしている」

「…そんなに大げさなものじゃないよ。ただ、生き残りたかっただけだ。その際に目に見える範囲に、救える範囲に居る奴がいたら救ってきただけだよ」

「いえ、大げさなものよ。その救える範囲に居た人が、私がどれだけ救われたと思う？その救える範囲がどれだけ大きくなっているか

わかる？あなたは凄いことをしてきたの。英雄的なことをしてきたの。だから小さくなんてない。ぴかぴか光っているわよ。世界に追いつかれたんじゃないよ、この世界が必要としているからあなたを呼んだんだと思うわ」

「必要とする？」

「そうよ。あなたが居れば救われる人がたくさんいる。だからあなたが呼ばれたのよ」

「俺は、俺は…」

思わず涙があふれ出してくる。

誰にも言えなかった不安。

この世界の自分を見つけた時から感じていた不安。

自分はこの世界に必要とされていないんじゃないか？

その思いを打ち消すために戦ってきた。

カラストロフィの恐怖を誰よりも知っていることから来る恐怖から

逃げるように戦ってきた。

死ぬのが恐かった。

誰にも言えなかった。

自分という存在自体に不安を感じていた。

様々な思いがよぎって、涙を止める事が出来なかった。

いつか宗が彩を抱きしめたように、今度は彩が宗を抱きしめる。

宗は彩の胸の中で泣き続けた。

第2話：NEWS（後書き）

連続急展開？

まだ付き合っていなかったらしいです。

今回はタイトルの like a rolling stone の意味も載っています。

異世界に転がり落ちる。

有名な曲名ともかぶせて付けました。

転落人生的な意味はありません。

お読み下さってありがとうございます。

面白かったら評価・感想をお願いします。

第3話…これからの事

「ごめん、もう大丈夫だから」

宗が泣き始めてからどれくらいが立ったことだろう？
冷静になって来て、恥ずかしくなった宗は彩から離れる。

「もう大丈夫？」

「ああ、ありがとな。前と逆の立場になっちまった」

「ふふ、あの時助けられたのだからおあいこよ」

しばし笑いあつた後、彩が聞く。

「ねえ、さっきの話の事だけど、物語が始まったって言ってたわよね？詳しく教えてくれないかしら？」

その言葉に宗は迷った。

どこまで教えて良いものか？

この世界で生きていく事を決めたのだから少しでも良い結末を勝ち取るために物語に介入をするつもりではあつた。

しかし、その結果が吉とでるか凶とでるかはわからないのだ。

例えば教室に星人が現れる事件。

これがなければ玄野とたえは深く付き合う事がなくなってしまい、カタストロフィで船に乗り込むことが無くなって、それが最悪の結果に繋がるかもしれない。

例えば大量銃殺事件。

これがなければ東京チームは存在しなかった。

これらの事件を止めるのは簡単だ。

しかし、後の影響を考えると止めない方が良い事件は多い。

彩にこれらの事件を話すと止めるように動くだろう。

目の前の確実に救える数十人を助けて、先のわからない、もしかしたら人類が滅びるかもしれない未来になるかも知れない道に行くのは恐い。

もちろん、もっと良い未来が待っている可能性もあるが、少なくとも銃殺事件の事には触れない方がよいだろう。

宗は自分の勝手な判断で助けられる数百人を見殺しにすることを決定した。

これによる重圧や後の彩に向けられるであろう軽蔑を覚悟の上で。

245

「……どう話したら良いんだろうな。かいつまんで話すと、先ほどNEWSに出ていた2人は主人公とその親友でチームリーダーの2人だ。その2人がガンツで戦いながら仲間を集めて強くなっていてカタストロフィに立ち向かうって感じだ」

「……やっぱりカタストロフィって宇宙人による地球の侵略なの？」

「ああ、侵略だ。地球より高度な文明を持って、地球人の何倍も大きい巨人で、宇宙をさまよいながら定住の地を探している奴らだ」

「……言葉は通じるの？」

「ああ、やつらの持つてる翻訳機を使えばな」

「なら！なら話し合えば良いじゃない！殺し合わなくても話し合ってお互いを認めてそれで一緒に住めば良いじゃない！」

彩が希望を見出したかのように詰め寄る。

「俺たちを虫ケラのように扱って食料としてしか見ない奴ら相手にか？」
「ッッ」

その言葉に目を見開く。

「いきなりやって来て破壊の限りを尽くして、ゲームのように笑いながら殺して遊んで、おやつ感覚でつまんで食べる食料として持ち運んで、犬の餌に混ぜて与えて動物園に展示する……そんな奴らと話し合いが出来ると思うか？」

「そっそんな…そんなことって」

「全部事実だ。そうでもなきや俺も殺し合いなんてしたくないしな。守るには力を付けるしかないんだよ」

「……そうよね、そう思ってた今まで力を付けて来たのよね」

「ああ、俺たちは強くなった。これは事実だし誇ってよいことだ…
…俺が居なくなっても大丈夫だと思えるくらいにな」

「えっ!？」

宗の言葉に驚き詰め寄る彩。

「どっどっということ!それって!」

「前々から考えてはいたんだ。物語が始まった後でどうするかを。」

東京チームは戦力が足りない、知識が足りない、指導者が足りない。何も無いところから始めて、毎回大量に犠牲者が出る。俺たちは今でこそチームで役割を決めて1つの群れのように動くことが出来る。武器もあるし団結出来る。だから強いし、犠牲者を最小に抑えられている。でも、強い武器もなく、戦力は2〜3人しかおらず、戦闘経験も覚悟もないままスーツを着てくれる人さえいない中で戦わなくてはならない東京チームの生存率は低い。死んだ奴の中には戦力として期待出来るやつもいっぱいいる。…俺は東京チ

「ムにはもつと強くなつて欲しいんだよ」

「…それは知っていることからくる感傷？ 私たちで代わりに戦うのは駄目なの？」

「……とある星人の予言がある」

「予言？」

「ああ、その星人は玄野計が鍵となる人物であるつて言っている」「鍵？」

「ああ、鍵だ。玄野計の生き残る才能はこの世界を守るのに必要なものなんだ。だから、導きたい。玄野計が寄り道せずに強くなつて、この世界から犠牲者を減らして欲しい。だから、俺は行きたいんだ。東京へ」

宗の言葉に一瞬の沈黙が訪れる。そして

「私も行く」

「えっ？」

「私も行くつて言ったの。」

「でっでも」

「さつき私言つたわよね、あなたの事が好きだつて。色々と話すとがあつて流されてたけど、一世一代の告白なのよ？」

「そっそれは」

「1年も一緒に居てやつと思いが伝わつたと思つたら置いていくつもりだったの？ 冗談じゃないわよ。私はあなたと共にある。だから置いてくなんて言わせないわよ？」

不敵に笑う彩に言葉を無くした宗がうなずく。

「…埼玉のチームを彩に任せるつもりだったんだけど、でもこうなることを期待してた俺も居たみたいだ。嬉しいよ。これからも一緒に頼む」

「任せてよ！私の彼氏さん」

「頼むよ、俺の彼女さん」

東京チームを導く2人がここに誕生した。

第3話…これからの事（後書き）

うーん、新章に入ってから文のレベルが落ちている気がする…

なんか書きづらい)……)

良い文を書けるように精進します。

読んで下さりありがとうございます。

面白いと思ったら評価・感想をお願いします。

第4話：東京へ

「リーダーは哲に任せる」

「おっおれ!？」

彩とのやりとり次日の日。練習の終りに暫く埼玉から離れる事、次のリーダーを哲に、彩の代わりを優理子に任せる事を告げる。

「ちょっと待って下さいよ!どうしても宗さん行っちゃうんですか?」

「いきなり東京って」

「それに彩さんまで居なくなるなんて」

「宗さんが居なくなったら強敵が出て来た時どうすれば良いんですか!？」

「俺が次のリーダーってなんで!？」

「…理由を聞かせてくれないか？」

突然の知らせに動揺するメンバー。

宗はすまないと言謝った後、言う。

「実は俺は埼玉に来る前は東京ガンツチームで戦っていた。その時に未来の予言をした星人が居たんだ」

「予言？」

「ああ、予言だ。そいつが言うにはカタストロフィを防ぐ鍵となる人物がいるらしくてな、そいつが先日ニューースでガンツに呼ばれたことを知った」

これはあらかじめ彩と決めていた嘘である。
しかし、それを聞いたメンバーは驚きに目を見開いていた。

「その事があってその予言が本当に起る事なのではと思ってな、その鍵となるやつを見極めに行こうと思うんだ」

そう聞いて沈黙する一同。

「なんで宗さんが東京に行くのかはわかったよ。で、でも宗さんが居なくなっただ後俺たちはどうすれば良いんだ？それに俺がリーダーだなんて……」

哲が宗に尋ねる。

「このチームは強い」

宗が言う。

「組織として動くことが出来るようになってから被害が一気に減ったし、個々の強さも訓練と武器で相当なものになってきた。もう俺が居なくても大丈夫だって信じている。哲をリーダーに選んだのは全体を良く見る目を持っているからだよ。哲は狙撃手だから高いところから全体を見て指示を出せるし、経験も豊富だから対処の方法も考えつく。それに哲は最初から強かったわけじゃないからな弱者の気持ちや行動が良く分かるから無茶な支持を出さないしその指示も届きやすいだろう。まあ少し頼りないけど立場が人を育てるって言うしよろしくやってくれ」

「……頼りないは余計だよ」

「じゃあ次会う時には頼りになるリーダーになっててくれ」

「…その時は宗さんの戻ってくる場所が無くなるくらいに頼れるり

「リーダーになってやります！」

そう言っただけでリーダーとしてやっていく決意を決める哲。その様子を見た後、最後に宗は言った。

「まあ不安だからこいつがちゃんとやってけるか見てから行くがな」「ちよつとなんですかそれ！」

「次の戦いで俺は指示を出さないから哲に従って動いてくれ」

騒ぐ哲を聞こえないふりをして解散と告げる。

皆で面白がって哲の声は聞こえないふりして帰っていくと哲が後ろでずつとギヤーギヤー言っていた。

…いじめはなかった。

最後の埼玉での戦闘はその1カ月後だった。

哲の指示で死者もなく勝つことが出来たのを確認し、東京へと旅立った。

「まず東京での居場所を確保しなくちゃな」

埼玉の時とは違い1人ではないために借りるのに問題はなかった。

「来たか」

「いよいよね」

東京に出て来て1週間。

戦いを告げる感覚がやってきた。

「これが東京チーム…」

彩がつぶやきとともに部屋を眺める。

スーツを着ている集団と着ていない集団にわかれている。転送されてきた彩に注目が集まる。

「なっなんでそのスーツを着てんだ？それにその武器は？」

オールバックの大男、加藤が転送されてきた彩に話しかける。

「東京チームの人？私は埼玉から引越してきたの。ガンツのこともよく知ってるわ。この武器は100点武器よ」

「100点武器？」

彩の話を聞いていた他のメンバーたちも疑問の声を上げる。

「100点メニューのことも知らないようね。でももうすぐ戦いの時間よね？戦いが終わったらこのガンツについて知っている事を教えてあげるわ」

「今じゃ駄目なのか？」

「詳しく説明しようとなると少し長くなるから。あと、」

ジィ

そう彩が言った時、宗が転送されてきた。

「埼玉チームのリーダーも一緒に来てるわ」

彩の言葉に転送されて来る宗に注目する面々。

「なっなんだあれ」

そこにはスーツと違い顔すら覆う鎧のようなごついフォルムに刃付きの巨大な腕を持つ強化スーツのアーマーに身を包んだ宗の姿があった。

「懐かしいなこの部屋は」

そう言っただけを周りを見渡す宗に加藤が言う

「あんたが埼玉チームのリーダーなのか？」

「ああ、天道宗だ。お前は？」

「おっ俺は加藤。加藤勝かとうまさるだ。その格好はなんなんだ？」

「これか？これはスーツを強化したものだ。アーマーと呼んでいる。

「スーツを強化!？」

「100点武器の一つだ。お前も手に入れられるかもな」

「また100点武器か…いつたいなんなんだ？100点武器とか100点メニユーとか？」

「そうか、それも知らないか。だが、もう時間だろ？」

そう言つと音楽が流れてくる。

あたーらしーいあーさがきた。きーぼーおーのあーさだ。

それを聞いた加藤が思いだしたかのようにスーツを着ていない集団の方へ顔を向ける。

「俺たちはこの状況を知っている。これから戦いに出かけなくちゃならない。この音楽は戦いの開始を告げる音楽だ。戦う相手はその球に表示される。もうすぐその球が開いて武器が出てくる」

そう言つた後、ガンツが開く。

「そのスーツケースの中に入っているスーツだけでも着てくれ！それは身を守ってくれる。」

そう言つてスーツを着せようと説得していると

「喝！」

奥に居た坊さんが一喝する。

「その者の話を聞いてはならん。その武器は人をあやめるものぞ！そ奴らは悪魔じゃ耳を貸してはならん！」

周りにそう言つて邪魔をするのは徳川夢想^{とくがわむそつ}。テレビなどで少し名の通っていて、加藤達スーツ組が転送される前に集まっていたメンバーを掌握していた人物だ。

「ここは天国に行く前の裁きの場所。天国に行きたくば耳を貸さずに経を唱えるのじゃ！」

そう言つて皆に経を唱えさせようとする徳川。

「あんたが悪魔になりたいのか？」

「何？」

宗の言葉に反応する徳川。

「あんたは宗教者で理解のおよばない事を全て祈りで解決したがるのかもしれない。状況を知っているとという者を、危険があると知らせる者を跳ねのけてまで自分の考えにすがって思考停止したいのかもしれない。でも、それに他人を巻き込むなよ！自殺したいのなら一人でしてろ！」

「何じゃと？ふざけるでないわ悪魔め！わしが悪魔じゃと？自殺者じゃと？悪魔の分際でもほざいたもんじゃわい」

「俺は悪魔じゃない」

「ふんっそのような格好しておるのは悪魔だからであろうっ？」

「違う！見てくれ」

そう言つて面を取つて顔を見せる宗。

「ほら、ちゃんとした人間だろ？」

「ふんっ顔だけ変えてもわしは誤魔化されんぞ！」

「うわああああああああ」

宗と徳川が言い争っていた時、一人の男性が声をあげた。

見るとその男性の隣に居た男が頭から転送されて行っていた。

「何をしおつた悪魔！」

「転送が始まったんだ。さっき言ったように戦いが始まる。戦場に飛ばされているんだ。害はないから安心しろ。戦闘エリアから出たら死んでしまうから外に出ても決して家に帰ろうとしないでくれ！」

「騙されるな！念仏を唱えるんじゃ！」

「うおっ」

「なっ」

加藤がいきなり前に出て近くに居た2人を持ち上げる。

二人は抵抗するも全く効かない。

「これがスーツの力だ。力を与えてくれるし身を守ってもくれる。せめてこれを持って行くだけでもしてくれ」

そう言つて2人を地面に下ろす。

加藤に下ろされた後、持ち上げられていた2人が後ずさつてからしぶしぶといった感じにスーツを持つ。ついでに銃も持つていった。それを見た他の人達もスーツや銃を取る者がぼつぼつ出始める。

「何をやっとするんじゃ！悪魔の言うことを聞いてはぬをう！」

徳川の転送が始まる。

「いつ嫌じゃ消えたくない！せつかくここまで金も名誉も勝ち取ってきたのにこんなところで消えたくないんじゃ！死ぬときは複上死と決めとつたんにええいこの悪魔め貴様の仕業じゃな！はやくとめ」

色々とわめき散らしてから消えていった。

最後のわめきを聞いていた念仏を唱えていたメンバーは少し考えた

後慌ててスーツと銃を取った。坊主の言葉が信用できなくなったためだ。

「なんか騒いでたけどなにかあったの？」

廊下から部屋に男と女の2人が入ってきた。

二人ともスーツで男は妙にすっきりした表情をしていて女は少し顔が火照っている。

…奥で何をしていたのかは聞かない方が良さのだろう。

「ケイちゃん」

加藤が男をそう呼ぶ。

ようやく宗はガンツの主人公、くろのけい玄野計との対面を果たした。

「うわっそいつら誰？」

「埼玉のガンツで戦っていた人達らしい」

「マジかよっ！ここ以外にもあったなんて。っていつかその武器と格好は？」

「これは100点武器だ。詳しいことは戦いが終わってから説明する」

「100点武器って…あっ」

そういつて転送されていく計。

いつの間にか残っているのは加藤と宗たちだけだ。

「時間がない。とりあえずスーツを持って行かなかった人の分を持って行こう。後で来てくれるかもしれないし」

「そうだな」

そういつてスーツを持って転送されていく宗たち。
誰も居なくなつた部屋にはガンツだけが取り残されていた。

あくま星人

特徴 強い

好きなモノ 契約

口癖 血をよこせ

第4話：東京へ（後書き）

宗たちが来たことによって全体のレベルが上がったという事で少し強い敵が出てきたという設定にしています。

本編で強い星人を集め過ぎたので人がいっぱい欲しかったという発言があったのでメンバーの強さに応じて敵も変わるといふ設定です。

ところで、

あくま星人

特徴 強い

好きなモノ 契約

口癖 僕と契約して魔法少女になつてよ

この口癖で投稿するかちょっと悩んだ作者が居ました。

…だそうかな ユーベエ

お読みいただきありがとうございます。

面白いと思ったら感想・評価頂けると嬉しいです。

第5話・殺し合い（前書き）

いつもより倍くらい長いです。

いつも通り後書きに説明載せてます。

第5話：殺し合い

「何じゃい街の中じゃないか」

徳川が転送された先はベッドタウンの中だった。

「おおっそうじゃわしのフェラーリが無事が見に行かんと」

徳川は駅に向かって歩き出す。

「あっお坊さん」

暫く歩くと最初に転送された男、池俊一いけしゅんいちに出会う。

「何じゃ部屋におった小僧か。まだこんなところにおったんじゃ」
「ねえ」誰じゃ！

いきなり見知らぬ声に話しかけられて警戒する2人。

「僕と契約して使いになつてみないかい？」

「なっなんじゃ貴様！悪魔か！」

話しかけてきたのはネコのような生物だった。

白い体に赤い瞳を持ち、顔の横から垂れた第二の耳のような部分の先に金のリングが浮かんでいる。

「ねえ、僕と契約しないかい？」

当たり前だ目の前でむごい死を見てしまったのだから。

「ねえ、僕と契約してくれよ。そうしたらどんな願いでも叶えてあげるよ」

「ひっ!」

いつの間にか白い悪魔が直ぐ後ろに立っていた。

「けっ契約でもなんでもする!だから生きてこの場から逃げさせてくれええええええ」

恐怖のあまり何も考えられなくなった池はこの場所から逃げることだけしか考えられなかった。

「そんな願いでいいのかい?わかった、契約成立だ。これでキミは魔法使いさ」

その瞬間光に包まれ、池はそのまま消えていった。

ジィ

「どこは!?!」

宗は驚愕していた。

東京ガンツメンバーを見ておこりんぼう星人との戦闘だと思い寺に

転送されるとばかり考えていたからだ。

「どうしたの？」

「いや、なんでもない」

いつまでも驚いたままではいられない。

思考の切り替えが早くなければ戦場には居られないからだ。

そして、今までは敵の情報を持っていることから倒し方もわかっているのに楽に勝てると考えていたのが通用しなくなった。

素早く状況の変化に対応しなければ死んでしまう。

「他の皆はどこに？」

「私が転送された時にはもう誰もいなかったわ」

それを聞いて少し頭が痛くなる。

ただでさえスーツも着ていない連中も多いのにまとまっていけないとなるとさらに生存率は下がる。

先ほどのやりとりから戦力になるとは判断されていたはずだ。なのに連絡役すら残さずに移動するとは。

「とりあえず他のメンバーを探して合流することを優先しよう。とりあえず空からメンバーと敵を探すぞ」

そう言って飛行ユニットに乗る。

この飛行ユニットとロボの2つは宗が転送されて来る時に近くに転送されて来る。

その際に触れていなくても転送されて来るので転送された先で使うかどうかを選べるのだ。

2人でユニットに乗り空を駆ける。

すると近くのビルの屋上に人の影を見つける。

宗たちはその影の居るビルへと降り立つ。

「俺達は敵じゃない！その銃を下げてください」

「…先ほど部屋に居たやつらか。その乗り物は何だ？」

ビルに降りたたとんに宗に銃を向ける男、東郷十三。

宗は持っていたHガンを下して手を挙げて危害を加えないことをアピールしてから言う。宗たちの姿を覚えていたのか銃を下げながらも問う十三。

「これは飛行ユニット。その銃と同じようにあの球体、ガンツの武器です。今の状況は分かりますか？わかればここに転送されてからの他の皆の動きが知りたいのですが」

「…転送された先で敵による攻撃を受けた。敵はガーゴイルの石像1体。その突撃により1人死亡。その後他の皆は石像を追って行き、俺は視界の広い高い場所に移動してきた」

「わかりました。その銃の使い方は上トリガーがロックオン、下がスキャンで同時押しで発射です。狙撃もできる作りになっているのでこのままここで狙撃をお願いできますか？」

「…わかった。敵の向かって言った方向はあちらだ」

そう言つて北を指差す十三。

「わかりました、ありがとうございます。一人での狙撃は危険が伴うので背後からの攻撃に注意して下さい。…俺も1度狙撃中に背後から襲われて死にかけたことがあるんで」

「…危険は理解している。注意しよう。」

そう言つて射撃の銃に目を向けて機能の確認を始める十三を残し、北の方角にユニットで飛び立つ宗と彩。

北には目立つ大きな洋館がそびえたっていた。そしてそこに入って行く東京のメンバー達。それを追いかけてようとした宗たちの前に空から宙に浮きながら現れる白い猫のような悪魔。

「ねえ、なんでも願いを叶えてあげるからさ、その代わり僕と契約して魔法少女になってよ」

「…なんだかわからないけどお断りするわ」

いきなりの言葉に驚きながらも断る彩。

彩が断った瞬間、空から様々な形をした奇形達が降って来る。それぞれの形は違うが、全員共通して邪悪な印象を抱かせる者たちだ。

20〜30匹はいる。

「断るなんてわけがわからないよ」

「この唐突さこそわけがわからないわよ」

戦闘が始まる。

「よしっ中に入るぞ」

加藤がそう言って皆を目の前の洋館に促す。

大きく不気味な洋館だった。

ガーゴイルを追っていたらその洋館の中に入って行ったのだ。大きな扉が誘うように開いている。

加藤達は中へと入って行った。

「暗いな」

「電気はないか？」

中は暗く、何も見えない。

明りが欲しくて電気のスイッチを探すが見当たらない。
用心しながら中央まで進む。

「ようこそ我が屋敷へ」

「だっ誰だ！」

突然屋敷の中が明るくなり扉が閉まる。そして、奥にある階段の上からスーツに身を包んだ男、吸血鬼が出てきた。

「歓迎するぞ我が新しき僕よ」

「喋ってる？星人なのか？」

吸血鬼はそう言って両手を広げる。

その途端先ほどのガーゴイルが2体吸血鬼の前にやって来る。

「殺しても構わん。原型が残っていれば再生できるしな。私は奥で先ほど見つけたおもちゃで遊んでいる」

そう言っただけの上にある扉へと去っていく吸血鬼。

残されたのはガーゴイル2体と東京チームの面々。

先ほど襲撃を駆けて来たガーゴイルは全長2メートル程のワイバーンのような見た目をした石像で空を駆けまわっている。

新しく加わったのは人の体に角の生えた猿の顔、それに翼を加えたような見た目をしている全長3メートル程の石像だ。

「まっまたあの化けモンかよ!!!しかも2体も居やがる」
「勘弁してくれよ!」

DJのような格好をした2人組み、近藤裕太こんどう ゆうたと苦篠次郎たましの じろうが叫ぶ。
それを合図にしたかのようにワイバーンが突っ込んでくる。

「うわあああああああ」

皆慌てて逃げる。

扉を開けてとりあえず外に出ようとして気が付く。
扉が開かない。

驚愕して何度も扉を開けようとするが開かない。
そここうするうちにもワイバーンは迫って来る。

「無理だ!扉は諦めて逃げろ!」

「うわあああああああっがあ!」

グチャ

嫌な音とともに裕太が押しつぶされる。

それを見た次郎がワイバーンに殴りにかかる。

「この野郎!」

しかし、ワイバーンは翼をはばたかせて次郎を吹き飛ばす。
そのはばたきで起きた風によりメンバー全員が吹き飛ばされる。

「こんなやつ勝てるわけがねえ!」

美系の男、北条政信（きたじょうまさのぶ）がつぶやく。
そんな中、一人前に出る男が居た。

「俺は強い、俺は不死身だ、俺は負けない！」

玄野計はそう言ってワイバーンにつっこんで行く。

ワイバーンはまたしてもはばたきで吹き飛ばそうとするが、玄野は地面を思いつきり殴り、手をつっこむことで吹き飛ばされるのを回避する。

「うおおおおおおお」

風が止むと共に再びつつこみながらXガンを連発する。

狙うは翼。

翼を破壊されて落ちて来たワイバーンの顔めがけて銃を連発する。

ガシャン

ワイバーンはただの石に戻り、動かなくなる。

それを見ていたもう1体のガーゴイルが吠える。

大きく跳躍したかと思うと空から猛スピードで突っ込んでくる。

慌てて避けるが、ガーゴイルがつっこんできた場所にはクレーターの
のような跡が出来上がる。

その破壊力にひるみながらも背中に向かって銃を撃つ。

それにより翼を壊して飛べなくする。

しかし構わずにガーゴイルはつっこんできた。

「ケイちゃん！」

巨体で殴りかかるガーゴイル。

「うおおおおおおお」

それに玄野は拳で答える。

受けとめられるとは思っていなかったのか、一瞬動きが止まるガーゴイル。

その隙に殴ったのは反対の手に持っていた銃で撃ちまくる。

ドゴン

腹から二つに割れたガーゴイルは動かなくなり、石に戻った。

「すげえ」

茫然とつぶやいたのは誰だったか。

一瞬の沈黙の後、歓声を上げながら玄野に近づいて行く。

「やっぱりケイちゃんは凄い」

そう言って加藤が玄野に話しかけた時

バタン

音を立てて扉が開く。

先ほどの吸血鬼が去って行った大きな扉だ。

そして中から出て来たのは5人の大男達。

体のあちこちに傷を縫ったような跡があり、頭からはネジが出ている。

「フランケンシュタイン」

「つく、スーツを着てない奴は下がってくれ。スーツ組で対処する」
そう言っつて銃を構える加藤。
それに合わせて他のスーツ組も一斉に銃を構える。
フランケンが襲いくるのと一斉に撃つのは同時だった。

「速いぞ！」

最初の射撃で2体をしとめたが、残りのフランケンはかなりのスピードでこちらに迫ってくる。

しかし、スーツを着ているものなら全力で動けばなんとか付いていけるスピードでもあったため、距離を詰められないように移動しながら撃つ。

「おいっ！まだ奥から出てくるぞ！」

残り1体までフランケンを追い詰めた時、さらに奥から巨大な蝙蝠が3匹飛んでくる。

蝙蝠は部屋の真ん中まで飛ぶと、一斉に超音波を発する。

「きゃあ」

「がっ」

余りの音にひるみ、隙が出来る。

その際にフランケンは戦っていたスーツの女、岸本恵きしもと けいを殴り飛ばし、スーツを着ていないメンバーに襲いかかる。

「がっ」

顔を殴られたDJ次郎の首が反転する。

…生きてはいないだろう。

さらにフランケンが別の獲物に襲いかかるうとするが隣に居た男、ジェイシエイ JJにより殴り飛ばされる。

「はっ！」

JJの拳がいくつも体に突き刺さり、フランケンは動かなくなる。

「すっすげえ」

最後に残った男、おかざき あきとし 岡崎明俊は興奮する。

岡崎はサバゲーマニアで先ほどの銃撃戦にも興奮していたがスーツを着ていない自分ではという思いも芽生えていた。

それが目の前で自分と同じようにスーツを着ておらず、武器すら持っていない人間が怪物を素手で倒すところを目撃したのだ。興奮しないはずがない。

岡崎は自分の手元を見る。

そこには部屋から持ってきたショットガンがあった。

前に視線を移すと3匹の蝙蝠と、それと戦う6人のスーツを着た戦士。

蝙蝠は彼らに集中していてこちらには見向きもしていない。

ヤレル

岡崎は銃口を蝙蝠に向ける。

グチャ

蝙蝠が1体潰れて落ちる。

それを見た蝙蝠が岡崎に注意を向ける。

グチャ
グチャ

岡崎に注意を向けて隙が出来た蝙蝠に銃弾がまき散らされる。
蝙蝠の殲滅が完了した。

「はははは俺の戦果だ！ヤレル、俺はヤレルぞ！」

興奮した岡崎は階段を駆け上がり扉の向こうへと駆ける。

「おい待てっ！一人じゃ危険だ！」

加藤の制止の声を聞かず駆ける岡崎。

廊下の向こうにはまたしても大きな扉。

扉を開けた岡崎を待っていたのは一つ目巨人の大きな足だった。

ズドン

大きな音とともに地面が揺れる。

岡崎を追って駆けていたメンバーたちは目の前で岡崎が踏みつぶされる様を目撃する。

扉の向こうに居たのは見上げる程巨大な一つ目の鬼だった。

身の丈は20メートル以上。大きな棍棒を持っており、青色の肌をしている。

その巨人が足を振り上げて獲物が入って来るのを待っていたのだ。

「でかいのが居るぞ！注意しろ！」

加藤はそう言つて中に飛びこんで行く。

それに続く面々。

巨人は大きな棍棒をふりかぶりながら向かってくる。

「俺の獲物だ！」

玄野が巨人に向かって突撃していく。

足下まで駆け、足を撃つがほんの少し表面が飛んただけで大きなダメージを与えられない。

「クソツ火力が足りない！」

巨人に攻撃が通じず蹴り飛ばされてしまう玄野。

巨人と人間の戦いは続く。

巨人の攻撃は大ぶり過ぎて当たらない。

人間の攻撃は威力が足りず、効果がない。

戦闘は硬直状態になる。

そんな中、玄野は一人巨人から背を向けて駆けていく。

「ケイちゃん？」

他のメンバーはそれに気がついても巨人との戦闘でそれに構ってられない。

逃げたかと思われた玄野だが、いきなり反転する。

「俺ならやれる。俺なら」

玄野は大きく助走を付けると全力でジャンプし、巨人の口の中へと入って行く。

「がああああああああああああ」

叫ぶ巨人。

数瞬後、巨人の頭がはじけ飛ぶ。

「中に入って撃ちまくってやった」

そう言つて巨人の口から出てくる玄野。

パチパチパチ

部屋の奥にあった扉から拍手とともに現れる吸血鬼。

吸血鬼の横には先ほど部屋に居た男、池が付き従っていた。

「よくここまで来れましたね。我が部下を殺しながら」

そう言い吸血鬼の口調が変わる。

「よくも俺の部下を殺してくれやがって。あれらを作るのにどれだけ金と時間をかけたと思つてやがんだ！てめえらは皆殺しにする」

そう言つて隣に居た池に手を向ける。

「契約通りあの場所から逃げられたんだ、代償として得た力を見せやがれ！」

「ほ…うじょ…う…くん」

最後の力を振り絞り絞り北条にキスをして事切れる女性。

「うおおおおおおおおおおお」

「俺は死なない！俺は不死身だ！」

その光景を目にした加藤と玄野は怪物に向かって銃を撃ちまくる。

しかし、当たってもわずかなダメージしか与えられない。

そして怪物は加藤に狙いを定め、指を向ける。

指の先から黒い光球が出て来て加藤を襲う。

「加藤君！」

光球に当たろうとしていた加藤を横からはじき飛ばす女性、岸本恵。彼女は加藤の浴びようとしていた光球に身代わりとなって当たる。

「きつ岸本」

「加藤君…私…加藤君のこと…好き…」

そう言う岸本の体は腰から下が無くなっていた。

「うおおおおおおおおおおお」

叫んで岸本を抱きしめる加藤。

「お前の相手は俺だ！」

その加藤を横目に怪物へと突撃する玄野。

また口から入って中から撃ち殺してやる。
そう思つて飛ぶが、はたき落される。

「がっはっ」

地面に打ち付けられた玄野は動けなくなる。

「玄野君！」

動かない玄野に駆けよる女性、なぐさのあがせい桜丘聖。

「くっ来るな！ここから先には通さないよ！」

玄野を守るように銃を構える聖。

しかし、意に介さず怪物は腕を振り上げる。

ドゴンッ

建物中に響き渡るような音を立てて破壊の力が振るわれる。

破壊の壮絶さを語るような白い煙が晴れた先に会ったのは怪物の死体だった。

「なっ何が」

突然吹き飛んだ怪物に目を開く聖。

「倒せたか」

そこにはレーザーガンを構えた宗の姿があった。

宗は焦っていた。

東京チームに介入することで犠牲者を減らし、少しでも強い仲間を作ることを目的として来たのに、チームと合流することすらできていない。

このままだとどんどん犠牲者が増えていることだろう。

しかし、すぐに向かうことは出来なかった。

外での戦闘。

大量に現れた悪魔達を連れのまま合流しても戦況を悪化させるだけだっただろう。

急いで殲滅しようにも悪魔達は1匹1匹が違った能力を持っていて殲滅に時間がかかってしまった。

それでもここまで生き抜いてきて強い武器も持つ宗たちの敵ではなかったが、足止めとしては十分すぎた。

殲滅後洋館に入って最初に見た光景は幾人かの死体だった。

遅かったかと焦りながらも冷静さを失わぬように周りを警戒しながら先へ進む。

廊下を抜けた先では戦闘が繰り広げられており、死体が辺りに転がっていた。

敵の大きさを見て半端な攻撃じゃ危険だと判断した宗はレーザーガンを取り出して撃った。

このレーザーガンは撃つまでに1分のための時間がかかるし、1日1度しか撃てないが、その威力は強力無比だ。

いつでも直ぐに発射できるようにためながら来たのが役に立った。

レーザーは軌道上にあるものを全て消し飛ばしながら進み、怪物はチリも残さず消え去った。

「倒せたか」

「あっあなたはさつき部屋に居た」

「すまなかつた。合流が遅れてしまった」

そう言つて部屋の中に入る宗。

「きつ貴様！よくも私のおもちやを！」

宗が部屋に入ると、怪物を倒された吸血鬼が怒りの形相で襲いかかつて来る。

それに武器をビームサーベルへと変えて迎え撃つ宗。

「悪いがおしまいだ」

向かってくる吸血鬼の動きは速い。

しかし、正面から来るのなら間合いに近づいた時に超能力で動きを止めて切れば良いだけだ。

ビームサーベルの間合いは大きく、動きの止まった敵を切るのは造作もない“作業”だ。

転送が始まつた。

第5話：殺し合い（後書き）

おわったー

今回何回かに分けようかなって思ったんですけどテンポとか臨場感無くなるとあれだから少し長くなりました。

今回新キャラで出て来た人達は全員GANTZ WIKIで調べて持ってきました。

漫画で最後に星人と融合したあのメガネ君が一番最初のガーゴイルでの犠牲者です。出番を消されたメガネに合掌を（笑

JJの設定はプロの空手家の方を採用しています。

北条君はあのホモの奴で、一緒に死んだ女性は貞子さんです。

ところで、そろそろ星人のネタを考えるのが苦しくなってきました。何か出して欲しい星人のネタがあれば教えていただけるとありがたいです。

星人はあと4回考えてるんですが、2つしか良い星人が浮かんできてないので・・・；）

ここまでお読み下さってありがとうございます。

面白いと思ったら、評価・感想頂けるとありがたいです。

第6話：東京チーム（前書き）

後書きに捕捉があります。

第6話：東京チーム

ジィ

宗が転送されたのは一番最後だった。

「あ、あんた」

宗を見て加藤が話しかけてくる。

「ありがとう。おかげで生き残れた」

遅れて来たのを追求するでもなく、武器に対して追求するでもなく、ただ礼を言う。

「私からも礼を言っわ、ありがとう。おかげでまだ生きているわ」

「…助けてもらったことには礼を言っよ、ありがとう。でもあんた達いつたいなんなんだ？」

聖と計も礼を言う。

「ああ、同じチームなんだ助けるさ。助けるのが遅れて悪かったな。俺たちについてだが」

そう言ってガンツの方を見る。

「とりあえず採点終わってから話すよ」

それではちいてんをはじめます

からて 2てん

じゅーぞう 15てん

かとうちゃ (笑) 5てん じうけい 10てん

くろの 25てん じうけい 56てん

あやちん 30てん じうけい 41てん

「すごい……なあ、この点数を貯めたら何が起るんだ？」

「それは」

加藤が宗に質問する。

宗が答えようとした時、ガッツの画面が切り替わる。

しゅうくん 125てん じうけい 200てん 1

00てんめにゆー

「なっ！」

東京チームが宗の点数に驚き宗に注目する。

「なっなんなんだこの点数は！あんたいつたい？」

「ちょうど良いな。これが100点を貯めた時の得点だ。100点メニュー」

そう言うと、ガンツの画面が切り替わる。

記憶を失ったの解放、新しい武器、再生の3つの選択肢が表示される。

「これがガンツで100点を取った時の特典だ。ガンツ、武器を2回分くれ」

そう言うと宗の足元にスーツとカプセルが転送されて来る。

「新しいスーツとまたカプセルか…どんな効果なんだか」

そうやって宗はカプセルを口にする。

すると、宗の体に異変が生じる。

全身が熱くなり、体がより戦闘に適したモノへと変化していく。

「宗君!？」

余りの宗の苦しきみように彩が慌てて近寄る。

宗は近寄ってきた彩に手で大丈夫と伝えたと顔を上げる。

「つくはあ、今度は純粋な肉体強化みたいだな。ありがたいことだ」

そうやって加藤達の方へと顔を向ける。

「さつきガンツに表示されていた選択肢を見たか？」

メンバーは首を縦に振る。

「選択肢1の解放はこの戦闘からの解放、2の武器つてのはこのさつきの戦闘で使ったみたいな直接攻撃系の奴もあれば今貰った奴みたいに自身の能力を強化してくれるモノもある。100点取るたびに違う武器が出て来てどんどん強力な武器になっていく。3の再生つてのはこのガンツに関わった奴を誰か1人再生できるんだ」

この言葉を聞いて加藤が質問してきた。

「じゃあ、じゃあ今までに死んだ奴を蘇らせられるのか!？」

「ああ、ガンツメモリーにあるやつならな。ガンツ、メモリーを表示してくれ」

そう言うと、ガンツの表面に無数の顔写真が表示される。

「ここに表示されている奴はガンツに関わって死んだ奴だ。この中からなら誰でも再生できる。…まあ生きている俺たちもガンツメモリーに加わっているからもう一人の自分を生みだすなんてのも可能だは思うがな」

「ッ!……もう一人の自分……」

加藤はもう一人の自分という言葉に強く反応し、そのまま黙りこんでしまう。

加藤は先ほどの戦いで岸本恵を亡くしている。

岸本は加藤に想いを告げて加藤をかばって死んだ。

岸本を生き返らせたいという気持ちは大きい。

しかし、岸本は大きな問題を抱えていた。それはもう一人の自分が居るということだ。岸本は自殺をはかってガンツへとやってきた。しかし、岸本のオリジナルは死んではいなかった。そう、岸本も2人に別れて居場所を失った人間だったのだ。それを知る加藤は苦悩する。100点をと取って岸本を再生したい。しかし、それは岸本にとって幸せなのか？その思いが加藤を揺らしていた。

「あんたはなんでこの戦いを続けるんだ？解放されたいとは思わないのか？」

悩む加藤を横目に計が宗に聞く。

計は先ほどの戦いを思い出す。

この戦いが始まるまで計は早く戦いたい、俺の居場所はここだと思っていた。

戦闘で得られる興奮。

計は自分の強さに酔っていた。

しかし、今回の戦いで最後に現れた怪物。

スーツを着た仲間が次々と殺されていく光景。

まったく歯が立たず、殺されかけた自分。

恐かった。

圧倒的な存在とまた戦わなくてはならないと思うと、恐くてたまらない。

こんな戦いからは解放されたい。

それが宗の気持ちだった。

それだけに、解放のチャンスが与えられながら戦いを選択する宗が理解できなかった。

「……強くならなくちゃいけない理由があるんだ」

そう言つて宗はガンツへと近寄る。

「カタストロフィ」

宗の言葉とともにガンツが数字を映し出す。

2 8 5 1 2 1 4 9 …… 2 8 5 1 2 1 4 8 …… 2 8 5 1 2 1 4 7 ……

数字はどんどん減っていく。

前に見た時よりもだいぶ減っている。

「これが俺の戦う理由だ」

「なんだこの数字？どんどん減つてつてるけど」

「これは人類に残された時間だ」

その言葉に皆が目を見開く。

「どツどういう意味だ？」

「人類つて何のことなのよ!？」

宗に詰め寄るメンバー。

「星人は本物の宇宙人だ。地球にはだいぶ昔から宇宙人が侵入していた。そして約1年後、星人による大侵略が開始される。それがカタストロフィ。地球全土を一斉に攻め落とせるようなやつらが敵だ。俺たちができるのはその時に殺されないように強くなるだけなんだよ。これが俺が戦う理由だ」

そう言つて周りを見る。

皆顔を蒼白させ、沈み込んでいた。

普通ならあり得ないと笑つて飛ばせる話だ。

しかし、ガンツでの戦いを経験した者たちにとってこの話は笑い飛ばせるようなものではなかった。

実際に目で見て殺し合つた相手。

あり得ないと思つていた者たちとの戦いは宗の話信じさせる材料になつた。

それに宗自身もそれを信じさせる材料だ。

宗は解放の機会を逃してでも強くなることを選択した。それにカタストロフィの数字はガンツに今も刻まれ続けている。

それらの事がカタストロフィを否定させなかった。

「俺は戦力を求めて東京に来た。埼玉のメンバーは俺が居なくなつても大丈夫なくらいにまで強くなつた。だから埼玉を離れて東京に戻ってきた。直接鍛えて少しでも強い奴を増やしたかったからだ。一緒に強くなつてもらえないか？」

東京チーム結成の瞬間だつた。

第6話：東京チーム（後書き）

補足説明です。

まず時間についてですが、約11カ月分を秒で表しています。

宗が今回簡単にカタストロフィについて説明しましたが、宗は実は東京チーム以外のチームも探し出してカタストロフィのことを広めることをしています。ガンツにも何度か他のガンツとの通信を頼んでいます。ガンツを掌握しているわけではないのでガンツを使った通信を取れず、ネットで探しているので全チームにカタストロフィが知れ渡っているわけではありません。カタストロフィを伝えて強い戦士を多く作り、カタストロフィに対抗しようと考えています。

点数についてですが、

白い猫^{モデルキューベエ} 20点

そのしもべ 3点×30体

ガーゴイル 5点×2体

フランケン 2点×5体

蝙蝠 3点×3体

巨人 10点

怪物 40点

ヴァンパイア 20点

です。

星人を倒したけど死んでしまったものもいます。

池君は怪物に変貌した時点で点数が付いています。

カプセルについてですが、純粋に身体能力の強化です。

これにより、スーツを着ていない時でも着ているのと同等の身体能力とタフさを手に入れました。

また、新しいスーツですが、アーマーと違って最初からもらえるスーツと同じような形状をしています。

ただ、変更点としてスーツの全体に模様が描かれています。

これはスーツの力を発動していない時でもずっと描かれたままで、スーツの力を発動すると青く光を発します。

このスーツは前に来ていたスーツと重ね合わせると前まで着ていたスーツを吸収して一つになります。

宗は2つのスーツを同時に着てこのことに気が付きます。

吸収したら強化スーツに普通のスーツの力も足されます。

吸収した強化スーツの力と耐久力は普通のスーツの2倍程です。

強化した体がスーツを着用した時と同じ力。

強化スーツが普通のスーツの倍の力

強化アーマーがパンチ力3倍、武装、耐久力3倍、スピード・20

%、器用さ・20%

です。

全部着た時の計算は足し算になります。

お読み頂きありがとうございました。

面白いと思ったら評価・感想をお願いします。

第7話：それぞれの思惑

Side 加藤勝

「これから最初の訓練か」

加藤は帰宅しながら昨夜の事を思い出していた。

「俺は戦力を求めて東京に来た。埼玉のメンバーは俺が居なくなっても大丈夫なくらいにまで強くなった。だから埼玉を離れて東京に戻ってきた。直接鍛えて少しでも強い奴を増やしたかったからだ。一緒に強くなってもらえないか？」

カタストロフィ

それを聞いて最初に浮かんだ言葉は“絶望”だった。
地球侵略？

正直に言って理解が及ばないような話だった。
でも、信じられないとわめくことは出来なかった。
なぜなら星人と幾度か戦いをしてきたからだ。
沈黙した部屋で、加藤がその沈黙をやぶる。

「戦わなくてすむ方法はないのか？」

それでも聞かずに居られなかった。

加藤には弟が居る。

加藤の家族は弟以外に居なかった。

弟と2人で親戚に預けられ、辛い生活を送っていた。

だから加藤は何があっても弟を守りたかった。

弟を一人残して逝くわけにはいかない。

そのためにも死ぬわけにはいかなかった。

しかし、加藤は殺すという行為に忌避感を抱いている。

加藤は根っからの善人だ。

困っている人が居れば見捨てられずに助ける。

加藤が死んだ理由も線路に落ちたホームレスを救うために線路に降りて電車に轢かれたためだった。

そんな加藤だから星人と戦う時にも星人を殺すことが出来ず、捕獲用のYガンを中心に戦っていた。

戦いたくない、殺したくないのだ。

だから、宇宙人が侵略してくると聞いても、戦わなくて良い方法を探してしまう。

しかし、そんな加藤に帰ってきた言葉は否定の言葉だった。

「無理だろう。相手は世界全てを同時に攻め滅ぼせるほどの戦力を持って攻撃してくるんだ、少なくとも戦ってこちらにも力があることを示さなくては蹂躪されるだけだろう」

「そんな…なんでそんなことが分かるんだ？」

加藤の疑問はもつともだった。

カラストロフィのことは分かった。

でも、これは数字だけだし、実際に何が起こるのかをガンツが示し

たわけではない。

何か他に知っていることがあるのかと考えたのだ。

「ガンツは東京のここだけにあるわけじゃない。日本全国、世界各国に大量に置かれている。俺は同じガンツの戦士たちを探して情報のやり取りをしているんだ。カタストロフィに関しては全てのガンツで確認が取れた。ガンツに表示されるカタストロフィの数字に齟齬が生じたから場所ごとで知らせてもらってカタストロフィの起る順番、攻め滅ぼされる順番を見つけた。その順番を見ていて、核か何かで滅びるんだとしたらおかしいんじゃないか？ガンツに表示される意味と戦っている星人の存在は？つてなつてな、宇宙人による侵略というのは確かに確定情報じゃない。だが、高い確率でそうだと予想できるんだよ」

それを聞いた時、宗が埼玉から来たことを思い出した。そして、それがこの言葉の信憑性を高めた。

その後はチームを組むこと、戦うことに全員が頷き、訓練時間や訓練場所を決めてから解散した。

「強くならないと歩あゆむを守れない」

加藤は弟のことを思い浮かべながらつぶやく。

「でも星人だからといって殺したくない？強くなるってことは殺すための武器を手に入れることなのか？それに、再生。∴岸本を再生したい。でもそれは岸本にとって幸せなのか？」

思い浮かぶのは岸本の笑顔と最後の告白。

加藤も岸本が好きだ、でも岸本の席はすでに埋まっている。

再生させたら岸本は居場所のないまま生きていけなくちゃならない。

これまで戦ってきた星人

宗の言葉

岸本

守

カタストロフィ

加藤を悩ませているものは多かった。

「でも、生き残るためには訓練は必要なことだよな」

答えの出ない悩みを置いて、今必要なことに力を注ぐことに決めた
加藤だった。

S i d e J J

ハッ！

聖のキックを受け流し正拳突きをたたき込む。

フンッ！

左右から攻めてくる玄野と加藤に廻し受けで対処し、ハイキックを撃つ。

とっさに腕で防いだ玄野をそのまま蹴りの力で飛ばして加藤へ向き直る。

迫っていた加藤の拳を、中段受けして逆に殴り返す。

残りは埼玉組の二人だけだ。

彩がまずJJに向かって拳を放つ。

これも中段受けで防ぐが、防がれることを前提で来たのか、体勢を崩さずそのまま回転蹴りへと繋いでいく。

1年の訓練はだてではない。

感覚強化の100点武器を飲んでおり、スーツの扱いにも慣れている彩はそのまま連続して攻撃に移る。

蹴り、突き、受け流し、投げ

ありとあらゆる技がぶつかり合う。

しかし、格闘ではプロの空手家のJJには及ばず、体勢を崩された所を正拳突きで飛ばされる。

最後に残ったのは宗だけだ。

JJは身構える。

宗からは強者の気配を感じていたからだ。

宗は一人スーツを着ていない。

なぜなら前回の100点武器でスーツを着ていなくても着ている時と同じくらいの身体能力を手に入れたからだ。

そこにスーツ2個分の力を持つ強化スーツを着ていたら訓練にならない。

宗が動く。

それに合わせてJJも拳を放つ。

宗はそれまで手を出さずに見ることに徹していたのでJJの攻撃パターンと対処法を考え出していた。

相手の攻撃、特徴、崩し方をその場で生み出すのはガッツの世界で生きるには必須の技術だった。

それを強化された感覚で行うのだ、優位は宗にあった。

しかし、JJもプロの格闘家だ。そう簡単には崩せない。

一進一退の攻防の末、宗の放つ拳がJJを飛ばした。

JJは思う、“楽しい”と。

JJは最強に憧れていた。

最強に近づいたために今まで力を磨いてきたのだ。

それが、スーツという強力な力を入れることでさらに最強へと近づくことが出来た。

それに宗という男。

強者の匂いを感じたのは間違いでなかった。

強化された体とはいえ、格闘家でもないのに自分に打ち勝った。

しかも、強化されたスーツを着たら何倍にも強くなるという。

JJは他の武器には興味がなかったが、100点武器の感覚強化、肉体強化、強化スーツには大きな興味を抱いていた。

そこに至るために戦い続けること、その先にさらなる最強への道がある可能性を見るために強くなること。

強さに飢えた男、JJの鍛錬は続く。

Side 聖

聖はガッツに選ばれたことに幸せを感じていた。

ガッツでの戦いは恐怖そのものだったが、今生きていられるからだ。聖は一度死んだ。

その時のことは記憶に刻まれているし、死にたくないと強く願って

いた。

無慈悲な戦いの場に立たされたとしても、まだ生きていられるチャンスを与えられたのだと考えると幸運としか思えなかった。そしてもう一つ、玄野計と出会えたことも幸せの要素だった。

最初はかわいい子だなと思って声をかけたただけだった。

自分が死んだと思いたくなくて、お経を唱えて天国へと行こうとしている集団になじめず部屋を出たら玄野が泣いていたのだ。

その泣き顔が綺麗で思わず話しかけたのだ。

でも流石にいきなりセックスしてよと頼まれるとは思わなかった。

思えばやけになっていたのだろう玄野も聖も。

事を終えた後、スーツに着替えることを言われた聖はそのまま着替えて話を聞いていた。

その後戦場に転送されて戦いの場に立たされたのだ。

戦いは恐怖でしかなかった。

人が簡単に死んでいく。

次は自分がそうなるかもしれない。

そう思うと恐くて仕方がなく、ガーゴイルに睨まれた時はもう終わりだと思った。

そんな時、玄野が一人立ち向かっていった。

自分を必死に鼓舞しながら絶望の具現のようなガーゴイルに一人向かっていったのだ。

そんな玄野は凄く格好よく、聖はその姿に惚れてしまった。

戦いが終わったら付き合って。

思わずそう告白してしまうほどに。

無事生き残った聖は玄野と付き合うことになる。

付き合い始めて1週間。

訓練などでなかなか二人の時間が取れないし、まだまだ玄野の心を奪えていない。

でも

「絶対に私に心底惚れさせて見せるんだから」

「んっ、なんか言ったか？」

「ふふっ、何も言っていないわよ」

訓練をこなしながらも聖の心は玄野でいっぱいだった。

S i d e 東郷十三

東郷は自衛隊員だった。

重要な任務を終えて帰還する際に事故で死亡してガンツに呼ばれたのだ。

「道路が混んでおり帰還が遅れましたが、任務は無事完遂しました」

特殊部隊所属の東郷は自衛隊の中でも特別な立場に居た。

通常訓練は他の隊員と共にするが、特殊部隊員として諜報活動や工作活動のための技術も学ばされていた。

隊員は全員で5名。

単独での任務が多く、チームで動くことはめったにない。部隊名はガンズ。

奇しくもガンツと似た名前の部隊であった。

「御苦労であった。帰ってそうそうだが、次の任務を言い渡す。1月の準備期間の後任務に移れ。次の任務の詳細は-」

十三は東京チームで1人時間がとれず訓練に参加していなかった。しかし、戦闘に関するありとあらゆる技術を身につけている十三にとって一番大きな変化はスーツだけであった。

スーツの力の扱いにさえ慣れれば十三にとってガンツでの戦いに困ることはない。

十三はガンツでの戦いの後、常にスーツを身につけて行動するようになった。

それが高い任務成功率の秘密であり、後のガンズリーダーへの躍進の秘密であった。

Side 宗

宗は悩んでいた。

和泉のことについてである。

漫画では和泉は大量殺人をおこし、多くの人をガンツに連れて来てメンバー補充を行った。

宗としてはこれは何としてでも止めたいが、しかしこの時に連れてこられたメンバーによって多くの人が救われるのもまた事実だった。100を見殺しにして、その後に助かるであろう1000を取るか、100を助けて不確定要素を持ち込み、1000を危険にさらすか。その判断が付けられず、彩にも和泉の起こすであろう事件の事については話していなかった。

しかし、前回の戦いの時に出て来た星人。

あれは物語に出て来た星人とは違っていた。

そして、宗の介入により死ぬはずだった人達が生きている。これにより物語は変わって来るはずだ。

宗はもう物語通りに進むとは考えず、自分に出来ることを、自分のしたいことを全力でやった方がよいのではないかと考える。宗がしたいことは大量殺人を起こさせないことだ。

そのためには次の戦いで星人を逃さず全滅させて星人の存在を和泉に気付かせないことだ。

そう思い、物語改変の覚悟を決めた宗は彩に向かって話しかける。

「あのさ、物語について話してなかったことがあるんだけどさ」

宗は包み隠さず話す。

物語りの事も、自分の思いも、自分のやりたいことも

少しでも犠牲者を減らすために。

宗の戦いは始まった。

Side 玄野計

「お前の家に行っていていいか？」

玄野のクラスに転校生がやってきた。

和泉紫音。背が高く、長髪のどことなく加藤に似ている顔をした美系の男だ。

和泉は何故か玄野に興味を持ったらしく、一日行動を共にする。そして一日の終りに言った言葉がこれだ。

ちなみに和泉は転校初日から告白されて彼女を作っている。それを蹴ってまで玄野の家を見たいと言っただ。玄野は断り切れず、家に案内してしまう。

「パソコンないか？」

家に着くなり言った言葉がこれだ。困惑しつつパソコンを貸す玄野。和泉はインターネットを開き、とあるサイトへ飛んだ。

黒い球の部屋

そのサイトにはこう書かれていた。死んだあと黒い球のある部屋に飛ばされること。星人と呼ばれる敵と戦うこと。星人の情報や戦いの情報。そしてガンツのメンバーの名前。

「ここにくるのけいって書いてある。これはお前じゃないのか？」

宗の抜けた東京チームで1年間生き抜き、宗が来る寸前の戦いで殺された男、西丈一郎の忘れ形見が戦いの天才和泉とガンツを結びつけていた。

和泉はあるサイトに強烈な興味を抱いていた。

黒い球の部屋

そのサイトに書いてあることは荒唐無稽でとても信じられるような内容ではないのに、何故かこれが真実だと感じるのである。

このサイトを見つけた時に、引き出しにしまっていた黒い球を取り出し、見つめた。

この球はビー玉程の大きさの黒い球で、いつの間にか和泉のポケットに入っていたものだ。

和泉は過去の記憶がない。

いや、完全にはないわけではないのだが、どうしても思い出せない抜け落ちた期間があるのだ。

ある時、ベッドで寝ていた記憶はないのに、いきなりベッドで目が覚めた。

その時に外出用の服を着たままだったので変に思っていたら、黒い球がポケットに入っていたのだ。

その球はただのビー玉に見えたが、妙に和泉の心を引き付けた。そして、それを見ていたらいきなり球に文字が浮かび上がった。

またきてください

和泉は驚きとともに球を調べたが、何も妙なところは見つからず、その文字もすぐに消えてしまった。

それから、球を引き出しにしまい、時折その球を取り出して眺めながら日々を過ごしていたのだが、黒い球の部屋というサイトを見た時に思わずこの球の事を思い出したのだ。

和泉はすぐにこのサイトに夢中になり、毎日更新をチェックしていたが、ある日更新が止まった。

最後の更新の時に乗っていた生き残りの新メンバー3人の名前。
その中にくろのけいとあった。

和泉は転校することになって、新しい学校の自分のクラスの名簿を見ていた時に玄野計という名前を見つけた。

その名前を見た時に激しく興味を抱き、話しかけた。

そして玄野の家に行き、黒い部屋のサイトを見せながら玄野の事を観察する。

観察して玄野の動揺を見てとった和泉は確信を抱く。

このくろのけいは玄野計の事であると。

隠している以上この場でこれ以上の情報は得られないと考えた和泉はおとなしく引き返し、家に帰ることにする。

和泉はまだ気付かない。

引き出しの中にしまっていた球が文字を浮かべたのを。

たくさん人を連れて来てくだちい

第7話：それぞれの思惑（後書き）

今回は生き残りの東京チームのそれぞれのその後を書きました。

十三の設定についてはWIKIに重要任務を終えたあと帰還中に酔っ払いの車につつまれ事故死とあったので、一人で転送されてきたこととマンガで見せた強さから一人で都会での重要任務を遂行した「特殊任務を請け負う特殊部隊員である」という考えから設定しました。

部隊名のガンズはガンのように強力な者達的な意味で付けられたという設定です。

お読みいただきありがとうございました。

面白いと思ったら、評価・感想お願いします。

第8話：チビ星人

ジイ

宗が転送されたのは一番最後だった。

「宗くん」

彩が近寄って来る。

宗が部屋を見渡すと、全員スーツを着用していた。

あたーらしいーいあーさがきた

宗の転送が終わるとすぐに、音楽が流れて来た。

「今回は追加者が居ないみたいね」

「ああ。まあ、守ることを考えなくて良いと考えたら少しは気が楽になるな」

チビ星人

特徴：つよい 根にもつ

気にしていること：背の低さ

特技：人マネ 心を通わす

「チビ星人だ」

宗は思わずつぶやく。

チビ星人。

原作で玄野が一人戦い、取り逃がした相手だ。

取り逃がした1匹が復讐に来て、玄野の教室で虐殺をおこない、その際にチビ星人と椅子で戦った和泉に星人の存在を認識させて新宿大虐殺の事件へと繋げるきっかけとなった星人だ。

変身能力を持ち、身体能力が高く、連携もしてくるが、超能力で動きを止めれる宗にとっては組みやすい相手だった。

ここで1匹残さず倒せば教室での事件も新宿大虐殺もおこらない。彩と顔を見合わせ、うなずき合った宗は絶対に全滅させると決意を胸に、転送の時を待った。

時間は戻り、宗たちがチビ星人と戦う約2週間前。

玄野の部屋から戻ってきた和泉は黒い球が文字を映し出していることに気が付いた。

たくさんの人を連れて来てくだちい

この文字を見た時に浮かんだのは黒い球の部屋のホームページに書

かかっていた言葉。

“この部屋には死んだ者だけがいける”

「たくさんの人を連れてくる？…それは人を殺して連れて来いって
ことか？」

和泉は球の事を考えながら一日を過ごす。

次の日

学校からの帰り道、和泉は玄野が不良に囲まれて体育館の裏へ歩いて行くのを発見する。

(かつあげか?)

見つからないように和泉は不良たちの後をつける。

オラッ

不良たちが玄野を殴り始める。

しかし、玄野はまるで聞いた様子を見せない。

ダメージを感じていないかのように平然としている。

その光景を見ながら、和泉は思い出していた。

黒い球の部屋に書かれていたスーツの性能の事を。

不良達から解放された玄野の後を付ける和泉。

玄野はそのまま教室へと戻っていた。

「よつつ、どこに行ってたんだ？」

それを見た和泉は玄野に話しかけながら、玄野の服を確認する。襟の隙間から服の下に着たスーツの存在を確認する。

（本物だ）

和泉は黒い球の部屋が本物であることを確信し、黒い球が黒の部屋に關係するものと確信する。

（じゃあ本当に多くの人を連れていけば俺も）

和泉の目的はただ一つだ。

“またガンツの世界に戻りたい”

和泉は何もかもを持っていた。

容姿も身体能力も全てが完璧で、であるがゆえに退屈を感じていた。そんな和泉が過去に経験したガンツの世界。

ギリギリの戦いの中で生きていることを強く感じられ、自分の生きる場所はここだとまで考えた世界。

記憶を亡くしたはずの和泉だが、黒い球の部屋を見るうちに断片的に記憶と感情が蘇り、そこに行きたいと強く願うようになっていた。和泉は決意する、多くの人を連れていくことを。

そのうえで死ぬのなら、ガンツの世界に行けるはずだと確信して。

多くの人を道ずれにして死ぬ方法。

高校生でも手に入る武器。

そんな考えの中、たどり着いたのは爆弾だった。

インターネットを開けば爆弾の作り方を調べるのには時間がかからなかった。

材料もインターネットを使えば集めることができる。

和泉は爆弾製作を決めた。

「一人になるな！連携して倒していけ！一匹一匹確実にだ！」

戦いが始まって30分。
敵の数はぐんぐんと減って行った。
残すは3匹のみ。

宗は超能力を使い、3匹の動きを止めると共に、レーザーサーベルを一線する。

チビ星人の胴体が別れる。

確かな感触とともに転送が始まる。

（やった、これで虐殺事件はおこらない。止めることが出来たんだ！）

宗は喜びとともに、転送されていった。

和泉が爆弾製作を開始してから2週間後。

和泉は作戦決行のため、新宿に来ていた。

準備は自分に足が付かないように入念におこなった。

爆弾の材料もいくつものパソコンを経由して、時期をずらして、それぞれが他の用途に使うとカモフラージュした上で、別の人物に届くようにしていた。

この2週間を使って大量の爆弾を新宿の各所に仕掛けていた。

より被害を大きくするため、その爆弾が仕掛けられているのは建物の急所となるような場所や人の集まる場所などに設置していた。

決行の時。

一番威力が高い爆弾の入った鞆を抱えながら和泉は携帯を見つめる。ある番号にかけた時、全ての爆弾が一斉に爆発するように仕掛けて

ある。

準備は万端だ。

震える指で和泉は番号を押していく。

ボタンを押すたびに緊張が高まるが、その手は止まらない。

（俺はあの世界に戻るんだ）

そして、最後のボタンに手をかけた。

しゅくん 35てん

あやちん20てん ごうけい61てん

全員の点数発表が終わる。

「今回は被害なく倒せたな」

「訓練のお蔭だな」

「宗君、全員倒せたね」

「ああ、これでもう大丈夫だろう」

勝利を喜びあう仲間達。

ジイ

ジイ

ジイ

ジイ

弛緩する空気の中、唐突に大量のレーザーが照射される。
現れたのは10人を超える人間達。
予想外の光景に言葉を無くすチームメンバーに追い打ちをかけるか
のように音楽が鳴り響く。

あたーらしいーいあーさがきた

「なっ！」

「なんでまた？」

音楽によって正気に戻ったのか、疑問の声を上げる面々。

そんな中、宗と彩だけは一人の人物を見つめて一つの思いに捕わ
れていた。

（止められなかった）

視線の先に居たのは、長髪の美男子、爆弾魔、和泉紫音の姿であ
った。

第8話：チビ星人（後書き）

遅れてすいません、更新しました。

ちょっと私生活が忙しくなってきたので、暫くの間は更新が遅れます。
申し訳ありません。

ここまでお読み下さってありがとうございます。
面白いと感じたならば評価・感想をお願いします。

第9話：部屋にて

“止められなかった”

その思いが宗を責め立てる。

和泉と多くの新メンバー達。

これが意味するのは和泉による大量殺人がおこってしまったということだ。

「どこだここは？」

「なんだこいつら」

「ミッションは終わったんじゃないの？」

「何がおこってるんだ？」

部屋の中は混乱に包まれている。

宗は和泉から視線を外し、他のメンバーを見渡す。

いつまでも睨んでいるわけにはいかない。

いつまたミッション開始の合図が来るかわからないのだから。

「落ちつけ！」

宗は声を張り上げて場を鎮める。

「なぜ連続でミッションになったのかわからないが、メンバーが増えてもう一回ミッションを開始するだけだ。動揺するな。それに、人数が増えたということは強力な敵が出てくる可能性もある。動揺してたらやられるぞ！」

そう言つてスーツ組を鎮めた後、新メンバーに振り返る。
「アーマーにびびられたので、仮面を外してから話しかける。」

「突然この部屋に移動していてわけがわからないかもしれないが、俺たちはこの部屋の事を知っている。詳しく説明するには時間が足りないが、後で必ず説明するから、今は俺たちの指示に従ってくれないか？」

「なっなんなんだあんたらは」

「なんでお前の指示なんかに従わなくちゃならないんだ」

「今説明しなさいよ」

「ミツシヨンって何なの？」

宗の言葉に反発してくる人々。

いきなりわけのわからない状況に巻き込まれて混乱しているのもあるが、宗がまだ若い年齢であることから強気の状態になったということもあるだろう。

「信じられないようなことを言うが、これから俺たちは生き残るために怪物と殺し合いをしなくてはならないんだ。それがミツシヨン。準備が出来ていようといなかるうと、戦いたくなくても関係なしに戦場に送られて戦わされる。これからラジオ体操の音楽が流れて、その後にあの球体が開いて中からスーツと武器が出てくる。スーツは身を守ってくれるものだ。俺たちが守るから、死にたくないなら俺たちに従って欲しい」

その言葉に再び反発しようとする人々。
信じられないし信じたくないのだろう。

宗を妄想家のコスプレ野郎として攻めようとする。

ジィ

「きゃあああああああああああああ」

新しく一人中年の男が転送されてきた。

転送の最中は体を輪切りにしたかのように中身が見える。

全員一緒に転送されてきて転送シーンを見ていなかった女性がその転送をみて叫ぶ。

「ガンツ!?ということは私は死んだのか?」

「っ!ガンツを知っているのか?」

転送されてきた男は開口一番ガンツのことを口走る。

それを聞いていた宗は驚きに目を見開く。

なぜガンツのことを知っているんだ?

「むっメンバーか……アーマーということは相当に強いな。隣に居る女も装備からして強そうだ……そうだな、これをチャンスととらえるか。あの爆発では私の会社の被害は量り知れん。だとすると大きく後れを取ることになる。巻き返すためにはこの機会を利用して……」

男は一人つぶやき続ける。

「おいつ聞いているのか?」

宗が再び問いかけて男に詰め寄る。

あたーらしいーいあーさがきた

音楽が流れる
開始の合図だ。

「つく、始まったか。もう時間もないな。一体何者なんだあんたは？」

「ふむ、私が何者か知りたいようだな。私は大東金一だいつかねいち。それ以上の事はお互いに生き残ってから話すことにしようではないか。今は時間がないかろう？」

「…確かにそうだな。もう時間がない。俺は天道宗だ。それ以上の事は後で話そう」

ロボット 星人

特徴 早い

好きなモノ 操縦

口癖 ガーガガ、ピガガガ、ガガピーガー

「ロボット星人？」

「なかなか手ごわそうな相手だな」

ガンツの情報を読んでいるとガンツが開く。

「これがさっき言っていたガンツの武器だ。この表示されているロボット星人が今回のターゲットだ。転送される前に身を守るスーツだけでも着てくれ。もういつ転送されるかわからない。転送された先は外だけど、ミッションが終わる前に戦闘エリアから出て逃げよ

うとしたら殺されるんだ。ミッションでは何が起こるかわからない。だから身を守るスーツだけでも着てくれ」

転送から続く出来ごとに混乱している新メンバー達。

そんな中、ガンツのことを知っている和泉と大東だけが動じずスーツの入ったケースを持ち着替えに行く。

それを見た何人がケースを持って着替えに行く。

やはり転送のような非現実的な光景を見たことと、宗が言っていた事が次々におこったことで信じることにする人もいたようだ。

それを和泉と大東が真つすぐスーツを手にしたことで後押しされて着替え始める。

そして、それを見た他のメンバーもあわててケースを持ち着替えに出していく。

集団心理というものは強い強制力を持つのだろう。
全員着替えに行かせる事が出来た。

「今回の敵は機械を操る可能性が高い。そうなると足があった方が
良いかもしれない。バイクを持って行こう」

訓練をつんだいつものメンバーに告げる。

「…俺が持つて行こう」

「私も持つて行くわ」

十三と聖の二人がバイクの部屋へと向かう。

それを確認した宗は武器を点検しながら待つ。

まだ見ぬロボット星人との死闘に備えて。

第10話：工場地帯

ジイ -

転送された先は工場地帯だった。

いくつもの工場が並んでいて、駆動音が聞こえる工場もある。

「全員揃ってるか？」

「あの長髪の男以外は全員いるぞ」

宗の問いに大東が答える。

宗が転送された時には和泉を除く全員が固まっていた。

和泉の単独行動は覚悟していたので、意識しないものとする。

和泉ならば一人でも大丈夫という思いもあったが、和泉を気にするより先にここに居るメンバーを纏めるのが大切だったからだ。

「単独行動か…探しに行きたいが、今はこっちが優先だな。これから戦いに移る。先ほどの説明とこの転送で信じてもらえたかと思うが、星人との戦いは冗談でもなんでもなく、本当にやらされるんだ。このマップを見てくれ」

そう言っつてマップを掲げる宗。

「ここに表示されている四角のエリアの外に出たら、頭を吹き飛ばされて殺される。殺される前に警告音が鳴るので、変な音が鳴ったらすぐに引き返してくれ」

頭が吹き飛ばされると聞いた新メンバーに動揺が広がるが、無視し

て話す。

「このマップ記されているのはエリアだけでなく敵の位置もだ。これを見ながら戦いに行く。戦うのは経験のある俺たちが主に担当する。はぐれないように俺たちの後をついてきてくれ。見えないところに行かれたら守れない。時間がないから俺たちはもう行く。死にたくないならついてきてくれ」

そう言っつて宗は工場の中へと入っていく。

色々な声や意見が飛び交い、場がざわついていたが、旧メンバーが宗について行くのを見て、慌ててついて行く新メンバー達。

色々言いたいことがあっても、わけのわからない状況の中、先導するものとはぐれたくない、一人になったら本当に死ぬかもしれないという恐怖が付き従わせたのだ。

こうして、新メンバー達は宗たちについて行くことになった。

S i d e レイカ

下平^{しもひらねい}玲花は空を見上げながら恐怖に震えていた。

玲花は人気グラビアアイドルだった。

グラビア撮影の帰り道。

休日前ということで購入物をして帰るのが遅くなってしまった。

お蔭で帰宅ラッシュに巻き込まれて、人ごみの中をゆっくりと進むことになる。

少しじれったい思いをしながらも明日何をするのかを考えながら帰

宅していた時に、それはおこった。

バンッ

何かはじけるような大きな音とともに辺りが明るくなる。

驚き何が起こったのを見ようとした時に、再び同じ音が聞こえる。

バンッバンッバンッバンッバンッバンッバンッバンッバンッ
バンッバンッバンッバンッバンッバンッバンッバンッバンッ
バンッバンッバンッバンッバンッバンッバンッバンッバンッ
バンッバンッバンッバンッバンッバンッバンッバンッバンッ

連続して発生する音と風と熱。

それが爆発だと気が付いた時には辺りがパニックになっていた。

慌てて逃げ惑う人々。

しかし、爆弾はあらゆる個所に仕掛けられているようで、逃げた先で爆発に巻き込まれる人も出てくる。

逃げようとする人、戻って来る人。

人の多さに身動きが取れなくなっている時、中年の女性が上を指差して絶叫する。

その指先を見て、玲花は絶句する。

ビルが自分の頭上に倒れて来ているのだ。

走馬灯のようなものを見ながら、頭上に落ちてくるビルを待つしか出来なかった。

気が付けば、妙な部屋の中にいた。

見慣れない人たちが大勢いる中で、一人見知っている人が居た。

絶叫しながらビルを指差していた女性だ。

彼女を見て、自分の見に降りかかったことを思い出す。

その途端、全身が震えだし、身を抱えてしまつ。ビルに倒れられて生きていられるはずがない。死んだはず、自分は死んだはずなのだ。

ならばここはどこだ？

玲花の頭には天国という言葉が思い浮かんだ。

怖い怖い怖い怖い。

自分が死んだことを認めたくなくて震えていると、声が聞こえる。

「落ちつけ！」

その言葉に顔をあげて声の方を見ると、全身真っ黒の鎧のようなものがいた。

「ひっ」

その姿に怯えていると、鎧は仮面を外した。

人間の男の姿だ。

それによって、少し安心して男の話を聞いていると信じられないようなことを聞く。

ミッション、怪物、戦場

現実離れた状況と言葉に理解が追いつかないでいると、男が一人転送されてきた。

その男の転送を見て、先ほどの話を、鎧の男の言葉を信じてみようという気になった。

そして、スーツを身にまとい、武器を手を取った。

転送された後も男の説明の後、迷わずついでに行くことを決めた。

この男の言うことなら信じられそうな気がして。

Side 宗

宗が向かった先は工場の中だった。
広い工場だ。死角が多く、襲撃を受けやすい。

「ここに敵が居るはずだ。死角が多いから気をつける」

そう言って先に進んで行く宗たち。

コツコツコツ

足音のようなものが聞こえて、足を止める。

音の方を見ると、暗闇から巨大な人のようなものが現れる。

鎧を着たような格好をした10のロボットだ。右手に剣を、左手に銃を装備している。

ウィーン

5体のロボの目が赤く光ったかと思うと、高速で目の前までやって来て切りかかる。

「くっ」

ガンツの刀で対抗するメンバー達。

ロボの力は強く、鋭い攻撃も相まって、苦戦する。

宗は一人、目の前に居たロボを素早く切り倒して他のメンバーの援

護に回ろうとするが、残っていた5体のロボの目が光り、銃を構えたのを見て考えを変える。

レーザーサーベルを捨てて、両手を前に出す。

アーマーの手の部分にはレーザーを発射する砲門がある。

無数のレーザーを発射して、銃撃が来る前に5体とも葬り去る。

再びレーザーサーベルを掴み、周りを見渡すが、その時にはもうメンバー達がロボを倒していた。

「初手から強いのが出て来たな。どんな強敵が出るかわからないから注意しろ」

そう言つて先へ進む宗とそれに続くメンバー。

初めての戦闘に怯え、戦闘に巻き込まれないように離れて付いて行くこうとする新メンバー達。

新メンバーの距離が少し離れた時、それはやってきた。

ガシャンッ

天井付近の窓を割つて入ってきたのは狼の形をしたロボットだった。左右3体ずつの計6体。

その口の中には銃が仕込まれている。

離れて歩く新メンバーの頭上に弾丸の嵐が吹き荒れた。

第10話：工場地帯（後書き）

やっとレイカだせたー！

初期案でヒロインだったレイカさんです。

30話近くやってやっと出せました。

長かった…

忙しい時間の息抜き変わりに書いているので、文字が少ないかもし
れません。

12月20日くらいまでは忙しいので亀更新です。
最低でも週1を目指して頑張りたいです。

お読みいただきありがとうございました。
面白かったら評価・感想をお願いします。

第11話：有喜の残したモノ（前書き）

今回も短いです。

第11話：有喜の残したモノ

ガシャン

頭上からガラスの割れる音と共に振って来る弾丸。
弾丸の嵐に蹂躪される。

迫って来る弾丸は逃げる暇を与えなかった。
なすすべなく殺されていく。

そんな未来を描くメンバー達の中、違った事を考える2人が居た。

「ハアッ」

一人はサングラスをかけた男、さかた けんぞう坂田研三。
もう一人は学生服を着た少年、さくらい ひろこ桜井弘斗。

二人は手を弾丸の方へと向けると、気合と共に“何か”を放った。

坂田は身を守る壁を意識して手を掲げ、桜井弾丸を押し返すよう意識して手を掲げた。

二人は意図していなかったが、桜井の“力”が弾丸の威力を弱め、坂田の“力”が弾丸を防いだ。

図らずしてなったコンビネーションにより2人の近くに居た人達への弾丸は防がれた。

…近くに居た人のみであったともいえるが。

「キヤアアアアア」ッ

「ギャッ」

「ガッ」

スーツを着ていてもスーツの耐久度を超える攻撃を食らえばスーツ

は壊れ、スーツの防御は無くなる。

弾丸の威力は3発でスーツを壊す程に高いものだった。

弾丸の雨は2人の守るエリアの外に居た人達を蹂躪していく。

そして、2人の張るバリアもいつまでもは持たない。

血管が浮き出て鼻から血を流す2人。

力の正体は超能力。

宗が得た力と同じで使ったびに体内に強い負担を強いる。

それを強力な弾丸を防ぐまでに強く使っているのだ。

長くは持たない。

しかし、短い時間であったが、稼いだ時間は十分な時間であったともいえる。

宗達に戻って来るまでの時間として。

「左を頼む」

そう言い残して駆けだした宗は駆けながらHガンを構える。

面制圧が出来るこの銃は集団戦に強い力を発揮する。

メンバーに当たらないように狙いをつけてから、ガンを放つ。

ドゴン

ガンは地面に着地していたロボットたちを押しつぶし、地面の染みへと変える。

勝利の余韻を味わう時間もなく、すぐに反対側を見るが、同じようにHガンを撃つた彩によってロボット達は倒されていた。

…ただしこちらはロボット以外の死体も居たが。

「5人やられたか…」

5人の死体と6人の怪我人。

被害は大きかった。

「怪我した人は急いで止血してくれ！闘い終了時に死んでさえいなければ治るんだ」

宗はそう声をかけるものの、すぐに動けた人はいない。

弾丸の雨にさらされた恐怖。

目の前に居た人が死体となって横たわっている恐怖。

自分が死んでいたかもしれない恐怖。

恐怖で縛られて動けないのだ。

動かないのを見て怪我をしているからだと考えた宗は近くに居た人の肩をたたく。

怪我人の処置を頼もうとして。

「ちっ近付かないで！！」

そんな宗に帰ってきたのは拒絶の言葉だった。

宗は拒絶されたことよって動きを止める。

そんな宗を見て、拒絶した女性が体を震わせながらも言う。

「あつ、ごっごめんさい。わっ私助けてもらったのにこっ恐がつて」

「あーいや、こちらこそ悪かった。あんなことがあったばかりなのに不用意に肩をたたいたりして。怪我人をお願いしたかったただけなんだが」

「あつそっそうよね、怪我人が居るんですものね」

「ああ、傷口を縛るだけで良いから、お願いできないか？」

宗は周りを見渡すように言葉を言う。

最後の言葉は周りのメンバーにも放ったものだ。

女性の叫びから女性と宗に視線を向けていた他のメンバーが何かに気づいたようにハツとした後、怪我人に近寄っていく。

そこに女性も混ざるのを見届けた後、宗は坂田と桜井の元へ向かう。二人は荒く息をしながら頭を押さえたまま突っ立っていた。

「さっきの手をかざしていたのは超能力か？」

単刀直入に聞く宗に二人は驚き混じりの顔を向ける。

「俺も超能力を使えるから知っているんだ。所で、あんたが坂田か？」

「なっ…なんで俺の名を？」

「俺に能力をくれた奴が斉賀って言うんだが、そいつから東京の坂田ってやつに超能力を写した事があるって聞いてたからな。さっきの能力を見てそうじゃないかと思ってな。そうか、さらに1人能力を写していたんだな」

「有喜さんの知り合いか…妙なところで会ったもんだ」

「まっただ。色々と話したいところだが、あいにく今は戦場だ。

お互いに生き残ったらその時に詳しく話そう」

「生き残ったらか…戦場と言うのは本当みたいだな」

そう言っつて被害にあつた人達を見る坂田。

その坂田を横目に宗はメンバーを見渡し、言う。

「今ので分かったと思うが、離れると守るのが大変になる。被害者を出るだけ出したいくないんだ。離れないで付いてきてほしい。時間がないから先に進むぞ、今回はどんな強敵が出るかわからない。注意して行こう」

そう言って歩いて行く宗。

それに付いて行くメンバー達。

闘いはまだ始まったばかりであった。

第11話：有喜の残したモノ（後書き）

何とか投稿できた。

次に投稿するのは忙しいのが終わってからになると思っているので、最悪10日以上後かもしれない・・・；）

更新が遅くなっていますが、完結するまで頑張るので、よろしくお願ひします。

お読み下さってありがとうございます。

面白いと思ったら評価・感想をお願いします。

第12話：扉の向こうで

薄暗い施設の中を静かに歩く。

先ほどの惨劇のせいかわたまたま黙って進んでいる。暫く進むと、扉を見つめる。

「次の部屋か：何が起るか分からない。気をつけるよ」

注意を促して、扉を開ける。

「なっ！」

視界に入るのは広い部屋と一面に並ぶロボット兵団。

最初に襲撃を駆けて来た鎧を着たような格好をしたロボが整然と並んでいる。

鎧の色は赤く、それは血を想像させる。

そのロボの後ろに青い鎧を着たロボが居る。

そのロボは赤鎧ロボ5体ずつの後ろで指揮者であるかのように指揮棒を持っている。

そして、そのさらに後方に10メートルはあるであろう巨大な1体のロボとそれを守るように配置されている3体のロボが居る。

「80点、80点、90点、100点：なんて奴らだ」

奥に居た4体のロボを分析して戦慄する宗。

すると一番奥に居た100点のロボの目が光る。

「先ほどは良くもわが兵を潰してくれたな」

「なっ！喋れるのか!？」

「喋れぬと宣告が出来んであるっ?」

「宣告だと!？」

「ああ、死の宣告だ。やれ」

100点のロボの言葉に一齐に動き出す兵隊ロボ。それを見た宗はレーザーガンを取り出し、撃つ。

ジュツ

レーザーにより赤の鎧達を溶かしていく。

「S1、行け」

「ハッ」

90点と表示されていたロボ“S1”が動き出す。

レーザーの隙間を縫ってあっという間に宗の元へと駆けると、レーザーを持つ手を狙う。

「ぐあっ」

「フンッ」

手に持つレーザーを叩き落とすと同時に腹部へ掌打放つ。

その一撃により吹き飛んだ宗が、壁を突き破って部屋から出ていく。それをS1が追う。

部屋に居なくなった一人と1体。

宗のレーザーにより数が減ったとはいえ、未だに敵は多く残っている。

指揮棒を持った青鎧が棒を振る。

すると赤鎧達が一斉に襲いかかってくる。

「戦えない人達はさっきの部屋に戻って！私たちが食い止めるから！」

そう言っつてHガンを撃つ彩。

3体を同時にしとめる。

それを見て呆けていたメンバーも一斉に戦闘態勢に移る。戦争が始まった。

「クソッ」

隣の部屋まで飛ばされた宗は起き上がりざまにXガンを撃つ。

初期の銃だが、小さくて持ち運びやすく、威力も高いことから未だに使用している銃だ。

しかし、素早い動きでかわされる。

ここまで飛ばしてきたS1は人型。

大きさは宗と変わらないが、非常に動きが速かった。

かわしながら反撃とばかりに全身から砲口を出し、一斉射撃をしてくる。

ガガガガガガガガ

ただの弾丸では後ろの壁は削れても宗の堅い装甲は削れない。

気にせずに一気に近寄って切ろうとレーザーサーベルを構えて近づく。

S1は撃ちながら口を大きく開く。
瞬間、悪寒がして右に飛ぶ。

ドガンツ

大破した壁と進路を削りながら進んだ何か。

宗は震える。

死んでいた。

悪寒に従い横に飛ばなければ確実に死んでいた。

強くなつてから久しく感じていなかった死の予感に汗が止まらない。

「うっうおおおおおおおおお」

恐怖を振り切るように駆けだす。

攻撃は直線。

威力があつても口に注意をすれば避けられる。

そう考えた宗は再びS1の元を目指す。

S1も剣を取り出し迎え撃つ。

カカカカカカカカカカカカ

その速度は人の領域を超えていた。

スーツとナノマシンによつて強化された肉体と感覚をさらに超能力で強化して漸くS1と切り結ぶことが出来ている。

目にもとまらぬ速度で打ち合いながら宗は隙を探っていた。

しかし、いくら切り合つても隙が見当たらない。

ならば作るまでだと考え、宗は力を込めた一撃を放とうとする。

しかし、力を込めた瞬間を狙われ、逆に隙を突かれた形になる。

レーザーサーベルを剣で抑えながらも片方の手を使つての掌打。

「ガッ」

レーザーサーベルをはじかれ、最初に食らった一撃と同じように吹き飛ばす宗。

しかし、今度は追い打ちが待っていた。

口を開くS1。

それを見た宗は体勢を整えつつも右手を引き銃口を開く。

「負けてられつかああああああ」

右手にエネルギーを集中させ、全力でレーザーを放つ。

それは拡散されたレーザーでなく一極集中の一撃。

空中で激突する砲撃と砲撃。

中央で均衡したそれらはエネルギーの塊となって爆発する。

「グッ」

爆発の衝撃で口から血を流す宗。

しかし、ダメージを無視して左手を前に出す。

宗は見ていた。

最初に口から砲撃をした後にS1の動きが数秒止まっていたのを。

大きな隙が出来ていたのを。

左手から超能力を使いS1の動きを縛る。

早い動きのせいで捉える事が出来ていたが、ついに捕えることに成功する。

強靱な体を捕えることで宗の肉体に強烈な負荷がかかる。

左手でとらえつつも宗は右ひざに付けていた強化捕獲銃、星ガンを取り出し、放つ。

何発も何発も連続で放ち、動きを封じる。

「カチッ」

引き金を引いてS1を送る。

動きの取れないS1が頭から順に消えていった。

それを見送った宗は膝をつく。

超能力はもろ刃の剣。

相手が強ければ強いほど縛るのに必要な力は増え、体を蝕む。

使い切ったレーザーのエネルギーが補充されるのを待ちながら、宗は息を整えていった。

戦場は激しさを増しながら進んで行く。

メンバーは彩を中心にしながら敵を討っていく。

敵が軍ならこちらも軍だ。

扉を守るように固まりながら、彩たちは戦う。

「あの女を消せ、P1」

「ハッ！」

P1と呼ばれたロボが動き出す。

P1は2メートル程の大きさで3メートルはある巨大な青龍刀のような剣を持っている。

「どけい！」

そのロボは近くにあった柱の上下を切り落とし、巨大な棒にすると、それを持ち彩の元まで駆けると、それを思い切り振るう。

横から迫る棒の一撃に、避けれないと判断した彩は、その棒の横に水平に着地するかのように両手足を付け、力の流れに逆らわず、自ら飛ばされていった。

宗とは反対の方向に飛ばされた彩も壁を破って隣の部屋まで飛ばされる。

それを追っていくP1。

メンバーは宗と彩の2人を欠いた状態で戦争を再開する。

そこには精神的にも追い詰められつつあるメンバーの顔があった。

ドガン
ズガン

扉の向こうから聞こえてくるのは激しい戦闘の音だけ。

「師匠、僕たちも戦った方が良いんじゃないですか？」

「ここでの戦いを知らないのに戦えるのか？」

「それは…」

二人の会話を聞きながら迷いを持つモノがいた。
かせ だいざえもん
風大左衛門。

強さを求めて、強敵との戦いを求めて武者修行を続けていた彼であるが、銃器を持つモノとの戦闘経験はなかった。

スーツの力を身を守るモノとしか認識していない彼にとって、人型とはいえ、戦闘能力を見せ付けられたロボの集団と戦えるのかとい

う疑問があった。

それゆえに新メンバーについてきたが、部屋に戻り、戦うべきではと葛藤していた。

「ガルルルルル」

その葛藤は直ぐに止む。

狼型のロボの群れが現れることによって。

「なっなんだよこいつら」

「さっきのロボだわ」

「ヒッ、こっ殺される」

安全だと思っていた部屋での敵襲。

戦闘経験の無いメンバーには恐怖であった。

そんな中立ち向かう3人の姿。

「逃げ場ないみたいだな」

「僕と師匠ならやれます」

「……いくばい」

櫻井、坂田、風の3人は狼ロボ達に向かって歩みゆく。

一斉に襲いかかってくる狼ロボ。

「フンッ」

「うおおおおお」

「ハア」

3人は守るように前に出ると、固まって狼と戦う。

風が殴って、櫻井と坂田は超能力で潰していく。

「こいつら胸が弱点だ！腹辺りを狙え！」

「はい、師匠」

「むう！」

スキャンで弱点を探り、1匹1匹倒していく。

しかし、数が多すぎる。

傷は増えていき、体力も減っていく。

そして、ついに狼に横を抜かれる。

「ぎゃあああああああ」

「NO! Help me」

戦えないメンバー達に襲いかかる狼。

それを助けに行きたくても、ギリギリのところまで戦っている3人にはどうしようもない。

「足の速い犬だな」

絶望の雰囲気の流れる中、扉を開いて部屋に入ってくる者が居た。

「おとなしく切られてろ」

男は刀を伸ばして円を描くように振るう。

キンッ

狼達の体が2つに別れる。

薙ぎ払うようにして全てを切ったのだ。

「そいつは俺の獲物だ」

男はそのまま残った狼を切りに走る。

ザシユザシユザシユ

あれだけ苦戦した狼達はあつという間に男に切られていく。

「戦闘音がするな、この扉の向こうで戦ってるのか？」

皆が動けないでいる中、一人扉へと向かう男。

男の名前は和泉紫音。

戦闘の天才が闘いに加わった。

第12話：扉の向こうで（後書き）

久しぶりの投稿です。

やっと一番大変なのが終わって少し楽になったので投稿しました。でも、年内はまだまだ忙しいので、余り更新速度は上がらないかもしれません。

お気に入り100件超えました。

目標にしていた100を超えられた事本当に嬉しく思います。

次の目標で総合評価500越えを目指して頑張りたいです。（評価点+お気に入り件数×2が総合評価です）

ここまでお読み下さってありがとうございます。

面白いと思ったら評価・感想をお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1921x/>

GANTZ ~ like a rolling stone ~

2011年12月18日00時47分発行